誰が為に華は散る【鉄血のオルフェンズ外伝】

deburi

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その日、狭い世界に閉じ込められていた少女アスナ・マリーメルは、暗礁宙域で蠢く鋼鉄の巨影――――ガンダムアスモデウスと邂逅した。

ひょんなことから海賊として働くヒューマンデブリたちの所有者となってしまった主人公が、彼らとともに生きる場所を探すため成り上がっていく物語です。原作二期の少し前から始まり、主人公たちも原作の展開に絡んでいくようにする予定です

目次

第1部：暗礁宙域編
第1話：華、燃る（前編）――1
第1話：華、燃る（後編）――15
第2話：アスモデウス――26
第3話：あの日からずっと――37
第4話：所有者として――47
第5話：理想の戦争（前編）――61
第5話：理想の戦争（中編）――77
第5話：理想の戦争（後編）――93
第2部：鉄華団編
第6話：導く者たち――109
第7話：陰謀の渦中で――131
第8話：鉄華団の悪魔（前編）――148
第8話：鉄華団の悪魔（後編）――167
第9話：命を叫ぶ声（前編）――184
第9話：命を叫ぶ声（後編）――203
第10話：鮮血の末に――219
第11話：アスナの決意――235
第12話：親友（前編）――251
第12話：親友（中編）――268

第1部：暗礁宙域編

第1話：華、燃る（前編）

0

燃え盛る炎の中、少女は手を伸ばした。

「死にたく……ない。怖いよ……誰か、誰か」

屋敷の中を漂う煙は金髪の少女の小さな体を瞬く間に包み込み、すべてを焼き尽くすそれは迫っていた。煙を吸いすぎて意識が朦朧となっていくなか、それでも赤いカーペットの上を這い続ける。

自分の皮膚が炎に飲み込まれていく。

人間は死が迫る状況になればなるほど、口数は少なくなっていくものだ。死にたくない、痛いよ、熱いよ、助けて助けて助けて……思考の中では何度も叫んだ言葉も、口に出すことができないまま衰弱していくのだ。

「……」

それでも手は動いた。右手で親友の誕生日カードを掴み、こればかりは何としてでも燃やしてたまるものかと抱きしめる。この狭い世界で唯一、心を通わせることのできた

人。その人を想って慣れない色鉛筆を使い、精一杯書いたもの。

「あす、な……」

左半身が炎に包まれながらも絞り出したのは、親友の名前。

騙し合い、嘘、建前の蔓延する世界で唯一信じられる――その人に向けて書いた手紙が炎に飲まれていくのは我慢ならなかった。

これだけは。

これだけは。

これだけは。

少女――花咲レゴリスは炎に包まれて爛れた左手を伸ばした。それは人間が死ぬ寸前の動作であった。体の節々が勝手に動く、神経が溶けていく、思考が消えていく。

花咲が死ぬ寸前、彼女は爛れた左手に微かな感触が伝わった。

光が消えた白い左眼に映ったのは――。

「ア……」

1

アスナ・マリーメルは暗礁宙域を漂う強襲装甲艦の中で、くぐもったガラスの向こうに映るデブリを眺めていた。

手入れの行き届いた艶やかな黒髪と白磁のような肌、ヒラヒラのついたカッターシャツにチェック柄のミニスカート。顔立ちも17歳という年齢に似つかわしくない、ジュニアハイスクールに通っていたほうがしっくりくる幼いものであった。女性の気品より可憐さを強調した服装が余計にそういった幼い少女な雰囲気を高めている。

ガラスに映る自分の姿はまるで、男の目の保養のためだけに着飾られたものであり、アスナは嘆息せずにはいられなかった。

事実、これはアスナが好んで着ている服ではない。許嫁が可愛いから着ろと渡してきたものだ。拒否すれば許嫁との関係にヒビが入り、そうなれば親からまた折檻を受ける。だから着る。

アスナの生きる世界では、男こそ法律であり、男こそ女が幸せになる唯一無二の手段なのだ。

「お父様が私をこんなところに連れ出すなんて……あいつの言いなりになっているだけじゃないの」

ここは300年前の大戦、厄祭戦時代の遺物が今でも見つかるという宇宙の墓場。着飾った女が来る場所ではない、とアスナ自身も自覚していた。では何故、自分はここにいるのか。

答えは簡単。美しい女性を隣に置いておくほうが、男が栄えると考えている俗物がい

るせいだ。
「やぁ、こんなところにいたのかい、アスナ」
俗物がきた、と露骨に嫌な顔をため息とともに吹き飛ばし、作った笑顔でアスナは返事をした。
「はい。どうにも人が多いところは苦手で」
アスナの隣にやってきたのはライオネル・ランスローという、こんな場所に似合うはずもない綺麗すぎる真っ白のスーツを着込んだ男だった。金髪の大男であったが、筋骨隆々とは程遠い体格をしていた。顔立ちも彫りが深く細い目をしており、彼の狡猾な性格が見事に現れていた。
「こういう船で働いているのは、ろくにシャワーも浴びていない汚れたヒューマンデブリどもが殆どだからな。もう少し我慢してくれないかい？」
「はい」
アスナの父は宇宙における運送業を行う会社の社長だ――――というのは表向きで、実際はヒューマンデブリを使った海賊行為を行っている。月輪の鷹団、といったか。民間宇宙船を見つけては、通行料と称して積荷を強奪している。ろくな護衛もない民間宇宙船相手に、多数のモビルスーツをもって威嚇するなどと大人げないことをしていた。
そしてライオネルはコロニーで有名な資産家であり、アスナの父親と手を組むことで

美味い汁をすすろうという狐のような男だ。つまるところアスナは、ライオネルと父親が協力するための理由付けでしかなかった。ついでに言えば人質のようなものか。

「今回は通行料として頂いた積荷や、デブリ帯で発見した骨董品の競り市も兼ねているからな。屋敷で家事をしているだけじゃ退屈だろう。こんなところでもいいから、外の空気は吸っておかないと、と思って君を招待したんだ」

嘘だ。

ライオネルのその笑顔の裏に、アスナは強大なエゴを感じ取った。

その時、アスナはガラスの向こうの暗礁宙域を駆け抜ける一筋の閃光を見た。モビルスーツか。中に本物の巨人で入っているのかと思うほど人体に近い滑らかな機動で、デブリを避けていた。

「阿頼耶識、ですか」

「そうだね。認めたくないが、あれを一番上手く乗りこなせるのはヒゲありの宇宙ネズミどもだから」

ライオネルは少し悔しそうにそう言った。どこか自分もあれに乗って戦いたいと思っているような口調で、野心というより子供の駄々のようにアスナには思えた。

「あれは普通のモビルスーツとは違うようですね」

「ちょうど今回の競りでも一番の高値がつくといわれている商品」

双眼の頭部には二本のブレードアンテナが伸びており、白と青を基調としたカラーリングが施されていた。滑空砲を右手に持っており、それで周辺に浮かぶ大小さまざまなデブリを一発も外すことなく撃ち抜いていく。

「ガンダムフレームだよ」

その名前をアスナは知っていた。部屋に篭ってやることなど、勉強かバイオリンぐらいしかなかったゆえに、アスナは博識であった。それも、いい大学に入るためではなく、男たちの話題についていけるようにという父親の英才教育によるものだが。

「７２機しか生産されていないレアフレームですよね」

「あれはアスモデウス、という名前らしい。二年前までは少し珍しいもの、とそこまで相場も高くなかったガンダムフレームも、エドモントンの一件で名を上げた鉄華団っていう組織が使用するモビルスーツと知れ渡った途端に高騰していった。我先に第二の鉄華団になろうとする傭兵団からの需要が急激に高まってね」

ふと、アスモデウスの顔がこちらを向いた。

「まぁこいつを手にしたところで、鉄華団の悪魔にはなれないだろうけど……そいつに近いカラーリングと外装をするだけで食いつきも良くなるし、こちらとしては良い商売をさせてもらっているよ。――――ん、どうした？」

アスモデウスの中にいる者が、ずっとアスナを見ているのが分かった。ライフルを撃

つ手を止め、暗礁宙域にて鋼鉄の巨人は佇んでいる。その様子にライオネルも気づいたようで、ガラスに手を付いて苛立ちを込めて叫ぶ。
「あいつ！　せっかくの商品紹介の時間だというのに、ふざけているのか!?」
「あいつ、とは?」
　アスナは無性にアスモデウスに乗っているパイロットのことが気になった。
「名前は知らない。ヒゲを三本も付けているヒューマンデブリのパイロットだよ。まったく、やはりあんな手術を何度も行ったから頭がおかしくなったんじゃないか……」
「阿頼耶識の手術を三回……」
　幼い身体に麻酔無しでナノマシンを流し込む手術のことだ。成功率は６０％とも、それ以下とも言われるそれを三度も。アスナは驚きを隠せず、呆然とアスモデウスを眺め続けていた。
「与えられた仕事すらもできないのか、ゴミどもが！」
　ライオネルが壁を思いっきり蹴り飛ばして毒づく頃には、アスモデウスはアスナの視界から消えていた。

2

　月輪の鷹団が暗礁宙域を競り市の場に選んだのには理由がある。

宇宙での兵器の取引というものは常に、秩序の番人であるギャラルホルンの監視の目がついて回る。それはつまり傭兵にとって、世界で一番巨大な軍隊に目をつけられると同義で、それだけで出来る仕事の半分は消えてしまう。

ましてやモビルスーツの競り市となれば、禁止兵器の取引だと証拠を偽造させられて摘発される可能性もある。マッチポンプによる不穏分子の排除はギャラルホルンのお家芸といってもいい。

そのため彼らの監視の目が届きにくい場所でやる必要があったのだ。

艦内にある大広間では傭兵やら海賊たちが、どの兵器をどれぐらいの値段で落札するかを話し合っていた。彼らは皆、月輪の鷹団と協力関係、もしくは不可侵条約を結んだ者たちだ。

「しかしここは確か、テイワズの輸送航路だったはずですが」

アスナは舞台横に控えるライオネルの後ろに座っていた。

「それに関しては問題ないさ。この宙域の支配権は２ヶ月前、月輪の鷹団のものとなったのさ」

「それってどういう……」

「海賊のやることってそういうものでしょ？　僕らスポンサーには関係のない話だけど」

「戦い、ですか」
　アスナの両隣に控えるのは、彼女の背丈の半分もない少年兵たちだった。小さい身体とは不釣り合いなアサルトライフルを持っており、洗濯された形跡のないほど汚れた灰色のコートを着ていた。コートに引かれた赤い線は彼らが人権の剥奪された身分、ヒューマンデブリであることを示している。
「彼らは銃を撃って敵を殺す道具だよ。ならば、銃を撃てる場所に連れていってやるのが優しさというものだろ？
　人と思うな。道具は使い潰すのが正しい使用方法だ」
「……はい」
「消耗品に愛着が沸くなんてことはないようにしてね」
　ライオネルという男は自分より立場の下の者を人とは思っていないのだろう。ヒューマンデブリも、彼の出世の踏み台となっているアスナも。
　そんな彼だが、立場の上の者に対する接し方は非常に、嫌なぐらいに丁寧だった。
　岩のようにゴツゴツとした顔と広い肩幅の男が前を通ろうとすると、誰よりも早く起立して頭を下げ挨拶をした。彼こそがアスナの父、フィゲル・マリーメルその人だ。
「お久しぶりです、お父様！」
「おお、ライオネルか。娘と仲良くやってくれているか？」

「はい。先日も一緒に劇場に行き演劇を鑑賞いたしました。日頃から家事のほうを任せてしまっており気分転換も必要だろうと思い、連れて参りました」
「そうか。アスナは君のようないい男に愛されて幸せ者だな」
　そう言うとフィゲルは舞台に上がり、競り市に向けた挨拶を始めた。ライオネルは足を後ろにやると、つま先でアスナの足を踏んで小声で言った。
「君も、もう少し笑顔と気持ちのいい言葉を覚えてくれ。男を立てるのが女の役目だろ」
「はい」
「分かればいいんだ。でも今度それをやったら、許さないからな」
「はい」
　まるで自分は首輪に繋がれたペットだ、とアスナは自嘲気味に笑った。
　フィゲルが壇上に立ち競りが始まろうとしていたその時。
　銃声が轟いた。
　アスナが舞台のほうに視線をやると、そこには頭を銃弾で吹き飛ばされて脳漿を撒き散らして倒れている男が一人いた。フィゲルであった。自分の父親であった。
「あ、あぁっ！　お父様……お父様！」
　思わずアスナは舞台に上がろうとしたが、両隣にいた少年兵に制止される。
「落ち着いて！　貴女の命も狙われているかもしれない！」

「でも」

決して自分を愛してくれたとは言えない父親でも、目の前で銃弾に倒れてしまえば、悲しみやら絶望やら混乱で思考がぐちゃぐちゃになってしまうものだ。一筋の涙を瞳から流しながら、アスナはその場に崩れた。

「ひぃっ！」

ライオネルはというと護衛として控えていた月輪の鷹団の団員とともに、早々に会場から逃げ出していった。フィゲルがやられたとなると、その後継者とされている自分も命を狙われていると思ったのだろう。

「逃げましょう！　僕たちが護衛します！」

アスナにそう言ったのは短髪の黒い肌をしたヒューマンデブリの少年だった。凛々しい顔立ちで、とても少年とは思えない雰囲気があった。彼は場馴れしているのか、もう一人の少年兵にも的確に指示を送っている。アスナは彼に連れられて会場を脱出し、脱出艇のある場所へと向かった。

どうやらフィゲルを撃ったのは競りに来ていた傭兵団らしい。混乱する団員たちの会話を聞くには、テイワズが攻めてきたとも。やはり目先の利益のために強引に宙域の支配権を奪ってしまった結果、月輪の鷹団は天下のテイワズを敵に回してしまったらしい。フィゲルを撃った傭兵もテイワズに金で買われたのだろう。

　ガラスの向こうに広がる暗礁宙域ではテイワズ製のモビルスーツ、百錬が飛び交っていた。あれはテイワズの主力モビルスーツの一つで、あの機体の所属する組織を敵に回すと明日の保障はない、と傭兵たちに畏怖される存在だ。深緑の機体色をしたモビルスーツ、ユーゴーと交戦状態にある。おそらくは月輪の鷹団の所有物であろう。
「外でも戦闘が始まっているなんて……」
「奴ら、この船ごと沈めるつもりですよ」
　少年兵に連れられて、脱出艇のある格納庫まで向かうと、既にライオネルや彼と繋がりのある権力者たちがそれに乗り込もうとしていた。
　ライオネルはちょうど脱出ポッドの前に立ち、パイロットスーツを着た長髪の大男と打ち合わせを行っている。美青年という表現が適切な顔立ちに、パイロットスーツの上からでも分かる盛り上がった筋肉が特徴的な男だった。
「外にモビルスーツだと!?　他の奴らはどうした!?」
「私たち以外の者は皆、自分の船に戻り逃げ出す準備をしていますよ。所詮は利益のみで繋がった関係。テイワズを敵に回した月輪の鷹団と手を組んでいると思われたら、自分たちまで狙われてしまうかもしれない」
「やはり君たちしか頼れないようだな」
「ええ。私たちは月輪の鷹団の戦士……脱出ポッドの護衛は任せてください」

「それでこそ、うちのエース、シドレー・アルカラッドだ。頼りにしているよ」
ライオネルはシドレーの肩を軽く叩くと、脱出艇の入口まで向かう。そこでようやくアスナに気づいた彼は苦い顔をしながらも、すぐに表情を和らげ優しい声で言った。
「アスナか！　無事で良かったよ。外はモビルスーツがいて危険だ。君は艦内にある避難スペースにいるんだ」
「貴方は……」
「僕は脱出ポッドで助けを呼びに行ってくる。大丈夫、すぐに戻るよ」
アスナは彼の嘘を追求する気力もなくなっており、気づけば脱出ポッドの扉は閉まっていた。一緒に逃げようとは最後まで言ってくれなかった。
絶望に暮れているアスナをよそに、脱出艇は発進する。
「そうよ。私はいつだって操り人形」
所詮、自分はフィゲルという権力者の娘でしかなかったのだ。フィゲルが死んだ今、兄弟姉妹のいないアスナが自動的に彼の資産と月輪の鷹団の支配権を手にすることとなる。だがアスナが死ねばどうだろうか。彼女と婚約しているライオネルにその全てが渡るように仕組まれるかもしれない。
むしろライオネルにとって、今のアスナは〝死んでしまったほうがいい存在〟なのか。

わかっていた。
自分はいつも利用されるだけの存在だと。
だがそれを、死という最悪なかたちで見せ付けられるとどうしようもなくなり、アスナは跪いて動かなくなった。
「私は男たちの所有物なんだ……都合のいいように使われて、いつも、いつも、いつも！」
なにも守れない。
なにも生み出すことができない。
「私もサブナックで出撃しましょう。ここも長くは持たないですからね！」
格納庫でシドレーの声が響き、艦に残っているモビルスーツは全機脱出艇の護衛に回った。

第1話：華、燃る（後編）

3

「アスモデウスの推進剤の補給、終わったの？」

金髪の少女は無重力状態の格納庫の壁を蹴って、モビルスーツデッキにいる整備士に尋ねた。帽子を深々とかぶった小柄な少年の整備士は静かに親指を立てて、

「……いつでも」

と小声で金髪の少女に言った。少年は背も低く、顔立ちは帽子で隠れて伺えない。十代になるかならないかの微妙なラインだった。可憐な少女と間違えてしまうぐらい可愛らしい声を、カッコつけて低めに出している感じがする。

二人の前には前方に向かって大きく伸びた二本のブレードアンテナと、その隙間に覗く鋭い双眼があった。

「……向こうの船に重役とかが乗っていたようっスね」

「だからこっちはあまり狙われていないのね」

「……まぁそういうことっス。あ、アスモデウスはいちおう売り物だから丁寧に扱ってくださいよっス」

「善処するわ」
　金髪の少女の顔の左半分は火傷の痕で焼けただれており、左眼は白く濁っており黒目が殆ど消えていた。だが、そうであっても、凛々しい顔立ちと麗しい金髪が火傷の痕の醜さを消し去っても有り余るほどの美しさを醸し出している。
　さながら、戦場に咲く一輪の花といったところか。
　身長も１７歳の少女にしては高く、膨らみの少ない胸元はむしろ彼女のスタイルの良さを強調する重要な要素となっていた。それこそ火傷の痕さえなんとかすれば、銀幕の中で輝く大スターになれたかもしれない……そんな美しさが少女にはあった。
「……特にマニピュレーターには高価な部品使っているので、くれぐれも素手で殴ったりはしないでくださいっス！」
「分かった、気をつけるわ」
　金髪の少女はそれだけを言い残し、アスモデウスのコックピットに吸い込まれていった。

4

「早く、立って！」
　アスナの手をヒューマンデブリの少年兵が引っ張る。しかし彼女の体は動こうとせ

ず、糸の切れたマリオネットのようにその場に倒れ込んだ。
「なんで、貴方たちは私なんかを助けようとするの！」
「それは、僕たち月輪の鷹団のヒューマンデブリは、マリーメル家の人を守れと命じられているから。僕たちは貴女の所有物なんです。だから守る」
ヒューマンデブリに人としての概念は当てはまらない。ライオネルが常々そう言っていたことは間違いではなかった。彼らは人であるにも関わらず、自分を人と認識できていないのだ。人であることを否定しなければ生きていけない環境を生き抜いてきたからだろう。
だからこそ人間である自分が他人の所有物であることを受け入れて生きてしまう。
少年兵の純粋すぎる瞳がそれを物語っていた。
彼らに疑問という言葉は存在しない。生きる過程で消していったか、元々誰にも教えられなかったか。
「……なんでよ」
アスナはゆらりと立ち上がると、短髪のヒューマンデブリの少年の胸ぐらを掴んで壁に叩きつけて叫んだ。彼の体は栄養が足りていないのか、意外なほどに軽かった。
「利用されるだけの道具みたいな扱いで、何で生きていられるのよ！」
自分もそうだ。

「私なんか放っておいて、どこへなりとも逃げなさいよ！」
「それはダメです」
　あまりにも冷たい言葉で返されてしまい、アスナは彼を掴んだ両手を下げて後ずさった。外側から攻撃を受けたようで、艦内が激しい揺れに襲われる。
「僕らの命なんかよりもよっぽど、貴女の命の方が重いから」
「そんなの！」
「この先に外へ出るための緊急脱出ハッチがあります。多分その近くに外付けのモビルワーカーがあったはず。それでもう一隻の装甲艦まで、逃げて！」
「何を言っているの、逃げるなら貴方たちも……ッ！」
「貴女は生きて」
　しかしアスナは遠くへ突き飛ばされてしまう。同時にもう一人の少年兵が壁のパネルを操作し、シャッターを閉めた。瞬く間に少年兵の姿はシャッターによって遮られてしまい、数秒後銃声が響き渡った。アスナを追ってきた傭兵たちによるものだろう。少年兵たちは奴らに気づいており、アスナだけでも逃がそうと犠牲になったのだ。
　よくよく考えれば当然の行動だった。
　人を守る道具が、自分を守るために人を犠牲にするわけがない。
　きっと道具は犠牲になるだろう。

彼らはそれを最期まで忠実に守る、よくできた道具だった。
「嫌だ……」
だがアスナ思った。
そうであってはならない、と
ヒューマンデブリだろうが何だろうが、人は人の尊厳を失ってはいけない、と。
だがらこそ足掻く。
白く細い腕を上げて、少年兵たちを助けようと。
シャッターの向こう側で、自分を助けてくれた少年兵たちが殺されているのを見て見ぬふりなどできるはずもない。いてもたってもいられず、アスナはシャッターに体を押し付けて叫んだ。鉄の冷たい感触と、鈍く響く銃声しかそこにはなかった。
「助けなきゃ！　そうでなきゃ私――――」
５歳の頃、まだアスナがコロニーに住んでいた時の話だ。
子供の頃から女性として英才教育を受ける日々を送っていたアスナの周りには、自分を出世の道具としか見ていない大人たちしかいなかった。
そんな中で出会った同い年の少女。アスナと同じように名家に生まれた身であり、歩んできた道も、習い事も一緒だった。彼女だけが自分を人として見てくれた。
「誰も守れないまま――――！」

かけがえのない存在だった。
しかし少女は１０年前に起こった屋敷の火災で死んだ。父親の制止を振り切り、アスナは燃え盛る屋敷に飛び込んで、少女を助けようとした。だが既に、少女は助からないほど全身に火傷を負っていたのだ。
一族が焼死し財産も全て失った為、治療も満足に受けられることのできなかった彼女は、数日後に死んだという。
折檻を受け外に出ることができないまま引っ越したアスナは、彼女に最後の別れも言えぬまま――今こうして絶望している。
１０年前と同じ、どうしょうもない無力感が胸に突き刺さる。
「もう一度開けて！　みんなで逃げましょ！」
「……生きて、ください」
シャッターの向こう側から掠れた声が聞こえた。
「え」
「生きて……」
「待って」
「い……」
「わかった！　わかったから早く――」

銃声が止んだ。

「あ、ああ……あぁぁあああああぁぁ!!」

守れなかった。

「あの子達は最期まで、人として死ねなかった……どうして、どうしてよ!」

いや、守る力などアスナにはなかった。自分は銃の撃ち方すらも知らない。運動神経も良くない。バイオリンの弾き方は知っていても、公の場でのテーブルマナーは知っていても、男を立てるための話術を知っていても、彼らを助けられるものではなかった。

男たちの道具である自分に、何ができるというのだ。

あの時、親友を助けられなかったことで決定づけられたのかもしれない。

自分は何もできない存在だ、と。

無力だ。

「生きて、って言ったよね」

せめてあの子達の願いを無駄にしないで生きてやろう。アスナは自分の意思ではなく、彼らの想いに突き動かされるように立ち上がった。

壁に備えられていた宇宙服を着ると、天井にあるハッチを開く。そこからハシゴが降りてきて、アスナはそれに手をかけた。

「生きる。それがあの子達の願い、なら」

アスナはハシゴを登りきると、ハッチを開けて宇宙空間へと出た。手すりに金具を引っ掛けて体を固定しながら周辺を見渡す。ぼんやりと霧がかったように濁った世界がそこには広がっていた。宇宙空間に出たことなど生まれて初めてで、少し油断すると自分の小さな身体など飛んでいってしまいそうなぐらい恐ろしいと感じられるところであった。

「あれ、かな」

金属のロープで巻きつけられた宇宙用のモビルワーカーが一台だけあった。故障などが原因で、外でモビルワーカーが使えなくなったときのために、予備として置いておくことがあるらしい。少年兵たちの言ったとおりだ。

アスナはゆっくりとモビルワーカーまで近づいていく。甲板に体を貼り付けて振り落とされないように、這いつくばりながら前に進む。

生きる。

生きてやる。

あの子たちの最後の願いを、自分は叶えなきゃいけないのだ。

しかし次の瞬間、アスナの目の前にあったモビルワーカーが巨大な足に踏み潰された。アスナの小さな身体は衝撃で吹っ飛ばされ、突き出した甲板に背中を打ち付けてしまう。

『マリーメル家の一人娘、アスナ・マリーメルだな』
モビルワーカーを踏み潰したのは月輪の鷹団を裏切った傭兵団の所有するモビルスーツ、ガルム・ロディであった。音声通信で直接話しかけてきたその声は、野太い男のものだった。その巨大なライフル銃をアスナに向けて、続ける。
『自分がくたばるまでに一人しか子供を残せなかったとは、フィゲルも不幸なものだ。それも女ときた。家を継ぐのが女とはなぁ』
こんなところで死ぬわけにはいかない。
少年兵たちに〝わかった〟と言ったのだ。
生きると約束したのだ。
『だが安心しろ。家を継ぐ前にあの世に送ってやる』
ヒューマンデブリとして生き、ヒューマンデブリとして死んだあの子達の意志だ。
終われない……。
終わるわけにはいかない。
『――アスナ、そこにいるのよね』
少女の声が聞こえた。
それとほぼ同時に、アスナの目の前に鋼鉄が舞い降りた。鋼鉄は右手に巨大なメイスを持っており、それでガルム・ロディのライフルを持った腕を叩き潰す。弾薬が爆ぜ、灼

熱の炎と硝煙が鋼鉄を覆い尽くした。
アスナの目の前に立つのは、厄祭戦を終結へと導いた伝説のモビルスーツ。
ガンダムアスモデウスだった。
二本の角と全身に貼り付けられた刺々しい増加装甲。その姿はまるで古代の伝承に出てくる怪物――――鬼のようであった。モビルスーツというマシーンを超越した怪物のように、それはゆらりと動き出す。
『使いにくい』
アスモデウスはメイスを投げ捨てると、後退しつつあるガルム・ロディに急接近した。黒煙を突き抜けて、鬼が顔を出す。左腕のマニピュレーターは手刀のように整えられていた。
『……アスナを』
その声は１０年前、アスナが守ろうとした小さな命。
アスモデウスは、スラスターを吹かして逃げようとするガルム・ロディの肩を右手で掴んで、その双眸をパイロットの傭兵に向けた。
『殺そうとしたな』
守れなかったはずのその声は、しかし確かにアスナの目の前にあった。
間違えるはずもない。

少し変わっているようだが、その水面を揺らす暖かな風のような声は確かに彼女のものだった。この狭い世界で唯一、信じることのできた友情。
『お前は』
左腕の手刀がガルム・ロディに向かっていく。ちょうど装甲と装甲の隙間――――コックピットの開閉口、その隙間に。
『死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ――――――ッ!』
『馬鹿か、マニピュレーター……で!?』
傭兵は自分が死ぬ瞬間を最後まで自覚できなかったことだろう。鋭く整えられた手刀はガルム・ロディの装甲を突き抜け、そのままパイロットごと貫いた。歪んだ装甲板やボルト、燃料チューブなどが四散する。ルム・ロディの首元まで貫通したアスモデウスの手刀の先には、一人の人間の血と肉片がこびりついていた。
『あぁぁ……はぁっ……』
呆然とその様子を眺めているアスナに、アスモデウスのパイロットは視線を向けると静かに言った。
『久しぶり、アスナ』
「……ハナ?」
その少女こそ、アスナの唯一無二の親友、花咲レゴリスであった。

第２話：アスモデウス

０

１０年前。

「どうしてあんな家の娘など助けようとした！」

父に殴られるのは初めてではなかった。しかしその時の彼の拳には確実に殺意がこもっていたのを子供心ながら感じており、アスナは改めて男が怖いものだと思い知った。

アスナの小さな体は病院の壁に叩きつけられる。右腕の火傷の痛みなんてどうでもよくなるぐらい痛かった。周囲の大人たちの視線は冷たく、その全てがアスナを「愚かな子供だ」と蔑んでいる目をしていた。

「ハナは私の友達だったのです……だから」

「口答えをするな！」

この世のどこに、足元で倒れ込んでいる自分の娘に蹴りを入れる親がいるだろうか。

アスナは血を吐いて朦朧とする意識の中、それでも必死に繋ぎ留めながら声を出す。

「ハナは……ハナは……」

「全身大火傷、助かる見込みはない。一族の財産は全部燃え尽きた。治療費を払う者など、ここにはいない。それだけ屑みたいな家にあの娘は生まれたのだ」

アスナはゆらりと立ち上がると、ガラス張りになっている治療室の窓を覗いた。全身大火傷で瀕死の状態の少女が、何もない病室のベッドで横になっている。ミイラのように包帯を巻かれ、ピクリとも動かない。生きているのか死んでいるのか分からなかった。

「まったく、わしらの事業を滅茶苦茶にして、その尻拭いもせぬまま一家無理心中など……あんな家の娘と会っていたから、アスナも馬鹿が移ったのか、まったく」

治療費さえ払えれば、集中治療室にある生命維持装置で回復を待つことができるだろう。

「これで分かったか」

父親はアスナの手を強引に引っ張る。しかしアスナは抵抗して、ガラスに張り付こうとした。機械の警告音とともに看護婦が少女に殺到する。少女の容態が急変したのか、医者による心臓マッサージが繰り返されていた。

「女に勇敢さは不要だと何度言えば分かる！　お前は誰も守れない。大人しくマリーメル家の女として正しい生き方をしていろ！　あんな家の小娘一人、どうでもいい！」

心肺停止の音が鳴り響き、アスナの意識は同時にプツンと切れた。

目が覚めると父がいた。
殴られたかもしれないし、蹴られたかもしれないし、スーツケースで火傷している腕を叩き潰されたかもしれない。すごく痛く、苦しく、惨めだった。
アスナはそれ以降、男に逆らわないようになった。
それだけが真実だ。

1

伝説のモビルスーツ、ガンダムアスモデウスはアスナの目の前に屹立していた。
「ハナなの……そこにいるのは、花咲レゴリスなの!?」
アスモデウスは手刀をガルム・ロディから引き抜いた。さすがにモビルスーツの装甲をマニピュレーターで貫くのには無理があったのか、中指がひしゃげて各部からスパークが迸っている。
そしてアスナのほうを向くと左手を差し伸べてきた。先ほどの狂戦士の如き戦いからは想像もできないぐらい、丁寧な動きで。
『ええ。ずっと貴女を待っていたの。さぁ乗って』
アスナはアスモデウスのマニピュレーターにしがみつくと、そのままコックピットまで運ばれていった。ヘルメットのバイザーの向こうに見えたのは凛々しい顔立ちをし

た金髪の少女だった。彼女は静かにアスナの手を握ると、
「会いたかった」
「どうしてハナがここに……」
　あの後、治療を受けられることなく死んだというのは嘘の情報だったのか。いや、しかし治療費など誰が払ったのか。そもそもあの時点で治療を受けて助かるなど奇跡じゃないか。疑問と推測が交差する思考を振り払い、アスナは何とか冷静さを保とうとした。
「まぁ色々あったの。気にしないで」
「気にするよ！」
　花咲の顔の左半分は火傷の痕が残っており、左眼は白く濁っていた。彼女の背中からは一本の太いチューブが伸びており、コックピットシートに繋がっている。阿頼耶識でモビルスーツと一体化を果たしているのだ。
「今は奴らを殺さなきゃ」
　気づけばアスモデウスに迫る敵影が二つあった。どちらも傭兵団のガルム・ロディのようで仲間の仇を討とうとしているようだ。
「戦うの!?」
「戦うしかないよ。大丈夫、アスナがいれば私は何でもできる」

子供の頃の花咲はもっとこう可憐な乙女のような感じだった。しかし今、目の前にいる彼女は兵士の目をしていた。如何にして敵を殺し生き残るか、最も効率的な手段を考えている。アスナが男たちに飼われていた１０年の間に、花咲は色々なことを知り、体験したのだろう。

アスモデウスに接近するガルム・ロディのうち一番近い機体がライフルを構え、発砲してきた。アスモデウスは手刀で撃墜したガルム・ロディの残骸を掴んで、それを盾にする。この距離なら砲撃をくらっても、モビルスーツや戦艦に標準搭載されているナノラミネートアーマーと呼ばれる皮膜型装甲によって、当たり所さえ悪くなければ大したダメージにはならない。

しかしだ。アスモデウスにはアスナも乗っている。耐衝撃装置も同乗者の存在までは想定して設計されていない。一回の被弾でもコックピットは大きく揺れ、同乗者のアスナは鞭打ちになってしまう。

そのため花咲は出来るだけ被弾回数を最小限にとどめた上で、敵を確実に撃破していく手段を選択した。

「きゃあっ！」

「安心して」

モビルスーツのコックピットに乗って戦闘した経験など、当然のことながらアスナに

はない。敵が自分に大口径のライフルを向けているという事実が、この上ない恐怖であった。
ガルム・ロディの撃った銃弾は残骸に命中していく。はじけ飛ぶ残骸の装甲板の隙間から、ガルム・ロディがライフルを投げ捨てて、バックパックに備え付けられたバスターソードを手に取っている姿が見えた。
「アスナは私が守る」
アスモデウスは先ほど捨てたメイスを左手に持つと、右手で盾にしていた残骸をガルム・ロディに向けて投擲した。バスターソードで受け止められるも、その間に腰にあるスラスターを噴射させて急接近。
「守るんだァァァァァァァ――――ッ！」
花咲の獣のような咆哮とともに、アスモデウスはメイスを振り上げてガルム・ロディの頭部を破壊する。そして動かなくなった機体のコックピットにめがけてもう一度メイスを打ち込んだ。同時にメインモニターに【ＳＵＲＲＥＮＤＥＲ　ＳＩＧＮＡＬ】と表示され、アラートが鳴り響く。
「あ――降伏信号。出すのが遅いわね。二人も死ねば、敵は帰ってくれるかしら」
ひしゃげたガルム・ロディのコックピットを眺めながら、花咲は冷淡に言い放った。
狂戦士のように叫び狂っていると思うと、次の瞬間には冷静に状況を見つめる。アス

ナにとってそれは異様な光景であった。人を殺すという行為を当然のように受け入れ、また同時に自分に銃口が向けられている事実に対して逃げることなく立ち向かっていく。そんな花咲の姿に驚愕する。

普通なら人を殺すのを躊躇するはずだ。

普通なら銃口を突きつけられれば逃げるはずだ。

普通なら――――。

「テイワズの機体と傭兵の一機は撤退していく。けど残りの一機が向かってくるのね」

傭兵団のガルム・ロディのうち隊長機らしき一本角のブレードアンテナを付けた一機と、その奥にいる三機の百錬は撤退していく。しかし残りの一機はライフルを捨ててこちらへ向かってくるではないか。

「と、投降するのかな」

「まさか」

バスターソードに持ち替えて特攻してきた。

「ごめん、アスナ。もう少し時間がかかりそう」

向かってくるガルム・ロディから通信が入った。花咲は回線を開くと同時に、コックピットに男の怒号が飛んできた。

『よくも、アンディとラサをやってくれたなァアッ！　貴様だけは許せん！　この俺が

ぶっ潰してやらぁあぁぁぁ！』

「ひっ……」

男の怒号にアスナは恐怖を覚え、後ろに下がってしまう。恐怖が思考を汚染していく。許嫁のライオネルから振るわれた暴力、父親の激しい折檻、周囲から飛んでくる罵声。

『俺は傭兵団ソードフィスト所属、バラデ・コング！　一騎打ちを所望す―――』

「黙れ」

花咲はアスナの様子を見て、回線をすぐに切ると静かにそう言った。後ろで震えているアスナの手を握って、

「大丈夫、私がいる」

「……うっ」

「私が怖いやつ全部、殺してあげる」

アスモデウスはメイスを残骸から引き抜くと、迫ってくるガルム・ロディに向けて投げつけた。バスターソードによって弾かれるものの、足止めにはなる。

その間に投げ捨てられていたライフルと予備弾倉を手に取り、動作を確認。ギャラルホルンやテイワズのような大規模組織の機体の武器にはセキュリティロックがかけられており、所属の違う機体では使えなくなっているようだが、名も知らぬ傭兵団の機体

にはさすがにそれはなかった。

「使えるか、よし」

アスモデウスは腰のスラスターを吹かして、暗礁宙域を駆け抜ける。機動性ならこちらのほうが数段上だ。すぐに敵ガルム・ロディの背中に回り込むとライフルの銃弾を浴びせる。そこから白兵戦に持ち込んでもよかったが、アスナに負担のかかる戦い方はできない。

一度後退しつつ、ライフルのリロードを行う。相手も花咲に正々堂々正面から一騎打ちをする気がないことを察し、ライフルを手に取り射撃を行う。

アスモデウスは左右にスラスターを小刻みに噴射させ、銃弾を全て回避。射程圏外まで逃げると、アスモデウスはライフルを構える。メインモニターに表示されているロックオンサイトはメインモニターの中を泳いでいるだけであった。当然だ。射程圏内に入らなければロックオンはされない

つまり、マニュアルで照準補正をしながら撃たなければならないのだ。味方と混戦状態の時にこれをやれば正気を失ったのかと笑われるだろう。だがアスナは違った。人機一体のシステム阿頼耶識を駆使することで、感覚で照準補正をやってのけた。

「ここか」

精密な射撃が次々とガルム・ロディに炸裂していった。頭部のメインカメラを潰さ

れ、コックピット周辺のナノラミネートアーマーを徐々に削っていく。ガルム・ロディは銃弾を浴びながらもバスターソードを振りかぶり、こちらに突撃してきた。
「もう遅い、堕ちろ」
　しかしバスターソードはアスモデウスに振り下ろされることはなかった。ガルム・ロディのコックピットはライフルの銃弾で潰され、ミンチになった人間の肉片が微かに見えた。
「アスナを怖がらせた罰よ！　絶対に許すものか……」
　アスモデウスが撃破したのを確認すると、四機のモビルスーツが宙域を離脱していくのが見えた。マリーメル家の人間を殺すのが依頼だったようだが、遂行不可能と判断したのだろう。テイワズは依頼主であるからか、命を張ってまで敵に向かってくることはないというスタンスを貫いているように花咲には思えた。
「撤退していく……アスナ、お疲れ様。終わったよ」
　何はともあれ、敵は追い払った。花咲はアスナのほうを向いて、静かに笑みを浮かべた。
「ハナ、ちょっと、気持ち、わ……おぼぉ！」
　顔面蒼白なアスナの宇宙服のヘルメットは次の瞬間、彼女の吐瀉物で満たされることになる。モビルスーツに乗ったことのない人間が高速機動を味わえば、こうなるのは必

然であった。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい」

想定外の事態に花咲はただ謝ることしかできなかった。

第3話：あの日からずっと

1

ブレードアンテナを頭部にもったガルム・ロディと三機の百錬は、暗礁宙域のデブリを避けながら撤退していく。

『仲間を見捨てろっていうのかよ、おい！』

「だって君一人ではあの機体は倒せないでしょー。ありゃおそらく阿頼耶識使いだ。ガンダムフレームに阿頼耶識使いっていうと嫌なイメージしかないねぇ」

百錬のコックピットにて軽口を叩く青年がいた。目は細く、小麦色の肌をしている。戦場でモビルスーツに乗るよりも、燦々と照りつける太陽の元サーフボードで波に乗っているほうがよっぽど様になっているような男であった。

今日の夜をどこで過ごすかも決めていない女性であれば、彼の言葉一つで肌を重ねることを許してしまいそうな声と外見をしていた。一言で表現するなら「チャラ男」といったところだろうか。戦場には似つかわしくない浮いた雰囲気を醸し出していた。

『だったらお前らも手伝えよ！』

「俺らはあくまで君たちを雇った依頼主って立場。露払いはしても、命懸けで強敵に挑

むような仕事はしないつもりで来たわけで」
『お前……アンディとラサとバラデが死んだんだぞ』
「だけど彼らのおかげでこの宙域の支配権はテイワズに返ったも同然だし、ライオネルとかいう奴もマリーメル家を見限って逃げたわけだし。問題ないっしょ？」
『バカ野郎！俺はあいつらの仇を討たなきゃならねぇ！　それをわかって言ってんのか!?　やらせろ！　今すぐ俺が――――』
「あのねぇ、オッサン」
　青年の目つきが変わった。先ほどまで女性を口説く時のように柔らかで軽やかだったそれが、一瞬にして研ぎ澄まされたナイフに変貌したのだ。
「俺っちもジャスレイの叔父貴（おじき）のメンツ賭けて仕事してんでさァ。こっちが下手打ったら、叔父貴の顔に泥を塗るようなことになっちまうわけで。昔から世話なった人に、ンなことできるわけねーだろ。そこんとこ理解してくれねーと」
　青年の乗る百錬はライフルをコックピットに突きつける。
「互いに譲れねぇもんはあるのよ、オッサン」
　元々はテイワズ内のタービンズと呼ばれる組織の航路として確保されていたこの宙域だが、月輪の鷹団に支配権を奪われた。その機を逃すまいと、タービンズとは密かに対立関係にあるテイワズ内の派閥がここを確保しようと乗り出したのだ。

　その派閥の筆頭ジャスレイ・ドノミコルスの部下が青年、カズマ・シュレイナーである。ソードフィストはジャスレイ派に雇われている傭兵団であり、力関係で言えばカズマの方が上だった。
『く、クソが！』
「まぁ安心しなって。一隻は沈めた。所属している兵士の殆どは、ライオネルを始めとした重役様の脱出艇の護衛と称してズラかった。だけど幸運なことに標的のお嬢さんはまだ残っている」
『何が言いたい……』
「奴らが安全領域に逃げるまで、もう一回チャンスはあるようだぜーっと。この際、お嬢さんをナンパしに行くのもアリだと思うわけよ」
『だがこちらの戦力も心許ない。兵士はいてもモビルスーツがなければどうしようもないだろう』
　この二年間で戦いは大きく変わった。モビルスーツの重要性が見直され、最早モビルワーカーや戦艦の主砲だけでは戦場を支配できない時代がやってきたといっても過言ではないだろう。
「んじゃさ、前払いの報酬使ってウチからモビルスーツでも買っちゃう？　テストパイロットって名目で実戦データをこっちによこしてくれるなら、試作機を安くで売っても

いいんだよ？」
『試作機、か』
「それにうちとしても、残った一隻は沈めておきたいわけで。もう二度と、うちのシマを荒らされねーためにもってわけ」
『わかった。それでいこう』
「んじゃ、取引は母艦に帰ってからしよう」
カズマはそう言って回線を切ると、録画していた戦闘の映像を見始める。そこに映るのは鮮やかな軌道を描き、ライフルの射撃を回避していくモビルスーツがあった。
「ガンダムフレーム、アスモデウス……か。恋しちゃったかもねぇ、こりゃ」
静かに沸き立つモビルスーツ乗りとしての気持ちを抑えつつ、カズマはコックピットシートの脇に挟んでいた成年向け雑誌を広げて読み始めた

2

一体何がどうなっているのか。
アスナには何一つ理解できずにいた。
「私は殺されそうになって、ハナが生きていて……ハナ、生きていた。私、守れなかったはずなのに」

赤く錆びたシャワーヘッドから降り注ぐ濁った水で髪を洗いながら、アスナは一人問答を繰り返していた。冷たい水がアスナの白い柔肌を伝って落ちていく。今こうして生きていることが不思議に思えるほど現実感がない。ふわふわと水の上を漂っている感覚がアスナの思考を支配していた。

ここは月輪の鷹団が所有する強襲装甲艦「シラヌイ」の中だ。とはいっても月輪の鷹団は事実上解散したも同然だ。構成員の八割はヒューマンデブリの少年たちで、残りの二割の大人たちはとっくに脱出艇で逃げ出している。天下のテイワズを敵に回しておいて、その看板を掲げて商売をやっていけるほど宇宙は甘い世界ではないということだった。

アスナはハナに助けられた後、吐瀉物まみれの宇宙服のまま、ここに残ったヒューマンデブリの少年たちにシャワー室まで連れて行かれた。彼らの居場所はここにしかなく、逃げる場所もなく、途方に暮れているようだった。

「私と同じだ……居場所なんかどこにもない。帰る場所も知らない、そんな――」

思いつめていたその時、シャワー室のカーテンが突然開いた。

「アスナ、元気？」

「ひゃぁ!?　ハナか、驚かさないでよ……」

思わず両手で乳房を隠す素振りをしたが、相手が花咲だと知るとそれもしなくなる。

花咲はアスナの裸体をじっと見つめると、安堵を表情に浮かべて言った。
「火傷の痕、消えているようで良かった」
「あ、うん……」
　対する花咲は顔の半分に火傷の痕が残っており、左手に至っては指が二本しかない状態だった。しかしその艶やかな金髪と凛々しい顔立ちは１０年前とさほど変わらない。彼女は赤いラインの入った灰色のコートを着込んでいた。赤いライン、それは彼女が人としての尊厳を失った存在――ヒューマンデブリであることを示している。
　アスナはシャワーを浴び終えると、湿ったタオルで顔を拭きながら言った。
「ハナ、いったい何があったの？」
　あの大怪我に治療費を誰も払ってくれない状況だ。生きていると思う理由が存在しない。
　アスナは服を着てシャワー室を後にすると、すす汚れた灰色の鉄の壁がひたすら続く廊下に出た。所々にある血の跡に、アスナはぎょっとする。
「私、買われたの。傭兵の人に」
「傭兵に!?」
「うん。何度も生死の境を彷徨いながらも生き延びている私の噂を聞いてやってきたの」

花咲の後をアスナも続いて歩く。艦内の構造など知るわけないため、こうしていないとすぐに迷子になってしまう。

「彼は阿頼耶識の手術に耐えうる体を持った強い子供を探していた。私はその生命力を買われ、治療費を払ってもらう代わりに、阿頼耶識の手術を受け彼の元で少女兵として戦うことを約束したわ」

気づけば格納庫にたどり着いており、花咲は軽快な動作で床を蹴って飛び立つ。アスナも真似をするが上手くいかず、花咲に受け止められようやくなんとかなった。二人の傍には鋼鉄の巨人、ガンダムアスモデウスが佇んでいる。相変わらず鬼のような外見に、アスナは少したじろいでしまう。

「約束通り、私は三回の手術を受けた。いつかまたアスナに会えることを信じて、どんな痛みにも耐えてみせた。そして生き延びた。今日、この日まで」

花咲は自らの機体、アスモデウスを眺めながら続けた。

「たとえ身寄りのない子供として、ヒューマンデブリとなってでも生きながらえたい。今でもその気持ちは変わらない。アスナに会える日を思い描いて、どんな辛いことにも耐えてきた。どんな物でも壊してきた。どんな人間でも殺してきた」

アスナの手を握り締め、花咲は力強く言った。

「そしてようやく会えた。私が世界で唯一信じている貴女に。アスナ、私にとって貴女

は神なの」
「へ？　え、なんて言ったの？」
　何かおかしい言葉が聞こえたが気のせいだろう。アスナは聞きなおす。
「神なの」
「誰が!?」
「貴女が！」
「え」
「アスナは私の神なの！」
　おかしい。
　アスナと花咲は親友であって、どちらか片方が信仰の対象になっていることなどあるはずもなかった。花咲と一緒に過ごした幼き日々の中に、そのような記憶は一切ない。あってなるものか、とアスナは思った。
「ずっとずっと、アスナのことを想いながら生きてきたわ。銃撃戦の最中でも、冷たい土の上で眠れない夜を過ごしている時でも……するとね、元気が出るの。アスナとまた会えるかもしれないって思うと、どんな辛い時でも元気を出して戦うことができた。だから、アスナは神なの。私にとって絶対的な存在なの」
「は、はぁ……」

瞳を輝かせて熱く語る花咲に、若干引き気味のアスナ。どうやら１０年の間に花咲の中でアスナは親友から神になるという、近年稀に見る大躍進を遂げたらしい。

「待っていてね、渡したいものがあるの」

花咲はアスモデウスのコックピットに飛び移ると、中を探り始めた。そして何かを見つけたのか、まるで子供のように無邪気な笑顔を浮かべながら戻ってきた花咲は、アスナにそれを手渡した。

「これ、渡しそびれていたの」

それは所々が黄ばんでいたり、グシャグシャになったりしている誕生日カードだった。クレヨンで丁寧に塗られたアスナの似顔絵が描かれている。

アスナちゃん８歳の誕生日おめでとう

半分以上が汚れでまともに読めなくなっているものの、アスナにはちゃんと読めた。これだけを胸に花咲は今まで生き抜いてきたのか。

「遅くなって、ごめんなさい」

「うんん……」

その時初めて実感した。自分は親友を助けることができたのだと。炎の中、大人たち

の都合も事情も、死の恐怖も全部投げ捨てて向かった自分は正しかったのだと。こうして花咲が目の前で笑っている。それだけで報われた気がした。

「ありがとう」

大粒の涙を流しながら、俯き加減にアスナは誕生日カードを受け取った。

彼女がヒューマンデブリになったことも、今まで辛い体験をさせてしまったことも、これから先どうなるか分からないことも。今は考えず、ただ喜ぼう。

親友が生きていてくれた喜びを実感したアスナは、静かに涙を流している花咲の小さな体をしっかりと抱きしめた。

第４話：所有者として

1

アスナは今まで裏稼業で生きている者で、人間的に尊敬出来る者を一人も知らない。

今回もそうだ。月輪の鷹団に所属していた大人たちは、拠点としている戦艦「シラヌイ」に一人もいなかった。彼らは子供たちを見捨てて、自分たちだけで逃げ出したのだ。テイワズを敵に回し、彼らが動き出したことを知るやいなや、すぐに。

ここにいる中でまともに読み書きが出来る子供は花咲一人だけ。彼女以外は文字も読めないし、複雑な計算も知らない。だが銃の解体と組立はそんじょそこらの兵士よりも素早く行える。それがヒューマンデブリの子供たちの実態である。

戦争や過酷な労働に関する知識だけを身に付けさせ、それ以外は教えない。文字が読めて複雑な計算ができれば、ここよりも遥かに待遇が良く、人間扱いしてくれる働き口が見つかるかもしれないからだ。

ゆえに教育の剥奪こそが、彼らをヒューマンデブリという身分に縛り付ける最大の要因といえよう。

「で……これから先、どうするかっていうことよね」

格納庫にいたアスナはいつしかヒューマンデブリの子供たちに取り囲まれていた。前列にいる少年三人は見たところアスナと同じか少し下ぐらいの年齢だったが、それ以外は皆、十歳前後の少年ばかりであった。数えてみたらちょうどアスナを含めて五〇名がこの船に取り残されているらしい。

つまり子供しかいない戦艦ということになる。この状態で暗礁宙域を抜けなければいけないわけで、しかもテイワズの追撃もやり過ごす必要が出てくるわけで……。

と。頭痛で脳みそが押しつぶされそうになっているアスナの横にいた花咲が口を開く。

「アスナのお父さんは不在なのよね？」

「死んだわ……銃で撃たれてね」

実の娘に理不尽な暴力を振るう男だ。死んだところで悲しみに暮れてどうしょうもなくなるような人間ではない。アスナはそんな人間のために少しでも涙を流した自分自身が許せなくなった。思い返せば自分を育てていたのではなく、マリーメル家の看板として調教していたのだから……愛情の欠片も、アスナは感じたことがない。

そして遂に、愛情を向けることなく死んでいった。それだけのことだ。

「じゃあアスナが私たちの所有者になるわね」

「所有者!?」

「うん。私たちは名義上、マリーメル家の所有物になっているから。だから、ここにいる皆に貴女を守る義務が課せられている。もっとも、義務が課せられていなくても、私は全身全霊をかけてアスナ守るけど」
「は、はぁ……」
　人間は道具じゃない、などと彼らの人権を主張できる状況でないのはアスナも承知している。ならば彼ら、月輪の鷹団のヒューマンデブリの子供たちの所有者として、今の自分に何ができるか考えよう。アスナはそう思い、声を張り上げて皆に言った。
「父、フィゲル・マリーメルの死亡を以て、貴方たちの所有権は私に移った……ってことでいいかな」
　異議はなかった。皆が素早く頷く。
「つまり、アスナが月輪の鷹団の団長ってこと。いいわね、皆？」
　花咲が余計なことを付け加えた。
「だ、団長!?」
「そういうことになるんじゃないの？」
「まぁそうだけどさぁ……」
　つい先週まで豪華な屋敷で家事をしていたり、習い事のバイオリンの練習をしていた自分が、成り行きとはいえ海賊の団長になるなど。アスナには想像すらできなかった。

実感など湧くはずもない。
「え、ええ、っと……団長らしく……」
　しかし今のアスナは月輪の鷹団の団長でなくてはいけない状況だ。まずはかたちから入ってみようと、彼女は右拳を天に掲げて、
「じゃあ、いくぜ、野郎ども、お、おら――――……」
　途中で恥ずかしくなってアスナは赤面を両手で隠して、アスモデウスのコックピットまで逃げ込んだ。何があったのかと花咲が様子を見に向かうと、コックピットシートに丸まって小さく震えるアスナがいた。
「どーしたの、アスナ？」
「ごめん無理……」
　アスナの羞恥心を察することなく、格納庫内では居場所を見つけられたヒューマンデブリの少年兵たちによる「アスナ団長！」コールがいつまでも続いていた。
　まるで宇宙空間に生身で出たような息苦しさと薄ら寒さがアスナを襲う。

2

　気を取り直して。アスナは人員の把握と状況の整理を行うため、メモとペンを持ち艦内の廊下を歩いていた。花咲はその横を歩き、中を案内していく。

「まずは艦橋の場所の把握と……」

灰色の強襲装甲艦「シラヌイ」は海賊や傭兵団で使われている一般的なモデルの宇宙戦艦だ。エイハブリアクターを搭載しているため耐久性もあり、先ほどの襲撃でも積極的に狙われなかったということもあってか、砲台は全て機能するし、スラスターの調子も良好だ。対するアスナたちが乗っていた戦艦「カスミ」は残念ながら使い物にはならないだろう。スラスターやモビルスーツデッキといった航行に必要不可欠な部分が破壊されている。艦内の重力制御装置も潰れており、宇宙服無しでは中に入ることすらできない。

しかし色を含めて外観と設計は殆ど同じなので、損傷していない部分をストックしておけるだろう。余裕があれば、エイハブリアクターだけでも回収していきたいところだが、今の状況ではそれも叶わない。一刻も早く宙域を離脱しなければ、テイワズとソードフィスト傭兵団の追撃部隊の強襲を受けてしまう。

「ここが艦橋よ」

艦橋には席が五つあった。前方の二席が航行を行う場所で、左右が戦況分析や索敵システム、艦内制御を行う場所。そして中央にあるのが艦長席だ。アスナはそこに座ると深呼吸をした。

「ふう……何か変な気分」

今まで戦場を渡り歩いてきた少年兵ではなく、自分がこの席に座っているのが果たして本当に良い事なのだろうか、とアスナは頭の中で何度も疑問を覚えた。しかし部隊の指揮に関しては、どちらも素人同然なので大して変わらない。そうアスナは結論づけた。

アスナが艦長席に座ると、前方の席で航行システムの操作を行っている少年が立ち上がって挨拶をしてきた。スキンヘッドで顔立ちからアジア系であることが分かる。アスナよりも少し歳が低いであろう少年だった。彼がハイスクールに通えたならば、十中八九ベースボールクラブに入団していたであろう……そんな感じだ。

「ご苦労様です、アスナ団長！」

「だ、団長……」

やっぱり慣れない。今まで社交パーティーで何度も「お嬢様」とは呼ばれていたが、団長と呼ばれたのは人生において今日が初だった。

「俺はリウです。これからよろしくお願いします!!!」

「よ、よろしくー……」

ヒューマンデブリというと礼儀も何も教えられていないゴロツキのようなイメージがアスナにはあったが、彼は非常に礼儀正しい好青年であった。ただ一つ、声が馬鹿でかいことを除けば。

花咲曰く、文字の読み書きができなくとも戦艦の運用に関する知識はあるらしい。文字ではなく「ここを押せばこうなる」というように大人たちから仕込まれたとか。一見、文字を教えたほうが手っ取り早い気がするが、そうすれば彼らヒューマンデブリを自分たちの元に縛り付けておけなくなる。認めたくはないが合理的な手段であると言えよう。

「現在、団長の指示通り、暗礁宙域を抜けるルートで航行中であります!!!」

「あ、ありがと……」

艦橋のモニターには今後の航路が映し出されていた。暗礁宙域は一定のルートを通らなければ安全に航行はできない。デブリ帯を避けて行く必要があるため、もどかしいがアスナたちは回り道を強いられていた。

アスナは艦橋を後にすると、再び格納庫に向かった。格納庫にはアスモデウス以外に三機のモビルスーツが格納されていた。一機はバスターソードにロングライフルという一般的な装備の灰色の装甲色をしたユーゴーで、テイワズの百錬と戦っていた機体だ。右腕を損傷しているが、それ以外は問題なく動くらしい。

パイロットはブリアンという筋肉質な角刈りの少年で、数少ない年長組の一人でもある。その中でも特に大人びた顔立ちをしていた。熟練の戦士、といっても過言ではないほどの貫禄があったのは、長く生き延びている証拠なのだろう。

「あれもユーゴーだよね。なんか装備が違うようだけど」
「ジャックの機体よ。遠距離射撃が得意だから、ああいうカスタマイズになっているの」
もう一方のユーゴーは紺色の機体色で、右手には機体の全長と同じ大きさの巨大な対物ライフルを装備していた。それに伴い両肩とバックパックをグレイズのものに付け替えられるなど微調整が行われており、横幅を狭くすることで隠密性を向上させていた。
そうこうしていると、アスナの目の前に茶髪で背の高い青年が降り立ってきた。毎日シャワーを浴びているのか小奇麗な雰囲気と、長くもなく短くもないストレートヘアーから、ハイスクールにでもいそうな好青年に見える。
が、やはりヒューマンデブリの象徴である赤いラインの入った灰色のコートを身にまとっていた。それでも周りと違って袖に手を通していなかったり、どこかお洒落に着こなしている様子だった。
「やぁやぁ新しい団長さん。俺の名前はジャック・ヒューゲル、よろしく」
「は、はい！」
容姿端麗という言葉は彼のためにあるのではないかというほど美しい顔立ちに、アスナは思わず仰け反ってしまう。こういうタイプの男性に会うのは初めてでどう接すればいいか分からず戸惑っているわけで、一目惚れとかそういうのではない。おそらく。

アスナのそんな様子を、流し目で花咲は見つめる。なんだかよく分からない感情が花咲の中に芽生えた。人はそれを嫉妬と呼ぶが、彼女はそのような言葉を知らなかった。
「人は俺のことをこう呼ぶ……天才、と！」
「はぁ……」
「百発百中、狙った獲物は逃さない。きっと俺には天賦の才があるのですよ」
「ええ……」
「この美しき天才、ジャック・ヒューゲルに――――」
「もういい。行こう、アスナ」
花咲はアスナの手を引き、その場を後にしようとした。
「あいつはちょっと自信過剰なの」
「ぞ、俗に言うナルシストってやつね」
ヒューマンデブリとはもっと暗い人ばかりだと思っていたが……アスナの予想に反して、一癖も二癖もある面子がここにはいた。
「まぁジャックの実力は本物よ。彼に拳銃を渡したら、片手撃ちでも５０ｍ先の標的の頭を撃ち抜けるもの。前の団長も、暗殺任務は彼に一任していたわ」
「本当に天才だったんだ……」
あの明るい笑顔の裏で、彼のまた人を殺す仕事をしていた。

「黙っていれば、そう言われていたでしょうね」
　しかし現在のシラヌイには携帯火器は一切なかった。全部、大人たちが持ち出して逃げたという。敵に乗り込まれたら終わりだな、とアスナはそうならない為にこれから先のことを考えるのに集中した。

3

「ふう……これで少しはまとめられたかな」
　アスナは食堂のテーブルの上でメモを広げて、情報の整理をしていた。横には意味もなくちょこんと花咲が座って、アスナをじっと見ていた。
　二機のユーゴー以外に、ギャラルホルン製のゲイレールという機体があるらしいが、それは元々、売り物だったようでパイロットは決まっていないのだという。もっとも阿頼耶識のコネクタが接続されていないため、扱える人間は限られてくるだろう。年長組の三人には既に決まったポジションがあるため、パイロットになってもらうとなるとそれ以外の一〇代前後の少年の誰かに頼むしかない。
　その他にも宇宙用のモビルワーカーが五機存在する。年少組の子供たちはこれに乗っていつも戦っていたのだという。
　当然、致死率も年少組の方が高い。この船に一〇代後半の子供が少ない理由でもあ

る。

「戦闘にはならないのが一番なんだけど、戦力は多いほうがいいし……」

ゲイレールにモビルワーカーの阿頼耶識を取り付ければ誰も動かせるようになる。それほど時間のかかる作業でもない。だが、しかし、だ。

「うう、でも子供たちをモビルスーツに乗せて戦わせるのは駄目な気がするし」

月輪の鷹団の大人たちのとっていた手段が合理的であり、ヒューマンデブリという戦うための教育しかされていない子供達を最大限に活かせるものであると、考えれば考えるほどアスナには思えてきた。

子供だろうが関係ない。モビルスーツがあるなら乗って戦えと命令しろ。たとえ敵がモビルスーツでもモビルワーカーで足止めぐらいはできる。どうせ死んでも大した損失にはならない。ヒューマンデブリは使い捨ての道具として使い潰せ。

アスナの知っている男たちならきっとそう言うだろう。それが一番、簡単で安定した選択しだからだ。

「でも……もう誰にも死んでほしくはない。だから私は――――」

アスナを守って死んだ少年兵たちは、自分のことを道具だと思いながら幼い命を散らしていった。自分の命の本当の価値も知らぬまま。もうそんなこと繰り返してはいけない。アスナはそう思ったからこそ、本気でこの船にいる子供たちを守るために考えよ

うと思ったのだ。
皆で生き残るための道を。
でも理想論であった。こうしてテイワズという巨大な組織から狙われている以上、戦わなければいけない。この中の誰かを前線に出して、戦わせなければいけない。そしてそれを決めるのは月輪の鷹団の団長であるアスナであった。
誰も死なない状況を望んでいる場合ではない。ではないのだが、アスナはそれを中々受け入れることができず、手のひらを流れる汗を苛立ちに任せて握り締めていた。
「アスナ、疲れてる」
そんなアスナの様子を見た花咲は、彼女の背中に静かに寄り添い言った。
「皆に死んで欲しくないのなら、私が向かってくる敵を全て殺す。この命に代えても、絶対に皆を守りぬく」
「でもそれじゃあ、ハナが犠牲になるじゃない！」
「アスナ」
花咲はアスナを後ろから抱きしめ、静かに囁く。
「私にとってアスナは神様なの。だから怖くないよ、死ぬのは。神様のために死ねるなら本望だもの」
「やめて……」

「命令してよ、アスナ。次は何をすればいいの？」
「やめて」
「安心して、私はどんなことでもするよ」
「やめてよ!!!!」
アスナは花咲を振り払って叫んだ。花咲は抵抗することなく柱に背中を打ち付けると、それでも痛がる様子を一切見せずにアスナをまっすぐ見つめ続けていた。自分はアスナに使われるために生まれてきた武器だ――――花咲の瞳は彼女にそう訴え続けていた。
「一〇年前、貴女は命懸けで私を助け出してくれた。それからずっと、貴女の存在が私を守り続けてくれたの。だから今度は私がアスナを守らなきゃいけないの」
「ハナ、もうやめてよ……」
「大丈夫、アスナは何もしなくていいんだよ。私が全部殺してあげるから、壊してあげるから。あの日、あの時から、私は貴女のために命を捧げるって決まったのだから」
「やめて……」
「どうして？　どうして、アスナは泣いているの……」
そんなために助けたわけじゃない。
花咲の気持ちを受け止めきれずに、アスナは静かに泣き崩れてしまう。どうしたらい

いのか余計に分からなくなり、頭の中がグシャグシャになっていく。
「アスナ、ごめんなさい」
「いいの……私が、私が覚悟を決めなきゃいけないんだ。きっとそういうことなのね」
ゆらりとアスナが立ち上がったその時。
敵襲を知らせる警報がシラヌイ艦内に鳴り響いた。

第5話：理想の戦争（前編）

1

「よくぞここまでモビルスーツを短時間で用意してくれた。感謝するぞ、カズマ・シュレイナー」

『うちら裏稼業の商売は早さが命ってわけでさぁ。まぁ感謝するなら、ジャスレイの伯父貴に頼むぜ、旦那ァ』

カズマは回線越しにいる傭兵団ソードフィスト団長の、クライス・フィレッジに軽い口調で言った。

暗礁宙域に浮かぶ機影。全部で十一機あり、そのうちの九機は民間でも作業用として使われているモビルスーツ、スピナ・ロディである。傭兵や民間警備会社にも広く普及しており、ロディフレーム特有の扱いやすさを追求した信頼性の高い非常に優秀な機体として知られている。

『えーっと、隊長のオッサンはこれで良かったわけで？』

カズマの乗る百錬はデブリの影に隠れる。カズマの目的はあくまでも試作機の実戦データを持ち帰ることにある。戦闘には参加しないようだ。

「もちろんだ」

クライスは岩のようにゴツゴツとした顔に力を入れ、厳かに返事をした。ファンタジーに出てくるトロールのような怪物を彷彿とさせる表情、そして巨大な体をしていた。怒りが彼を怪物にしているのかもしれない。

『とはいえ、これだけのモビルスーツを仕入れたら報酬入っても赤字なんじゃね？　提案した俺が言うのもなんだけどさ』

「かまわん。これは弔い合戦だからな。それに数で圧倒しなければ、確実に奴らを仕留めることはできないだろう。万が一、逃げられてしまったら報酬も貰えない」

『ま、そりゃそーなんだけど。んじゃ、俺はこっちで試作機の動きを観測しておくから、あとはよろしくね』

「御意」

クライスはそう言って回線を閉じ、自機を前に出してシステムを戦闘モードに移行させた。

両肩に後ろに伸びた長いスラスターを備えており特徴的なフォルムとなっている一方で、胴体から下は百錬を元にした堅実な設計となっていた。両肩にはグレネードランチャー、両脚にミサイルポッド、バックパックに二丁のライフル、両手にナックルガードを持った重火力型の装備で、深い青の装甲を身に纏っている。

「テイワズから貰い受けた試作型モビルスーツ、青犢（せいとく）で仇を討たせてもらうぞ――月輪の鷹団のガンダムフレーム！」

青犢の頭部にある六つの目が鋭く煌めいた。

2

アスナは急いで艦橋に向かうと、既にヒューマンデブリの少年たちがオペレートを行っていた。暗礁宙域のため広範囲索敵が難しく、既に敵モビルスーツからの攻撃を受けているようだ。戦艦のナノラミネートアーマーが機能しているとはいえ、衝撃は艦内に襲いかかってくる。

艦内が大きく揺れ、アスナは艦長席にしがみつきながらも指示を出そうとした。しかし何をしたらいいのかまるで分からない。

「こんなに早く敵が仕掛けてくるなんて……」

どうすればいい。

月輪の鷹団の子供たちを統べる身として自分には何ができる？

「そ、そうだ！　早くモビルスーツを出さないと……！」

モビルスーツ対戦艦の状況において、まずモビルスーツ側が最優先で狙うべき部位はモビルスーツデッキだ。艦載機の発進を阻止しなければ、敵戦力の増加を許してしま

う。アスナは男たちの会話にもついていけるようにと、昔から父親にそのような戦術論を叩き込まれてきたのだ。

社交パーティーで成り上がりの傭兵や軍事会社の社長と話せるようになるために学んでいた知識が、まさかこのような状況で役に立つとは。

「モビルスーツ、お願いします！　あと、できる限りモビルスーツデッキに被弾させないように動いてください！　あそこを壊されたら戦えなくなります！」

「了解!!」

リウの大声が艦橋に響き渡る。

敵影は全部で四つ。数では劣っているものの、戦艦の支援砲撃を加えれば有利に戦いは進められるだろう。ここで敵を追い払って、早く暗礁宙域から脱出しないと。

アスナは焦る気持ちを抑えて、指揮を続けた。

3

モビルスーツ格納庫では、帽子を深くかぶった整備班の少年が現場の指揮を行っていた。彼の名前はブロック。十二歳にして、整備班の少年たちを纏めている。

「アスモデウスは推進剤の補給が終わり次第、出撃っスよ！　向こうさんは、もうこっちに銃口を向けてきているようっスから！」

アスモデウスの全身から伸びていたチューブがパージされていく。パイロットスーツを身にまとった花咲は軽快な動作でコックピットに入ると、慣れた手つきでシステムを起動させる。

「うッ……」

モビルスーツと背中にある三本の阿頼耶識接続コネクタが機体と繋がっていく感覚が、花咲の体中を駆け巡った。まるで全身に針が刺さるかのような鋭い痛みは、何度経験しても慣れることはないだろう。しかも前回の戦闘で駆動系にズレが生じており、少しだけぎこちない感覚がした。

『……いちおう調整はしておいたっスけど、まだシステムに負荷が掛かっているようで……整備マニュアルは大人たちが持ち出していたようで全部は修正できなかったっス。申し訳ないっス……』

「十分よ」

『……顔色が悪いのもシステムの負荷のせいっスか？　無理はしないでくださいっスよ』

「問題ないわ。ちょっと分からないことがあっただけだから」

分からないこと。

どうしてアスナは自分を拒絶したのか。自分が命を捧げて戦うことのどこに、アスナ

にとってのデメリットがあったのだろう。やはり自分は信用されていないのか。アスナの命を守り切れるように見えないのか。

ならば戦功を立てて、それを証明しなければならない。

アスナに信じてもらえるためなら百人だろうと、千人だろうと殺してやる。

花咲は決意を胸に操縦桿を握る。

「ブロックは十分やってくれているわ。ありがと」

『……そう言ってくれると嬉しいっス。ご武運をっス』

整備班の少年たちはアスモデウスから離れていき、モビルスーツデッキが展開を始める。背中にメイスと滑空砲をマウントしたアスモデウスの巨体は格納庫の開いた床の向こうにある、カタパルトまで移動。元々、競り市の商品として扱われていた為、アスモデウスは装備も鉄華団のバルバトスを意識してある。

回線が入り、アスナの顔がモニターに映し出された。花咲は彼女の目をまっすぐ見つめながら、静かに一言。

「さっきはごめんなさい」

『うんん、大丈夫』

カタパルトが展開され、くぐもった暗礁宙域の宇宙（そら）が眼前に現れた。

『ハナ、まずは先陣を切って、敵モビルスーツ部隊を引きつけて。ジャックさんとブリア

ンさんの出撃が完了次第、各個撃破で』
「了解」
何があろうとアスナのために自分は戦うだけだ。それが自分の命の使い方なのだから。それがアスナのためになる。花咲は迷うことなく、前を向いた。
オペレーターであるリウの大声が響くも、花咲は軽い返事でやりすごす。
『いつでも出撃どうぞ!!!』
「ええ。花咲レゴリス、ガンダムアスモデウス、出るわ」
カタパルトのレールをアスモデウスが滑走する。火花が四散し、鋼鉄の巨体が真空へと解き放たれた。アスモデウスは姿勢を立て直すと、展開したバックパックから伸びたアームが滑空砲を右手まで運ぶ。五本のマニピュレーターで滑空砲の持ち手をしっかり掴むと、双眸を煌めかせ目の前の敵に向かっていった。
「敵、四機だけか」
アスモデウスは滑空砲を構えて、敵機のスピナ・ロディに照準を向ける。大口径から放たれた弾丸はそのままスピナ・ロディの胸部に直撃、ナノラミネートアーマーの装甲を僅かに削り、弾かれた弾丸が右肩のフレームを破壊した。
「くる!」
ハンドアックスを振りかざして迫ってくるスピナ・ロディにアスモデウスはメイスで

応戦する

「これやっぱり使いにくいわ」

バルバトスに似せる為に急造した何の変哲もない鉄の塊のような武装であることに加えて、花咲自身、鈍器というものが性に合わなかったというのもある。しかし今、花咲が使える近接武器はこれしかない。

花咲はもう一つの敵の気配を察し、振り返る。背中に向けて、スピナ・ロディがバスターソードを振り下ろしてきた。しかしバスターソードはアスモデウスを叩き斬ることなく、弾かれて飛んでいく。

『ヒュー！　お待たせ！』

シラヌイの甲板の上はジャックのユーゴーが対物ライフルを構えていた。銃口から放たれた弾丸はちょうどバスターソードを持つスピナ・ロディのマニピュレーターに炸裂していた。

『もう一発！』

ジャックのユーゴーは仰け反ったスピナ・ロディの頭部にめがけて銃弾を撃ち込んだ。銃弾はメインカメラに炸裂し、敵は戦場を目視でしか確認できない状態になってしまう。こうなれば大抵の敵は撤退するだろう。目の前しか見えないモビルスーツは戦場では何の役にも立たない。

「待っちゃいないけど、ありが」
アスモデウスはぶつかり合っていたスピナ・ロディのハンドアックスをメイスで弾く。
「と」
そしてガラ空きになっている右脇腹に思いっきり鉄の塊を叩き込んだ。ひしゃげていくコックピットの中にいたパイロットは、崩壊する自機の装甲板やフレームによって押し潰されて絶命する。
アスモデウスが一機撃破したのを見ると、残りのスピナ・ロディは背中を向けて撤退していく。味方が一機やられただけで逃げ出すとは、やはりその場で雇った安物の傭兵なのだろうか。少なくとも逃げる場所があるということはヒューマンデブリではない。
『敵が逃げていくな……』
到着したブリアンのユーゴーが花咲のアスモデウスと向き合う。ブリアンは一〇代後半であることを感じさせない低い声で花咲に言う。
『追った方が良さそうだな』
「でも追撃するかどうかアスナに聞かないと」
『やめとけ。あの子は俺たちの所有者だが、つい先日まで戦争なんて知らない世界で生きてきたんだ』

「アスナを疑うの？　ブリアンでもそれは絶対に許さ――――」
『逆だ』
　ブリアンのユーゴーはアスモデウスを横切って、撤退していくスピナ・ロディたちに向かっていく。
『信じている。守らなければいけないと思っている。だからこそ、何でもかんでも今のあの子に答えを求めちゃいけない』
「だけど」
『指示を求めすぎると、それがあの子にとっての負担になる』
「……わかったわ、やりましょう」
　アスナのことを信じていないわけではなかった。が、やはり戦争について多くのことを知っているのは自分たちであることを、花咲は否定しなかった。
　撤退する敵を見逃せば、自分たちの位置や戦力を相手に教えてしまうことになる。そうなれば戦力を立て直した敵がこちらに奇襲攻撃を仕掛けてきたり、大きく上回る戦力を用意して物量作戦に切り替えてくるかもしれない。
　撤退するからといって絶対に見逃すことはするな。殺せ、一人残らず。自分を拾ってくれた傭兵の男が口癖のように言っていた言葉だ。
　花咲は脳裏に浮かぶ地球での戦争の記憶を振り払い、アスモデウスを撤退中のスピ

ナ・ロディたちに向かわせた。
『追撃戦ね、了解っと！』
ジャックのユーゴーも狙撃姿勢を解除して、暗礁宙域のデブリに乗ってスコープを覗く。
ちょうどアスナたちの乗るシラヌイと、追撃隊の距離が開いた時だった。ジャックはスコープに映る敵影に気がついた。デブリの影にモビルスーツが隠れていたのだ。
『アスナ、ブリアン！　こいつらは囮だ、逃げろ！』
「敵!?」
『畜生、待ち伏せか！』
花咲はメインモニターに浮かぶ敵影が三つから九つに変わったことに気がついた。デブリの影を利用して待ち伏せしていたのだ。しかもご丁寧に、接敵までエイハブリアクターを停止させることで反応を消していた。
ブリアンのユーゴーはバスターソードを手に取って、右からくるスピナ・ロディを斬り払うが、左と前方からくる射撃をかわすことはできずに被弾してしまう。左脚部のスラスターが火を噴く。
「ブリアン！　今、助けるわ！」
アスモデウスは取り付いてきたスピナ・ロディを振り払うと、ブリアンのユーゴーに

向かってスラスターを全開にさせて助けに向かう。
『お前の相手はこの俺だ！』
接触回線で男――――クライスの怒りに染まった声が聞こえたと同時に、アスモデウスは横から割り込んできたモビルスーツのナックルガードを胸部に受けてしまう。衝撃でコックピットが揺れ、花咲は顔面をモニターに打ち付けた。
アスモデウスはそのまま吹き飛ばされてしまい、デブリに背中を打ち付けてしまう。
「こいつ!?」
アスモデウスの目の前に現れたのはテイワズの試作モビルスーツ、青犢であった。全身に重火器を装備しているにも関わらず、まるで高機動モビルスーツであるかのように素早い機動でアスモデウスに迫ってくる。
『貴様を討ち取る為に用意した、青犢の性能！　とくと味わうがいい！』
「邪魔だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
花咲の咆哮とともにアスモデウスのメイスは青犢に向かって振りかざされる。しかし、またも腹部にナックルガードを打ち込まれるだけで終わった。素早い機動でメイスの範囲から逃れ、同時に懐へ潜り込まれたのだ。
衝撃でヘルメットが割れ、額から血が流れる。
「そこか！」

『甘い！』

青犢が脚部を展開させると、そこからスラスターが出現した。そしてスラスターを吹かせて縦に一回転し、アスモデウスの放った滑空砲の銃弾をやりすごす。青犢は脚部のミサイルを発射、同時にナックルガードを破棄してライフルに持ち替え、射撃を開始した。

ミサイルの誘導を切るようにアスモデウスは動くが、その先にあるライフルの射撃までは回避することができずに、右肩と左足に被弾した。黒煙の中、アスモデウスは怯むことなく滑空砲を構えて撃つ。

「邪魔だ邪魔だ邪魔だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

早くこいつを殺さなければ、ブリアンがやられてしまう。

焦る花咲の気持ちとは裏腹に、滑空砲の弾丸は青犢に当たらない。機動性でも火力でも相手の方が一枚上手なのだ。どれだけ正確な射撃ができても、動きの速い機体を捉えるのは至難の業であった。

そもそもモビルスーツ戦における阿頼耶識のメリット一つは、人機一体を実現することによって反応速度を飛躍的に向上させることにある。しかし敵が阿頼耶識の反応速度でも追従できない機動をしてきた場合どうなるだろうか。

「死ね！　死ね！　死んでしまぇぇぇぇぇぇっぇぇ！」

当たらない。

白兵戦において絶対的優位の阿頼耶識も、射撃戦になった途端にそれを失ってしまう。

感覚で照準補正を行っている花咲は、その感覚が青犢の高機動に追いついていないのだ。今まで相手にしたことのないタイプの敵に、花咲は錯乱状態にあった。高機動で動き回る相手が大火力で自分を攻撃しているのだから、当然の結果と言えよう。

右側の腰のスラスターがライフルの射撃によって破壊された。メイスは爆風で吹き飛んでしまい、バックパックのアームがひしゃげる。滑空砲を庇うように機体を上方に向けるが、そこに殺到したミサイルが機体前面のナノラミネートアーマーを焼き焦がす。

『終わりだ、ガンダム！』

――――皆に死んで欲しくないのなら、向かってくる敵を全て殺す。この命に代えても、絶対に皆を守りぬく。

アスナに誓った自分の言葉が、花咲の脳裏を駆け抜けた。

約束したはずだ。そうだ、自分には皆を死なせたくないというアスナの願いに答える

義務がある。自己を犠牲にしても。
どんな手を使ってでも、目の前の敵を殺さなければならないのだ。
今まで自分を救い続けてくれた、世界で一番尊い存在を守るために。
「私の神様のために！」
アスモデウスは滑空砲を構え直し、照準を定める。青犢本体ではなく、その近くにあったデブリにだ。もう何年も前に撃墜されたであろうモビルスーツ、マン・ロディの残骸で、当然ながら機能は停止している。
「私はあんたを殺さなきゃいけない！」
滑空砲はその残骸に向かって放たれた。弾丸は残骸に炸裂すると、経年劣化して脆くなっている装甲板の破片が四散し、ちょうど付近を飛んでいた青犢に殺到していく。破片は青犢の両脚に突き刺さり、ミサイルポッドを破壊した。
『な……ッ！』
花咲はデブリを撃つことにより破片を撒き散らし、高速機動で動き回る青犢にぶつけることで散弾の代わりにしたのだ。所詮は阿頼耶識を搭載していない普通のモビルスーツだ。動きはコンピューター制御であるぶん単調で、反応して照準を合わせることは困難でも、ある程度の軌道を予測することはできた。
「こいつを殺して――――」

その時、ジャックから通信が入った。

『撤退だ、花咲！　いつも通りに、な！』

第5話：理想の戦争（中編）

4

『どうやら追撃に向かった二人が待ち伏せをくらったらしい！　狙撃でこっちも援護しているが数が多すぎる！』

ジャックの通信が艦内に響き渡った。

「待ち伏せ!?　相手は三機のはず……」

冷静になって考えてみると、モビルスーツを搭載した戦艦相手に四機で挑むことが不自然であった。見方によれば強行偵察と考えることもできたが、この状況で行うとは思えない。

しかし敵がこれほどの戦力を短時間で揃えてくるなど、誰も予想していない状況だ。

アスナは頭を抱えて次の指示を考える。

皆が生きて帰れる指示を。このまま敵をやり過ごせる指示を。誰も死なない指示を。

「は、ハナとブリアンさんに撤退指示を！」

『この距離じゃ回線は繋がらない！』

「え、あ……じゃあ、えーっと……」

ダメだ。こんな時どうすればいいかなど、アスナは知らない。冷えた頭なら考えることはできたかもしれないが、今の混乱した頭では何一つ思いつかなかった。言葉を出すのに精一杯だった。

『俺のユーゴーを中継地点にして回線を繋ぐ！　少し待っていてくれ！』

ジャックのユーゴーが狙撃地点を離れ、スラスターを全開にして二人の元へ向かった。

「どうすれば……こんな時、こんな時！」

自分があの時、違和感に気づいていれば。ちゃんと指示を出せていれば。

「戦艦こと向かわせ、駄目だそれじゃ危険すぎる。主砲で援護射撃は、届かない」

アスナは頭をかきむしりながら必死で考える。流れる汗も気にせず、ひたすらに考えた。

自分の判断で人が死ぬかもしれない。

もう誰も死んで欲しくないと言ったのは誰だ。

考えろ。

考えなきゃいけない。

そうでないとハナが、皆が死んでしまう。

「ブリアンさんのユーゴーから通信が届きました！」

「こっちに回して！」
モニターには灰色の砂嵐が吹き荒れていた。しかし声はノイズが激しいが何とか聞こえた。
『団長か！　こっちは敵が多すぎて逃げることもままならない』
「ブリアンさん、もう少し持ちこたえてください！　こっちでゲイレールを発進させます」
もうそれしか方法は無かった。誰でもいいから残っているモビルスーツのゲイレールに乗せて、援軍として送り込む。だが愚策であることはアスナも自覚していた。
そもそも発進準備もしていないモビルスーツをすぐに出せるわけがないし、阿頼耶識の移設作業もまだ行っていなかった。たとえ間に合ったところで物量の差は覆るはずもなく。
『駄目だ。ジャックに花咲を回収させて、シラヌイは戦線を離脱するんだ』
「でもそれじゃあ、ブリアンさんは！」
誰かの犠牲を以て、自分の命が助かるという状況だった。
自らの命を捨ててアスナを守った少年兵の姿が脳裏に浮かぶ。ブリアンも彼らと同じように、さも自分の命が「手段」であるような口調で言っていた。死という現象に恐怖を覚えることも、ヒューマンデブリのまま死んでいくことに疑問を一切抱くことな

く、彼は犠牲になろうとしているのだ。
「駄目よ！　もう誰かが死ぬようなことは――――」
『今までと同じだ。俺たちの命は誰かが生き残る手段として使われる。俺もそうやって仲間の死によって生かされてき……たッ！』
　回線越しに鉄が砕ける音がした。
『ついに俺の番がきた、そういうことだ』
「やめて……」
　ガラスが飛び散る音がした。
『団長。花咲とジャックが離脱したら、前方に煙幕弾を撃ってくれ』
「逃げて……」
　爆発音がした。
『それで撤退の時間は稼げる。いつもそうやって逃げていた』
「……」
　鉄がひしゃげる音がした。
『あと数回、誰かが囮になれば、暗礁宙域からも抜けられるはずだ』
　ブリアンだけではない。これから先、逃げるためには犠牲を出し続けなければいけない。モビルスーツが勿体なければ、モビルワーカーでもいい。爆薬を積んで特攻すれ

ば、モビルスーツ相手でも多少の足止めはできる。
『俺たちの命を使って生き延びてくれ、団長』
「そんなの、認められないわ！　逃げて！　今すぐ逃げてよ！」
『大丈夫だ。これがヒューマンデブリの死に方なん――――』
肉と骨が潰れていく音がし、通信が途絶した。

5

それから後のことはあまり覚えていない。
アスナは艦橋で泣き崩れ、指揮を放棄。判断は現場の子供たちに任された。
結論から言うと、シラヌイは撤退に成功した。ジャックが暴れる花咲を無理やり戦線を離脱させ、それを確認したシラヌイは煙幕弾を発射した。
モビルスーツの索敵機能では暗礁宙域の闇に消えた敵影は追えない。
しかし撤退ルートは完全な後退であった。シラヌイは襲撃を受けた場所に逆戻りしていた。撃沈した戦艦カスミの残骸がある宙域は周囲をデブリで囲まれており、戦艦で離脱するにはもう一度同じルートを通らなければならなかった。
格納庫では船員の子供たちが総出でアスモデウスとジャックのユーゴー、そしてゲイレールへの阿頼耶識の搭載作業が行われていた。アスモデウスは右腰のスラスターが

大破、各部のナノラミネートアーマーが剥離しているなど、損傷もひどい。武装もメイスを失い、残弾の少ない滑空砲と、回収したブリアンのユーゴーのバスターソードだけだ。

アスナはその様子をただ眺めていることしかできなかった。

スパナすら持ったこともないアスナに、手伝えることは何もない。

壁に背中を預けてその場に座り込んで、ただ恐怖に震えるばかりであった。

「ああ、あぁぁっ……」

自分の判断が人を殺した。そしてこれから先も殺し続けるであろう現実。自分が死んだほうがマシだと何度思ったことか。モビルワーカーなら何とか手動で動かせるし、自分が囮になれば皆が助かのでは。アスナは立ち上がってモビルワーカーのほうを見つめた。

ダメだ、戦い方の一つも知らない自分がモビルスーツの足止めをできるわけない。

なら今の自分に何ができるか。

格納庫で必死に頑張る子供たちに向けて、バイオリンの演奏でも行うか。

「どうして、私はいつもこう……」

自分一人では何もできないのだ。バイオリンを演奏することはできても、演奏の場を作り出せる人間ではない。男たちが権力を手にするための道具になることはできても、

自らが権力を手にすることはできない。守られることはできても、守ることはできない。

「アスナ、ごめんなさい」

花咲は、座り込んですすり泣くアスナを見つめながら、静かにそう言った。ヘルメットが割れて負傷したのか、頭に包帯を巻いていた。

「私が、私が悪いの……私がブリアンさんを殺したの……私が指示を出さなかったから！」

「それは違うわ。あれは現場の判断で――――」

「そうさせたのは私が何もできない、豪華な屋敷に閉じ込められた人形だったからよ！」

「アスナ……」

「私を傭兵団に差し出して。それならもう皆死ななくて済むでしょ……」

「それじゃあアスナが殺されてしまう」

「だったらどうすればいいのよ！」

もう嫌だ。逃げ出したい。こんな地獄からは……。

「アスナ団長」

ヘルメットを担いで現れたのはジャックだった。彼は、座り込んで何も指示を出すこともできずに、ただ己の未熟さを嘆いているアスナにそう言った。

「指示を頼む」
「ジャック！　今、アスナは苦しんでいるの。急かすようなことは言わないで。殺すわよ」
「花咲、お前には言っていない」
　止めようとする花咲の右拳を、見ることなくジャックは左手で受け止めて続けた。
「指示を頼む」
「なんで私なの!?　さっきので分かったじゃない！　私よりもブリアンさんのほうが的確に指示を出せた。誰かを犠牲にして生き残るための指示を！　私にはできない。私は指示を出す立場じゃいけないの」
「……それでもあんたは俺たちの所有者だ。俺はあんたの指示でしか動けない」
「私を傭兵団に差し出して」
「それはダメだ」
「敵は私の命を狙っているんでしょ？　だったら私が殺されれば、皆は助かるよ」
「帰るべき場所を失ったヒューマンデブリは殺されるだけだ」
「じゃあ今すぐ私を殺してよ！　私が死んだら、貴方が指示を出す立場になれるんじゃないの!?　貴方、天才なんでしょ!?　だったら私よりも良い指揮官になれるわよ！　屋敷の中で男たちのためにバイオリンを弾くだけの私よりも、ずっと！」

「駄目だ」
ジャックは引こうとはしなかった。
「俺は射撃に関しては天才だ。ついでに美男子だ。だけど文字を読むのは苦手だ。どうして生身で宇宙に出たら死ぬのか知らない。何を使って戦艦が前に進んでいるのかも知らない。金属がなんで錆びるのかも知らない」
腰を落として座り込んでいるアスナの頬を、掴んで上げてジャックは言った。
「俺にはバイオリンというものが、何かすら分からないんだ」
「ジャックさん……」
「でもあんたは知っている。俺たちヒューマンデブリや、敵の傭兵たちが知らないことをたくさん知っているはずだ。だから俺は団長のことを信じてついてきている」
アスナはジャックの差し伸べられた手に掴まって、ゆっくりと立ち上がる。まだ足元はふらつくし、目眩もした。
「さっきまで誰も死なないで生き延びようなんて、平和ボケたこと言っていたのよ。そんな私を信じていいの？」
「確かに団長の言っていることは誰もが夢見て止まない、そんな戦いだ。誰も死なない戦いなんて、今までなかった。必ず誰かが犠牲になった」
それがヒューマンデブリの戦いなのだ。銃を撃てば銃弾が消費されるのと同じよう

に、戦いになれば消費されるのがジャック達だった。しかし、
「言ってしまえば、団長の知っている戦争は、戦争を知らない人が描く理想かもしれない。だけど――――」
　ジャックはアスナの両肩を掴んで、力強く言った。
「俺たちの知らないことを知っているあんたには、出来るかもしれない。誰も犠牲になることのない……そんな理想の戦争が！」
　そうだ。
　アスナは屋敷の中で飼育されていた女ではない。たとえ権力の人形になっていたとしても、アスナは知ろうとすることはやめなかった。父親から叩き込まれた社交パーティーで話題になる安っぽい戦術論だけではない。
　この世界の科学を、歴史を、文化を。
「だから俺たちに指示を出してくれ。頼む」
「……後悔しても知らないわよ」
「へっ、あんたみたいな美人の命令に従って全滅なら本望だよ」
　ジャックは笑って、アスナの背中を叩いた。アスナはよろけることなく前に出ると、花咲の前に立って言った。
「心配かけてごめん、もう大丈夫」

「本当に、大丈夫なの……？」
「私がやるしかない。言ったでしょ、私も覚悟を決めなきゃいけないって。私も戦う。皆を呼んでくれない？　これから先、どうやって生き残るかを考えたいの」
生き残るための起死回生の一手が見つかったわけではない。
ただ考える頭が戻ってきただけ。
アスナは再び考え始めた。今まで身につけてきたあらゆる知識を総動員させて。
戦争が始めよう。誰も犠牲にせず生き残るための、理想の戦争を。

6

考えてから行動しては駄目だ。考えながら行動しなければ間に合わない。
アスナは皆が集まってくる間も必死で考え続けた。
この宙域は周囲をデブリで囲まれており、戦艦一隻が抜けられる道は一つしかない。モビルスーツでもデブリ群を抜けるようなリスキーな真似はしないだろう。デブリに衝突すれば、モビルスーツであってもただでは済まない。
ゆえに敵が現れる位置は一つしかない。撤退が功を奏したのか、偶然ながらもこれまでにない迎撃ポイントとなっていた。
だが戦力差がありすぎる。敵は九機のモビルスーツに対し、こちらは二機しかいな

い。しかも花咲のアスモデウスは損傷も激しく、敵の中にいる試作機に乗ったエースと正面からぶつかればやられるだろう。現在、阿頼耶識の搭載作業を行っているゲイレールを足しても焼け石に水だ。いずれにせよ全滅は避けられない。

「モビルスーツだけじゃ駄目よ。他に戦力になりそうなものを探さなきゃ」

戦力差を埋めるためにはこちらの戦力を増強させるか、敵の戦力をモビルスーツ以外の手段で削ぎ落とす必要があった。しかしアスナの手札はあまりにも少なく、頼りないものだった。シラヌイの砲台は撤退戦時にかなりの数が破壊されてしまった。残るはシラヌイの直上に漂う、撃沈した強襲装甲艦カスミぐらいだ。

「ねえ、ジャック。この戦艦ってデブリの中を航行できたっけ？」

「不可能ではないかな。だけどデブリにぶつかれば、当然ただじゃ済まない。続けて損傷するとナノラミネートアーマーも剥がれて、最悪沈むかね」

ジャックは少し苦い顔をした。嫌な思い出でもあったのだろうか。

「不可能ではない、か……」

暗礁宙域のデブリ帯は迷いの森とも言われている。センサーが全く反応しなくなるのだ。ゆえに目視で航行しなければいけない場合も多く、しかし逆に言えばルートさえ間違わなければ最高の奇襲ルートなりえる。

「デブリ群を抜けて敵の本艦に奇襲……は無理そうね。敵の本艦の場所を特定できそう

にない。だけど――――」

答えが見えてきた。

アスナの招集に応え、ヒューマンデブリの子供たちが格納庫に集まってくる。アスナを取り囲んで彼らは指示を待っていた。

「これで全員ね。今は私が貴方たちの指揮官よ、いいわね？」

異論は無かった。

「この船に爆弾ってある？」

「……遠隔操作で起爆できるヤツなら、第二格納庫の物置にいくつかあるっス。ＴＮＴだったっけ……数はあるっス。だけどモビルスーツを吹っ飛ばすには威力不足っスね」

ブロックはアスモデウスの整備の片手間で答えた。

「じゃあ推進剤の予備ってどれぐらいある？」

「……モビルスーツの推進剤ならそこの巨大タンクの中に入っているっス。モビルワーカーの推進剤のタンクは取り替え式だから、第二格納庫のほうっスね」

「取り替え式？」

「……ほら、宇宙用モビルワーカーに尻尾みたいについてあるやつっス。カスミのほうのモビルワーカーの予備タンクも全部こっちで保管してたっスから、数はかなりあるっス」

「分かったわ」
「……ただモビルワーカーのほうの推進剤は取り扱い注意っス」
「可燃性の物質が入っているってことかしら？」
「……そうっス。下手に扱うと爆発する感じっスね。安全性の低い安物っスよ」
「自己着火性の推進剤か。あとモビルワーカーって遠隔操作できたわよね」
「……いや、左右に曲がったりはできないっス。前進させることは可能ではあるっスけど」
「前進できたら十分よ」
　理想の戦争を実現するためのピースが埋まった。あとは準備を行うだけだ。
「じゃあ、新たにモビルスーツに乗ってもらう子を……」
「それなら俺にやらせてください！」
　勢いよく手を上げたのは、アスナよりもずっと背の低い黒人の少年だった。無造作に切り揃えられたボサボサな髪の毛が印象的だが、その瞳に子供っぽさはなく研ぎ澄まされていた。アスナはその顔立ちに見覚えがあった。自らを犠牲にしてアスナを助けた少年兵の顔にそっくりだったのだ。
「貴方は……」
「ゴードン・セリックです。兄さんの仇を取らせてください！」

「……」

「俺の兄さんはカスミに乗って貴女の警護をしていました。ここにいないってことは、きっとあいつらに殺されたんだ……だから、この命に代えても復讐させてください！」

ゴードンはアスナに詰め寄る。だがアスナは引くことはせず、堂々と言い放つ。

「私が貴方にして欲しいのは自己犠牲の復讐なんかじゃない」

そう言うと、アスナは皆に向けて言った。

「自分が犠牲になるとかそういうことよく言うわよね、貴方たちは！　どうせ自分は使い捨ての道具でしかないとか、自分の人間性を否定しているんでしょ。だけど私は認めない！　自分から進んで犠牲になるようなこと絶対に認めないんだから!!!」

今まで思っていたことをアスナは我慢することなく、喉の奥から吐き出した。

「っと……取り乱してごめんね」

アスナは気を取り直すと、ゴードンの肩に手を当てて静かに語りかける。

「ゴードン。貴方は皆を守るため……貴方のお兄さんが守ろうとしたものを、今度は貴方が守るの。その為にモビルスーツに乗ってくれるのなら、私は認めるわ」

「は、はい！」

ヒューマンデブリは自分の命を道具だと思い込んでいる。だからこそ、アスナが人間はそんなんじゃないと彼らに教えなければいけないのだ。文字も算数も生きるための

希望も、これから教えていけばいい。
　こんなところで誰も終わっていいわけないのだ。
「じゃあ、皆、今から私の指示に従って動いて。大丈夫。この作戦が成功すれば、誰一人死ぬことなく暗礁宙域から脱出できるわ！」
　アスナの指示とともに作戦は開始された。

第5話：理想の戦争（後編）

7

大方、準備は完了した。

アスナの予想だともうすぐ敵は襲撃してくるだろう。あと1時間もしないうちに作戦の全てが終わる。皆の命を「これから先」に繋げるかどうか、もうすぐ決まるのだ。

アスナはアスモデウスのコックピットにて機体に乗り込んでいる花咲の元を訪れていた。作戦前に伝えなければいけないことがあったからだ。

「ハナ、ちょっといいかな？」

「どうしたの、アスナ」

コックピットのモニターを掴んで、花咲の横に座るとアスナは言った。

「さっきの戦闘でハナが苦戦していたモビルスーツのこと、もう一度詳しく教えてくれないかな。少し気になることがあって」

「あ、うん。なんか凄く速くて、それなのに重火器たくさん積んで鬱陶しかったかな」

そんなモビルスーツが本当に存在するのだろうか。アスナはアスモデウスの戦闘データと照らし合わせて考える。

確かに高速で動いて相手の射線を切り、一方的に火力で圧倒するという戦術は誰がどう見ても有効に思える。しかし本当にそれが、現行のモビルスーツ開発技術で可能なのだろうか。少なくともアスナはそんなモビルスーツを聞いたことがない。

通常、火力と機動力はトレードオフの関係にある。機動力に振り切れば、火力は犠牲になる。いくら装甲を薄くしようと実現は難しい。それは何故か。

「おそらく敵は新型機。それもロールアウトして間もない、もしかすれば試作機の実戦データ所得のために投入されているのかも」

昔から軍事関係の教育は人一倍受けてきたつもりだ。モビルスーツのモデルぐらいはだいたい覚えている。これはどのモデルにもないタイプの機体だ。しかしライフルやグレネードランチャー、ミサイルポッドは傭兵の間でも広く流通されている一般モデルであった。

「だからこそ、弱点はある」

アスナは花咲にその弱点を教えた。教えた上でどう対処すればいいかも伝えておく。

「あくまでもこれは奴とハナが戦わざるを得なくなった状況。だから使う機会がないならそれに越したことはないけど……」

「うんん、ありがとう、アスナ。やっぱりアスナは私に何でも教えてくれる、神様だ」

「違うよ」

アスナは花咲の手を握って、目をまっすぐ見て言った。
「私はハナの親友よ。神様なんかじゃない」
「しん、ゆう?」
「そう。辛い時、苦しい時、ともに乗り越えられる存在なの。私だってハナに守られるだけじゃない。私もハナを守りたいと思っているの。ハナが私を信じてくれるように、私もハナを信じて歩んでいく。」
「アスナ……」
「命なんか捧げて欲しくない。ただ私はハナと一緒にいたいの。あの日のようにお話をしたり、笑い合いながら一緒にお茶をしたいの。だから――――」
アスナは本心を花咲に伝える。一点の曇りもない真実の言葉を。
「私と一緒に戦おう、ハナ」
花咲はアスナの手をしっかりと握り返すと、はっきりと返事をした。
「うん。アスナと私の二人で、やろう」
「ええ。私とハナなら無敵だよ」

8

「宇宙ネズミどもめ。うまく逃げたと思うなよ……お前たちの逃げた場所は、四方をデ

ブリに囲まれた暗礁宙域のど真ん中だ」
　クライスの乗る試作モビルスーツ青犢を戦闘に九機のモビルスーツが暗礁宙域を駆け抜けていた。長距離を逃げられてしまえばモビルスーツでは追えない。母艦と合流し、推進剤と弾薬の補給を行った後、再出撃したのだ。
「逃げ場などあるわけがない。殲滅するぞ」
『了解！』
『仇を討ちましょうぜ、隊長！』
『やってやるよ！』
　部下たちの士気が高揚していくなかで、クライスたちは一隻の灰色の戦艦を発見した。ゆっくりとだが前進しているようで航行能力はあるらしいが、砲台は破壊されており自衛は不可能な状態であった。この宙域に航行可能な戦艦と言えば、アスナたちの乗るシラヌイ以外にない（同型艦のカスミは航行不能）。
「見つけたぞ。どこからモビルスーツが出てくるか分からん。警戒しつつ、取り付くぞ」
　クライスはまず部下のスピナ・ロディ隊を前に出して、周辺警戒をさせつつシラヌイと思われる強襲装甲艦に接近していく。
『周辺にエイハブリアクターの反応ありません』
「奇妙だな……抵抗の意思が見えない」

すると、シラヌイの甲板から降伏を示す信号弾が放たれた。
「なるほど、降伏か。マリーメル家は代々、臆病者の血が流れていると見たわ。取り付いて、中にいるお嬢様を引っ張り出してやれ！」
クライスの指示通り、三機のスピナ・ロディはシラヌイの甲板に取り付いていく。格納された艦橋を引きずり出そうとしたその時。部下の一人から通信が入った。
『隊長、この戦艦おかしいんです』
「何がだ？」
『スラスターが破壊されているのに、前進しているんです』
クライスが異変に気がついた時には遅かった。甲板は次々と爆発していき、三機のスピナ・ロディは赤い炎に飲み込まれていった。

9

アスナは《シラヌイ》の艦橋で、現場からの報告を待っていた。エイハブリアクターを停止させているため、艦内は無重力状態にある。明かりも懐中電灯の光のみとなっている。艦長席の横には外付けの通信機が置いてあり、それで外との連絡を取っていた。
ゴードンの乗るゲイレールはちょうど暗礁宙域のデブリに隠れて、エイハブリアクターを停止させている。コックピットから外に出たゴードンは双眼鏡で、追撃してきた

クライスたち傭兵団のモビルスーツを監視していた。

『団長！　敵のモビルスーツが《カスミ》の甲板に取り付きました！』

「よし、起爆させて！　こちらもエイハブリアクター起動し、全速前進！」

アスナの号令とともにデブリ帯に身を潜めていた本物のシラヌイが起動する。

そう、クライスたちが取り付いたのはシラヌイではなく、撃沈していたカスミなのだ。撤退戦時に砲台が破壊されたため、シラヌイとカスミは航行能力の有無はあれど瓜二つになっていた。

クライスたちがカスミのスラスターを破壊し航行能力を奪ったため、彼らの頭の中にはシラヌイは航行能力残っているほうと印象づけられているだろう。カスミは沈めたはずだ、と。その盲点をアスナは突いたのだ。

撃沈したカスミのスラスター基部にモビルワーカーを取り付け、遠隔操作で前進させる。それによりモビルワーカーに押し出される形でカスミは前進する。簡易スラスターの完成となり、さも航行能力があるかのように見せることができるわけだ。敵が来る方向が決まっているので、モビルワーカーを見えないように隠すことも容易にできた。

あとは信号弾を放ち、中に人がいるように錯覚させる。降伏信号を受けた敵は格納されている艦橋を引きずり出そうと甲板に取り付く。そうなれば後は甲板に仕込んでい

た「爆弾」で敵モビルスーツを焼いてしまえばいい。

「総員!!!　対ショック用意!!!　突ッ貫!!!」

リウの大声とともにシラヌイはデブリを押しのけながら、クライスたちモビルスーツ隊に突っ込んでいく。デブリ帯から突然現れたシラヌイに対応しきれず、二機のスピナ・ロディがシラヌイの突貫に巻き込まれて撃墜される。

戦艦はその頑丈さゆえに、質量兵器として利用できるのだ。もちろん向こうが警戒している場合は簡単に回避されるが、奇襲なら話は別だ。回避する前に敵は戦艦に轢き殺される。

「ジャックさんは甲板で《推進剤爆弾》をくらった敵モビルスーツをお願い！　ハナはモビルワーカーの射出を！」

『りょーかいっと！』

『了解、アスナ』

ジャックのユーゴーはデブリの影に隠れながら、対物ライフルを構える。狙いを定めて、爆炎の中に佇む機影に向けて銃弾を撃ち込んでいく。銃弾は一機のスピナ・ロディの頭部を貫くと、その向こうにいたスピナ・ロディの胸部にも炸裂した。

『マジかよ!?』

ジャック自身、一発の弾で二機のモビルスーツを撃破するなど初めてのことで、驚き

を隠せずにいた。通常であればナノラミネートアーマーの影響で数発打ち込まなければ、モビルスーツは撃破されないからだ。

しかしこういう話がある。ナノラミネートアーマーは熱に弱い。対艦ナパーム弾などがその特性を利用した兵器としてよく使われている。つまり爆炎によって熱されたモビルスーツの装甲はナノラミネートアーマーを剥ぎ取られた、ただの鉄の板ということになる。そこに大口径の対物ライフルが炸裂するのだから、当然貫通する。

『何だか分からないけど、こりゃ気持ちがいいね！』

さらに言えば、甲板に仕掛けた爆弾はただの起爆式のＴＮＴではない。それに可燃性のあるモビルワーカーの推進剤を取り付けた、推進剤爆弾だ。通常は好んで使われない可燃性の高い推進剤だが、その安さゆえにモビルワーカーに積まれていることがよくある。そんな推進剤が爆発に巻き込まれたらどうなるか。

爆発の威力は何倍にも跳ね上がり、モビルスーツの全身を焼き焦がす炎となる。

「推進剤爆弾の使い方は教えた通り。狙いを定めて発射。タイミングを見計らって起爆よ」

『うん、大丈夫』

一方、ハナのアスモデウスはシラヌイの甲板に立ち、数十本もの推進剤のタンクをワイヤーで無人のモビルワーカーに取り付けたものを持ち上げる。そしてそれを前方の

混乱している敵モビルスーツ隊に向けて発射した。モビルワーカーの推力を活かして猛進する推進剤爆弾は、ちょうど二機のスピナ・ロディに炸裂し装甲表面を焼き尽くす。

そこにジャックの遠距離射撃が炸裂し、瞬く間に二機は撃墜された。

『やっぱり凄いな、アスナは……こんなこと私には思いつかないや』

艦橋では戦況が逐一、更新されていった。次々と撃墜されていく敵機、反撃は全くと言っていいほどなかった。

「スピナ・ロディ、七機大破!!!!　残り一機も中破!!!!」

これがアスナの立てた作戦であった。カスミを偽装することによりシラヌイによる強襲を成功させ、推進剤爆弾を使用することでナパーム弾のように相手のナノラミネートアーマーを剥がし、混乱した敵を遠距離射撃によって確実に撃破する。

戦力の差が覆っていくのは一瞬だった。

暗礁宙域という奇襲に最適な環境、破壊された砲台、可燃性の高い推進剤。どれか一つが欠けていたら、この作戦は成功しなかっただろう。

『わりぃ、団長!　残りの一機がすばしっこくて狙撃できねえ!』

「分かったわ!　ハナを向かわせる」

おそらく花咲の言っていた例の新型だろう。高機動でありながら、火器管制能力に長けている万能機。グレネードランチャーを甲板にシラヌイの撃ち込みつつ、高速機動で

遠距離射撃を回避していく。
アスナは花咲の乗るアスモデウスに回線を繋いだ。
「ハナ！　例の新型……やれそう!?」
『ええ、もちろん』
グレネードランチャーの直撃で黒煙が立ち昇るなか、一機のガンダムフレームが姿を現す。ブリアンのユーゴーが持っていたバスターソードを右手に構えながら、アスモデウスは宇宙を駆け抜ける一筋の光を睨みつける。
奴を落とせ。
奴を潰せ。
奴を殺せ。
『やらなきゃ、アスナを守れないもの』
殺意の眼光がアスモデウスの双眸に煌く。

１０

ずっと冷たい土の上で眠っていた気がする。
花咲はヒューマンデブリになってから五年間は地球にいた。ヒューマンデブリで地球の重力を体験した者は珍しいとよく言われるが、あまり実感が沸かない。宇宙だろう

と重力の下であろうと戦場はどこも同じだ。

どこの誰が何のために起こしたのかも分からない紛争の中で、ただ目的もなく人を殺し続ける。女子供でも命令があれば容赦はしない。見せしめに捕虜の処刑させられることも多かった。カメラの前で意味の理解できない言葉を述べさせられた後、捕虜の首筋にナイフを突きつけ勢いよく切る。

吹き出した血がナイフを握る手を濡らす。初めて処刑をした時から、血の臭いしない食事はなかった。首を切り裂かれ、絶命していく捕虜の呻き声が鼓膜に焼きついて何度も頭の中で響き続ける。

花咲は恐怖と罪悪感と寒さで眠れない夜に怯え続けていた。そんな時、ずっと傍にいてくれたのがアスナだった。誕生日カードに描かれたアスナの似顔絵を見るたびに、ヒューマンデブリになる前に過ごしたアスナとの日々が体を暖かくしてくれたのだ。

そうして今日まで耐えてきた。

いつしか花咲にとってアスナは神にも等しい存在になっていた。

アスナに祈ることで何でもできる。

恐怖も罪悪感も何もかもが吹っ飛んで、銃を握る勇気が湧いてきた。

今になって親友と言われても正直、実感が沸かない。

でもきっと、アスナならこう言うだろう。

――これから先、知っていけばいい。思い出していけばいい。私とハナが親友だということを。

その為にも、花咲は守らなければいけない。自分とアスナの「これから先」を。

「アスモデウス、いくよ」

花咲は操縦桿を握り、目の前を飛翔する敵モビルスーツを目指す。

アスモデウスはモビルワーカーに取り付けられた推進剤爆弾を抱えながらに突撃すると、グレネードランチャーの次弾装填を行う青犢に向けて投げつける。間一髪、爆発から逃れた青犢が煙の中から現れた。

「そこー!」

推進剤爆弾が通用しないのは百も承知。全ては、この一発を撃ち込むためにある。

アスモデウスの右腰に装着した、アンカークローが射出される。大破したスラスターの代わりに、ユーゴーの腰についてあるアンカークローの射出機構を移植したのだ。アンカークローは青犢の右足に巻きつくと、二本の爪を装甲に食い込ませて固定された。

『小癪な!』

「捕まえ……たー」

『ならば、青犢の加速に押しつぶされろ！』

青犢は両肩両脚のスラスターを展開させ、高速機動形態に変形。加速を開始し、アスモデウスを振り払おうと縦横無尽に飛び回る。

「あ、ぐっ！」

背中のスラスターを噴射させて青犢に追従しようとするが機動性能の違いから、引っ張られてしまう。そして加速に伴うGが花咲の全身に襲いかかる。パイロットスーツがミシミシと体に食い込んでくるのが分かった。

『これでは滑空砲も撃てないだろう！』

滑空砲を撃とうとアームを展開してしまえば、加速による負荷でアームが折れてしまう可能性が高い。敵の加速を止めるためにデブリ帯を足場にするという手もあったが、それをクライスは見切っていたのか。青犢はデブリ帯を避けて飛翔していた。

「まだだ……私はアスナを、信じているから……」

花咲は耐える。アスナの考察が正しければ、加速し続けた青犢は致命的な弱点を露出させる。そして、パイロットのクライスはそれに気がついていない。

『貴様だけでも道連れにしてぇぇぇぇぇぇ！』

「悪いけど、あんたと一緒に死ぬ気はないよ」

アスナとの明日を手に入れるため、生きるのだ。

アスモデウスの火器管制システムに異常が発生し、アラートがコックピットに鳴り響く。まもなく、背中にマウントされた滑空砲の銃身が加速によって折れ曲がった。同時に青犢の脚部に取り付けられたミサイルポッドが軋んだ。

「まだ私は生きるから」

加速によるＧの影響を一番受けるのは人体だ。高速機動を前提に造られた青犢のコックピットならまだしも、三〇〇年前の遺物であるガンダムフレームのコックピットにいる花咲は、本来であれば失神してもおかしくないほどのＧを全身に受けている。しかしモビルスーツのコックピットとパイロットスーツによる負荷の軽減で、体が押し潰されることはまだなかった。

ならば次に影響を受けるのは何か。モビルスーツはナノラミネートアーマーに加え、剛性の高いフレームを採用しているため頑丈だ。しかし武器は違う。青犢の搭載火器は高機動に対応していない。ゆえに加速によるＧで潰れるのだ。耐久性を重視して設計されていない、一般的なミサイルポッドなどは特に。

そして加速によって耐え切れずに潰れたミサイルポッドは爆発する。

『なに!?』

「アスナの言ったとおりだ」

戦場において万能など有り得ない。万能のように見える性能でも、何かを犠牲にして

いるはず。青犢の場合、それは安定性であった。加速をすれば搭載火器に負荷が掛かる。長期戦になればなるほどそれは顕著に現れ、整備性の悪化に繋がる。そして現在のように過度の加速による負荷によって火器が圧壊、誘爆するという最悪の事故も想定できるのだ。

試作機ゆえの欲張った性能による、致命的な欠点をアスナは見抜いていた。

そしてそれを伝えた。失神寸前の加速にも耐える肉体と精神力を持ち、高い戦闘技術で的確に弱点をつくことのできるモビルスーツパイロット、花咲レゴリスに。

『クソ！　何故動かん、青犢！』

「そろそろ……終わりよ！」

爆発により脚部を損壊した青犢は加速を止め、宙に投げ出された。その隙を見逃さず、アスモデウスはバスターソードを振りかぶって青犢に向かう。バスターソードは青犢の頭部に打ち込まれた。

『メインカメラが死んだ!?』

「死んじゃえええええええええええええええええええええ!!!!」

接触回線でクライスの慄く声がコックピットに響くが、花咲は手を緩めることなくバスターソードをコックピットに叩き込む。モビルスーツの燃料がまるで鮮血のように噴き出し、血しぶきとなってアスモデウスの純白の装甲を濡らす。崩壊する鉄の塊にク

ライスの肉体は押し潰されていき、大破炎上する機体の中で絶命した。
「はぁッ……あっ……はぁっ」
　極度の興奮状態と加速による身体負荷によって、荒くなった呼吸を花咲は整える。
　青犢の撃墜を確認すると、花咲はシラヌイの艦橋に回線を繋いだ。
「敵機撃破。残存勢力、ゼロ」
『了解。味方の損害は無いわ。ありがとう……ハナ』
　安堵したのか、回線の向こう側から嗚咽が混じったアスナの声が聞こえた。
「こちらこそ。ありがとう、アスナ」
　大破炎上する機体からバスターソードを引き抜いたアスモデウスは、暗礁宙域に広がるモビルスーツの残骸の中で立ち上がり、その双眸をシラヌイに向けた。
「作戦終了、帰投するわ」

第２部：鉄華団編
第６話：導く者たち

1

作戦は成功した、誰ひとりとして犠牲になることなく。

花咲の乗ったアスモデウスがシラヌイに帰投すると、既に大勢の団員たちが格納庫に集結して彼女の帰りを待っていた。今までにない戦いを繰り広げ見事勝利を勝ち取った彼らは、誰も死ぬことのない戦争に歓喜の声を上げていた。

「ハナ！」

そんな理想の戦争を実現してみせた少女、アスナ・マリーメルは格納庫に到着するやいなや、花咲の乗るアスモデウスの前に飛び移った。無重力にもだいぶ慣れてきたようで、すぐにコックピット前に降り立つと、中にいる花咲のほうを見る。

花咲は急加速に耐え続けていたのだ。あの状況であれば青臭を仕留めることができたのは花咲だけであったがゆえに仕方のないことだが、彼女に無理をさせすぎてしまったという責任感がアスナの心を締め付けていた。不安が広がっていくなか、アスナはハナに声を掛ける。

「大丈夫!?」
「ええ、むしろちょっと楽しかったかも」
　花咲は顔をゆっくりと上げて、アスナの声に静かに応えた。阿頼耶識の接続を解除し、アスナに向かっていく。そして差し伸べられた手をしっかりと握ると、花咲は言った。
「アスナの言った通り、あいつは私が殺したよ」
「無茶させてごめんね……」
「うんん。言ったじゃない。アスナのためなら何でもするって」
「まったく」
　花咲がアスナのために何でもするというのであれば、アスナは花咲が最大限に〝何でもできる〟よう、団長として最良の指示を出すべきだ。花咲の言葉の重圧に押しつぶされるのではなく、花咲の言葉に応えてみせよう。アスナはそう考えながら、花咲の手を握り返した。
「じゃあ私はその何でもするハナを、全力でサポートするわ」
「アスナ……」
「ハナが生きて帰る場所を、このシラヌイを守ってみせる」
　アスナと花咲がコックピットの外に出ると、団員たちの歓声が響き渡った。

「「我らがアスナ団長と、月輪の鷹団の悪魔――花咲の姐さんに万歳!!」」

「……悪魔って」

エースという意味を込めて花咲のことをそう呼んでいるのだろうが、若干ズレたネーミングセンスにアスナは苦笑いをせざるを得なかった。当の本人はまんざらでもないようで笑っていた。が、おそらくあまり意味を理解していない。

格納庫の端の壁にもたれて腕を組んでいるジャックを見つけたアスナは、彼のほうに向かっていく。自分が立ち直ることができたのは彼のおかげでもある。礼はちゃんと言っておきたいと思ったのだ。

「ジャックさん」

「よう、本日のヒロインたち！　敵モビルスーツを八機撃破したけど、異名の一つも付かずに放置されている天才美少年がここに――」

ジャックは戦闘中とは打って変わって陽気な声調で、右手を上げて言った。そんな彼の陽気な態度とは正反対に、アスナは前に立って深くお辞儀をした。

「あの時は叱咤激励してくださって、本当にありがとうございました！」

「え、あ、ええぇぇ!?」

アスナの行動に、ジャックのみならず周囲の子供たちもそして花咲も驚愕した。彼らからしてみれば、アスナは道具に対して最大限の敬意を持って接している奇人に見えた

のかもしれない。そもそも誰かに頭を下げられたという経験がないため、それがどういう意味なのかもあまり理解できていない様子の子供もいたぐらいだ。
「あ、頭を上げてくれ！　どう反応すりゃいいか分からない！」
「私、私……ジャックさんのこと尊敬しています！」
「は、はぁぁぁぁぁぁ!?」
「諦めかけていた私に勇気をくれた恩人です！」
「えっと、もしかして俺ってば、罪な男になっちゃった?」
　ジャックのその発言に性意識に目覚め始めた男子＋花咲が反応し、殺意の視線を殺到させた。次の戦闘で、アスモデウスがジャックのユーゴーに〝誤射〟をされてしまうかもしれないレベルで命の危険を感じるものであった。
「ああ、えっと、うん、とりあえず頭を上げてくれ団長」
「はい！」
　大粒の涙を流しながらもアスナは、ジャックをまっすぐ見た。ヤバイ泣かせてしまったと思ったジャックは一歩下がろうとしたが、後ろが壁であることに気がついてどうしようもなく追い込まれた感覚に陥ってしまう。
「ゴホン」
　とジャックは咳を一つ。

「団長はさ、もっと堂々としていたらいいと思うぜ」
「え？」
「それは俺たちがヒューマンデブリだとかそんなんじゃなくて、団員が団長を支えるのは当たり前じゃないか？　俺たちだって団長の世話になってるわけだし」
「それはそうですが……」
ジャックはアスナの肩に手を置いて、通り過ぎる間際にこう言い残した、
「もっと肩の力抜きなよ、団長」
今までアスナは碌な男しか知らなかった。権力にものを言わせて出世しか頭にない父親、その権力を手にするために女を使う許嫁。自分の家柄をアイデンティティにして自慢話に明け暮れるハイスクールの同級生たち。皆、アスナの容姿や家柄に寄ってきて優しいように振舞ってくるが、打算的で利用価値のあるもの、もしくは自らの欲求を満たしてくれる存在としか見ていないことが分かった。
ゆえに男の手は冷たいものだと、生まれてからずっと思い続けていたし、将来的にそのような存在に処女を捧げなければないという現実から逃れたいと何度も思ったことがある。
しかし今、アスナの肩に触れている男の手は暖かかった。計算や欲求が全く存在しない、純粋な感情によるもの。胸の奥に静かに収まっていくこの感情は一体なんなのだろ

うか。アスナは自分でも不思議になって、胸に手をあてて高まる鼓動の理由を自らに問いかけた。

「……うそ」

いや、嘘だ。嘘に違いない、間違いだ。

火照った頬は疲労によるものだし、さっきまで戦闘状態にあったのだから心臓がドクドク脈打っているのは当たり前だし、そもそも――――アスナは自分の中で必死に言い訳を展開していく。

アスナの元を去ったジャックは、後ろに控えていた団員の男どもに揉みくちゃにされて悲鳴を上げていた。彼自身〝そういう自覚〟は全くないのだから悪質だ。

そして花咲はというと、先ほどから延々と「やはりあいつは殺すしかない。仲間だろうと関係ない。アスナに近づく男は全員殺す殺す殺す殺す殺す……」と小声で物騒なことを呟いているなど、格納庫は非常に混沌とした状況になっていた。

「……うん、違う！　違うから！」

「何が違うの？」

「ハナ、忘れて！　さっきの私の顔は忘れて、命令よ、絶対に！」

「うん、分かった」

そう言って花咲は壁に思いっきり頭突きをして、アスナの方を見て静かに親指をグッ

と立てた。次の瞬間、頭に巻いていた包帯が外れて、ハナの顔面はみるみるうちに鮮血に染まった。

2

作戦終了から30分後。暗礁宙域を漂うモビルスーツの残骸を回収する、ゲイレールの姿があった。パイロットはゴードン・セリック。まだ幼さの残る黒人の少年兵であった。彼もまた阿頼耶識使いで、コックピットシートと背中のコネクタが繋がっている。

『ごめんね、作戦終了したばかりなのに仕事頼んじゃって』

「いえ、俺は戦闘には参加していなかったので、そんなに疲れていませんよ」

ゴードンはゲイレールを使ってカスミの甲板に爆弾を設置したり、モビルワーカーを取り付けたり、準備が必要な花咲やジャックに代わって裏方の仕事をしてくれた。

「それに今のうちに回収しておかないといけませんからね」

月輪の鷹団は犠牲者こそ出なかったものの、今回の戦闘でモビルワーカー五機と大量の推進剤を失った。資金面でも不安が残る今、金になるものは少しでも回収しておきたいというのが現状である。

「アスナ団長、俺……これで良かったんですかね」

『どうしたの？』

「いえ。ただ、兄の仇を取らなくて……。今までだと自分の仲間や家族を殺されたら、命を捨ててでも仇を取りに行くっていうのばかりで」

おそらく周りの大人たちが都合よく囮になってくれるよう、子供達に復讐心を刷り込んだのだろう。やられたらやり返す。一人殺されたら、殺し返さなければいけない。

「前の団長はよく言っていました。殺されたら殺し返さないと、死んだ奴の心は晴れないんだって」

そういう大義名分を作って、彼らを洗脳していく。道徳を教える大人のいないのだから当然だ。そうやって、いくつの命が消費されてきたことだろうか。

「不安なんです……兄さんが俺のことを恨んでないかって」

『大丈夫』

回線の向こうでアスナは堂々と答えた。

『貴方は皆の命を守ったの。誇っていいぐらいよ』

「でも仇は必ず……」

『ええ。機会があればね。だけど今じゃない。皆を守って散っていった人たちの意思を無駄にすることなく、前に進んでいかなきゃいけない時なの……』

「はい」

本当はゴードンも分かっていた。仇討ちなど出来ないことを。そもそも誰が兄を殺

したのかも分からないし、もしかすれば知らないうちに誰かに殺されているかもしれない。

そう、今ゴードンが回収しているモビルスーツのひしゃげたコックピットの中に、兄を殺した傭兵がいるかもしれないのだから。

しかしならば、どうやって自分は自分の命を消費すればいいのか。

どこで散らせばいいのか。

分からないまま、ゴードンは回収作業を続けた。

3

モビルスーツの残骸と強襲装甲艦カスミの残骸を回収したシラヌイは航行を開始した。部品を解体する時間も惜しいということで、カスミの船体の中に回収したモビルスーツを詰め込んで、それを牽引するという形で回収してある。

シラヌイの薄汚れた廊下にアスナはいた。目の前にはガラス越しに宇宙空間が広がっており、その手前にある鉄の手すりに腰掛けて、スティック状の携帯食料を口にしていた。ヒューマンデブリの少年たちが朝昼晩と口にしている携帯食料らしく、味はともかく一食で必要な栄養を補給できるという。

パッケージはごく一般的なスーパーマーケットに売ってそうなバランス栄養食にも

似ていたが、製造会社は聞いたことのないところだった。おそらく、低コスト大量生産で軍事関係の団体に売っている企業なのだろう。アスナのような上流階級の人間には目にする機会すらもないブランドだった。業務用を取り扱っている店に行けばあるかもしれない。

「味のない湿ったパンみたいだけど、少し苦味があるなぁ。これが栄養……」

ＴＨＥ・栄養、という味がした。栄養分を粗悪な製造方法で強引に凝縮しているのだから、当然ながら美味しいという感想は抱けなかった。しかしチーズフォンデュとかにしたら苦味がむしろアクセントになって抜群に美味しそう……そんな可能性を秘めた携帯食料であった。

（ここらへんでチーズフォンデュとか出てくるあたり、貴族思考なんだろうな……私）

男たちの支配する世界とはいえ、ここと比べ物にならない環境でアスナは育ったため慣れるのには時間が掛かりそうだ。歩くごとに鉄の音のする足場も、一日一回シャワーを浴びる習慣のない男たち汗の臭いも、文化の差による圧倒的なアウェー感も、アスナにとって初めての体験で戸惑うことばかりだった。

「でもこれ便利かも。テーブルマナー気にしなくて済むし、気が楽だ」

テイワズ襲撃からずっと生きた心地のしない張り詰めた緊張感の中にいたアスナにとって、ようやく訪れた休息の時。今後の指示や方針も何とか決めることができたし、

あとは目的地に付くのを待つのみだ。その間に敵の襲撃がないことを祈るばかりである。

目的地。

「ドルトか……実家に帰るのは何ヶ月ぶりだろう」

暗礁宙域を抜けてしばらくした場所に、地球四大勢力の一つであるアフリカユニオンの公営企業ドルトカンパニーが所有するコロニー群がある。アスナの実家は地球出身の富裕層が多く住むドルト3で、アスナの父はドルトカンパニーと深い繋がりがあった。

ドルトコロニーは二年前の労働組合の大規模クーデターによって反体制の機運が高まっている。最終的に組合側の勝利となったあの騒動により、反体制派の武装蜂起が頻発するようになったという。アスナの父はドルトカンパニーと繋がりを持つ一方、裏では組合側の武装蜂起にも手を貸しているため、アスナも騒動に関しては色々と知っていることは多い。

父が死んだ今、マリーメル家はアスナが継ぐことになるだろう。反体制派との繋がりも利用できるということだ。そこで鹵獲したモビルスーツなどを反体制派に売り込むことで、今後の活動資金を確保するべきだとアスナは考えたのだ。

「今後の活動、ねぇ」

月輪の鷹団は名目上、運送業を行う会社だが、やっていることは違法な海賊行為だった。これから先も同じことを続けていけば、今回のように様々な勢力を敵に回しかねない。いくら背後に巨大企業があり、隠れ蓑にできるからといっても危険は付きまとう。

ならば今後の活動は違法なものは極力避けていくべきだ。例えば民間軍事会社として月輪の鷹団を再編して、宇宙での運輸の護衛を担当するなどという道もある。圏外圏での輸送は今やタービンズ一強といっても過言ではないが、それ以外の運送業者も少なからず存在する。父の築いた人脈を伝っていけば、仕事は見つかるはず。それとも――。

休息するべき時でも色々と思考を回してしまうアスナは、ガラスの向こうに広がる暗礁宙域に意識を飛翔させていた。

そんな中、同じように携帯食料を持って花咲がアスナの隣に立った。彼女もアスモデウスの調整が終わり、ようやく休憩に入れるといったところか。

「お疲れ、ハナ」

「うん。アスナこそ、本当にお疲れ様」

花咲はアスナが握り締めていた携帯食料の包み紙を指差して言った。

「アスナはもっといいもの食べないと」

「いいよ、こっちのほうが早く食べれるし」

「食堂のほうにはハンバーグランチとかあるよ」
　おそらく大人たちにはちゃんとした食事が振舞われており、対するヒューマンデブリの子供たちはアスナの手にしている携帯食料しか与えられていなかったのだろう。
「うんん、それは皆で分けて食べましょ」
「でも」
「私とみんなは同じ人間なんだから。同じものを一緒に食べたほうが気分いいじゃん」
「アスナがそれを望むなら……」
　花咲はこくりと頷くと、アスナと同じ方向を眺め始めた。
　ふとアスナは花咲の横顔を見る。顔の左半分に火傷の痕があり、左眼は白くなっていた。おそらく殆ど見えないのだろう。普通なら髪型とかで隠したりするはずだが、花咲はそれをしていない。
「ハナってさ、火傷の痕とか気にしていないの？」
「むしろ私にとってこれは証なの。私が私である証拠みたいなもの……私は神に助けて貰ってここにいるんだって」
「……神、か」
「あ、ごめんなさい。しん、ゆー、だったよね……」
「いいよ、神で」

　アスナはむしろその言葉を受け入れて、微笑んでみせた。
「ハナが思いたいように思えばいいよ。それに、今すぐ気持ち切り替えられるわけないもんね。これから先、親友になっていけばいいんだって思うの！」
「アスナ……」
「ハナは私の親友よ。この世界でただ一人、冷たい世界で手を取り合って生きていけた人。それ以上それ以下でもないの」
「……うん。今はまだアスナは神様……それでいいなら、私はアスナを信じ続ける。アスナに全てを委ねる。アスナを守るため全力で戦う。アスナの進む道を私が切り開く」
　花咲は今まで感じたことのない気持ちに戸惑いながらも、柔らかな笑顔でそれに答えた。今まで見せていたヒューマンデブリの花咲ではなく、屋敷の庭で語り合っていた頃の彼女に戻ったように、アスナには感じられた。
「ええ。お願いしていい、ハナ？」
「もちろんよ。そのために私はいる。アスナの為なら何だってやる」
　花咲は命を賭してアスナのために戦うと宣言した。それを否定するわけじゃない。ならば、アスナも花咲と同じ場所に立ち、戦えばいいのだ。
「じゃあ私はハナを連れて行くわ。いつか、ハナが銃を持たなくていい場所に」
　今すぐではない。

ただ月輪の鷹団を立て直して、事業を拡大していけば、いつかモビルスーツによる戦闘要員が必要にならない事業にも手を出すことができるだろう。そうなれば、花咲は背中についた阿頼耶識という三本の呪縛から逃れ、戦争のない世界で暮らしていける。

花咲だけではない。ここにいるヒューマンデブリの子供たち全員が、もう戦わなくていいのだ。

しかし道のりは険しい。一〇年後、二〇年後、もっと先になるかもしれない。

だが実現してみせる。

アスナは決意した。

「それってどういう場所なんだろ」

「教えてあげるわ。これから先、歩む道の中で……きっと分かるはず。だから私についてきて。私がハナを導いてみせる」

神なら神らしく、信徒を導かねばなるまい。

アスナは花咲の手を握ろうとした。が、なぜか力が入らない。

「だから、ハ――――う――――ぐ……――――……」

眠気だ。緊張が解け、決意し、ついでに食欲も満たされたらこうなるのは当然である。

アスナは花咲の胸に飛び込むように倒れると、そのまま寝息を静かに漏らしながら瞳を閉じた。

「……アスナの寝顔、久々に見たな」
花咲はアスナの尊い寝顔をしばらく見た後、米俵を担ぐように右肩に熟睡するアスナを乗せて、艦長室のベッドまで運んでいった。

4

暗礁宙域での月輪の鷹団とソードフィストの戦闘から三日後。
圏外圏で絶大な影響力を持つという巨大複合企業テイワズの本拠地である、大型惑星間巡航航船――――歳星。その居住区で一際異彩を放つ、レンガ造りの屋敷に一人の青年は訪れていた。
ＪＰＴトラスト所属のモビルスーツパイロット、カズマ・シュレイナーである。ショッキングピンクの柄のアロハシャツを着込み、日差しが強いわけでもないのにサングラスをかけて格好を良く見せていた。両手に紙袋を持ち、屋敷の扉の前に立つ。
「土産物が叔父貴の口に合うかねぇ～っと」
カズマがインターホンを押す前に向こうも気がついたのか、扉のオートロックが解除される。おおっ、と軽い声を上げながらもカズマは中に入っていく。灰色のスーツを着た部下数名に「ちーっす、ひさしぶり！」と軽く挨拶をすると、奥の部屋へと向かっていく。

万年無重力空間にいるような彼の態度を誰も注意しようとはしなかった。注意しても無駄だろうという嘆息がいくつか聞こえてくるが、カズマは無視して進む。
「遠征から帰ってまいりました、叔父貴」
カズマは奥の部屋にて、ウィスキーグラスを片手に窓の外を覗いている男に深くお辞儀をした。先ほどの態度から一転して、畏まりすぎな声で言った。なんとも切り替えの早い奴だ、と男は笑みを浮かべながら振り返る。
「よく戻ってきたぞ、カズマ」
黄色のコートに金色の装飾品を身に纏い、茶色の髪の毛を横に流していた。常に周囲を威圧する銃口のような目に、二つに割れた顎……その男、ジャスレイ・ドノミコルス。カズマの所属するテイワズの下部組織ＪＴＰトラストの筆頭であり、テイワズのナンバー2の実力者である。
「これ、土産もんです」
「洋菓子か。ジジイの出す菓子は不味いから助かるぜ」
「ビターチョコの詰め合わせです」
カズマの手土産をジャスレイは受け取ると、袋を破って中を取り出して一口食べる。
「苦いが、ウィスキーに合いそうだ」
「そう思って用意して参りました」

もう一方の紙袋の中に入っているウィスキーを取り出し、カズマは部下に用意させたグラスに注ぐ。グラスの中にある丸い氷がちょうど浮かぶあたりで止めて、滑らかな動きでジャスレイの前に出した。

「お前はいつも気が利くな。ほら、お前も飲め」

「叔父貴だけにですよ、そういうのは。ではお言葉に甘えて」

カズマはジャスレイの前に座ると、グラスにウィスキーを注いで飲み始める。

「で、どうだった？」

「予定通り、航路はこちらで確保しやした。月輪の鷹団の筆頭であるフィゲルの死亡は確認。あと試作機のことですが、武装の耐久面で問題があったようで戦闘中の不具合が原因で撃墜されました。ですが、モビルスーツの売上金は既に指定の口座に振り込ませて、もう叔父貴の財布の中にありますぜ」

「ご苦労。まったくあの試作機は売り物にならねぇな。開発資金の援助は取りやめだ。モビルスーツの開発なんぞ、名瀬みたいな男に任しておけばいい」

「ではそのように工廠に伝えておきます」

カズマはウィスキーを一口飲むと、報告を続けた。

「ただ月輪の鷹団のお嬢さんは今も生きているらしく、ヒューマンデブリどもを使って傭兵団を退けたようです」

「なんだと?」
「あのお嬢さん、かなりのやり手かもしれねぇですぜ」
「鉄華団の奴らといい、宇宙ネズミどもはタチが悪い。まぁいい。航路は確保したし、お前の口車に乗った傭兵団相手に商売もできた。勝ちってことでいいなぁ、こりゃ」
「ええ、叔父貴の勝ちです。が、まだ奴らには落とし前をつけて貰っていねぇのでは?」
奴ら――――月輪の鷹団。テイワズの航行ルートを不法占拠し利益を貪っていた海賊ども。コロニー企業の後ろ盾があるからといって調子に乗っていたのかもしれないが、見逃しておくわけにもいかない。このまま放置しておけば、またテイワズに不利益なことをやらかす可能性も高く、そうなれば月輪の鷹団を完全に潰さなかった傭兵団とそれを雇ったＪＴＰトラストの責任問題にも発展する。
ここは徹底的に潰しておいたほうが、今後のためでもある。自分の立場が弱くなれば、ただでさえ目障りなタービンズとその下部組織の鉄華団を台頭させかねないのだから。
「しかしこちらが動くにしてはリスクに見合った利益がねぇなぁ。何かいい考えがあるのか、カズマ」
「叔父貴にとって鉄華団は邪魔な存在ってぇなら、いい話がありますぜ」
カズマはタブレットを取り出し、ジャスレイに見せた。

「これはドルトコロニー周辺の航行記録です。この船団はマリーメル家の娘の許嫁、ライオネル・ランスローのものです。おそらくここで月輪の鷹団の強襲装甲艦と合流するはずです」

タブレットに表示された地図をカズマは指さした。そこはドルトコロニー群から少し離れた場所に存在する廃棄コロニーであった。厄祭戦時に多大なダメージを受け廃棄が決定されてから長い間、放置されているものだ。資材の確保のため外装がいくつか剥がされているものの、経年劣化が激しく使えるものが少なすぎるため誰も確保しに行こうとはせず、海賊たちの急場しのぎの隠れ場所ぐらいにしか使われなくなっている。

「この宙域を航行しているもう一つの船、それが鉄華団のイサリビです。歳星の工廠で改装されたマン・ロディの輸送と定期連絡を地球支部にした帰りみたいですが、ちょうどいい。鉄華団に月輪の鷹団の討伐依頼を出しましょうぜ」

「鉄華団に俺が依頼するだと!?　馬鹿言え、冗談じゃねぇぞ!」

ジャスレイはウィスキーを一気に飲み干して、グラスを机に叩くように置いて声を荒らげた。しかしカズマは動じることなく続けた。

「叔父貴からの依頼となっちゃ、名瀬の犬でも受けねぇわけにはいかねぇでしょう。それにいい機会です。月輪の鷹団に鉄華団を潰してもらいやしょう」

「それはどういうことだ?」

「月輪の鷹団にライオネルの船団、増援が来ることを隠して依頼し、戦力的に不利な状況で一気に叩かせる。月輪の鷹団にはあらかじめこちらから情報を流しておき、名高い鉄華団を討ち取る機会だと調子づかせる……。鉄華団を討った月輪の鷹団は本格的にテイワズに喧嘩を売ったことになり、そこで叔父貴が仇討ちだという名目で月輪の鷹団を討って落とし前をつけさせる。完璧なシナリオじゃないでしょうか、叔父貴」

カズマは携帯端末を取り出して、テイワズ本部と連絡を取る準備をし始める。

「鉄華団が勝ったとしても、月輪の鷹団は壊滅し、叔父貴の危惧している状況は避けられる。どちらにしても叔父貴には利益だけ落ちてきやす。依頼に関しても俺に一任してくだせぇ。上手く誘導してみせます」

「なるほど。さすがはカズマだ。これで鉄華団が潰れれば、名瀬の野郎の立場も危うくなるというもの……クズはクズ同士、潰しあって貰わねぇとなぁ」

ジャスレイという男は狡猾さとその口調、表情、態度、行動の全てで表現しているような男であった。如何なる手段を使ってでも敵は排除する。自分が成り上がるための道に邪魔者がいれば、どけと言う前に拳銃を引き抜いて殺す人間だ。

だからこそナンバー2にまで上り詰めたのだろう、とカズマは彼の上機嫌な様子を見て、携帯端末を耳にあてた。

（さて、俺が恋したガンダム乗りは、この窮地をどう切り抜けるかねぇ）

叔父貴にいい顔ができたということよりも、どこかカズマは楽しみにしているようであった。まるで何かに期待しているような。

そんなカズマの様子を気にすることなく、ジャスレイの高笑いが屋敷に響いた。

第7話：陰謀の渦中で

1

全長六〇キロメートルものコロニーが八基集合して形成されているドルトコロニー群の中で、テイワズ地球圏支部の存在するドルト6――テイワズの艦船が多く停泊する港に、鉄華団の所有する強襲装甲艦イサリビはあった。

赤い装甲に五つの主砲を備えており、海老のようにも見える外見をしていた。全面に施された鉄華団のマーキングは、彼らがテイワズでも有数の武闘派集団であることを示しており、並みのチンピラであれば視線を向けることも躊躇してしまうほどの威圧感があった。

鉄華団は火星ハーフメタルの利権をテイワズに手土産にしたことでテイワズの直系組織として認められて以降、受注拡大とともにその名声を圏外圏に広めていった。名実ともに常勝無敗の武闘派集団として、その界隈で名を知らぬ者はいないほどの組織となっている。

現在彼らは地球支部にモビルスーツの輸送と定期連絡を行ってきたところだ。近々、アーブラウで防衛軍が発足されるという話があり、追加戦力として地上でも使用できる

ように改装されたランドマン・ロディを地球支部にも配備することを決定した。定期連絡に関しても、長距離通信では送れない直筆の書類の受け渡しなどを行っているのだが、やはり防衛軍発足に関する資料は多く、その処理だけで丸一日かかった。

イサリビの艦橋では、液晶画面が取り付けられたテーブルを団員たちが囲んで会議が行われていた。壁のそこかしこにスプレーの落書きやマーキングが施されており、スラム街の一角のようにも見える。団員の平均年齢も低く殆どが一〇代そこらであったが、業務を行う眼差しは数々の修羅場を乗り越えてきた歴戦の傭兵と同じものだった。

「テイワズに喧嘩を売った海賊の討伐か。ＪＰＴトラストのお偉いさんがうちに依頼出すなんて、変な話だよな」

そう言ったのはくねった金髪が特徴的な青年、ユージン・セブンスタークであった。テーブルに手をついて真剣に考えているその姿は、ごく普通の青年にも見える。が、彼もまた阿頼耶識手術を受け、背中に接続端子を持った少年兵の一人であった。

「地球支部帰りの俺たちを見つけて、ちょうどいいと思ったのかもしれねぇな」

ユージンの言葉に返事をしたのは、突き立った銀の髪をした背丈の高い男だった。ワインレッドのスーツの上に緑色のコートを羽織り、腕を組んで堂々と立っている彼の名前はオルガ・イツカ――鉄華団の団長だ。鋭く伸びた前髪と一〇代とは思えない落ち着いた目は、白狼を彷彿とさせる。

「今まで世話になったこともない組織だろ？　ＪＰＴトラストってーとテイワズの中でも古参で、俺らやタービンズをあまりよく思っていないところだった気がするが。どうなんだ、オルガ？」
「ＪＰＴトラスト。テイワズの商業部門を担当する下部組織だな。兵器や資材の流通販売を行っていて、傭兵団ともいくつか関わりのあるとこだ。俺らよりも金持ちで、顔も広い巨大組織だし、その気になれば自分たちで何とかできるだろうが……自ら動くまでもねぇ事案と思って、俺らに依頼してきたのかもしれねぇ」
　テイワズの本拠地である歳星からここまではかなりの距離がある。傭兵を雇っても、最短距離で一週間はかかるだろう。となれば、テイワズ傘下で武闘派としても名高い鉄華団に海賊の討伐を依頼する流れは別に不自然でも何でもない。
　鉄華団とて直系組織になったとはいえまだテイワズ内での地位は低い。ナンバー２が筆頭の組織の使いっぱしりにされるというのも納得はできた。
「月輪の鷹団って海賊は廃棄コロニーに潜伏している、か。こっちは地球支部にマン・ロディを全部置いてったところだ。戦力としては不安だな」
「いや、奴らは消耗している。今の俺たちの戦力でも難なく潰せるだろ」
「まぁ敵の戦力を見りゃ分かるけどな。モビルスーツ３機に手負いの強襲装甲艦か。戦闘になるかどうかも分からねぇな」

ユージンは依頼の書類を手で持って、それを読み上げながら言った。
「増援の情報はない。早いうちに片付ければ、そこまで面倒なことにはならないと俺は考えている」
テイワズ内部にも鉄華団を快く思わない派閥は多い。ここでＪＰＴトラストからの依頼を蹴ってしまえば心象は悪くなる一方だ。逆に言えば使いっぱしりでも相手の思惑に乗ってやれば、それだけ相手に取って自分たちが「都合のいい存在」に思われる。
舐められてしまうわけにもいかないが、邪魔な存在に思われるよりはよっぽどマシだ。ここで功績を重ねて、今後のためにＪＰＴトラストとも繋がりを持っておくに越したことはないと、オルガは判断した。
「どのみちテイワズの直系組織からの依頼だ。よっぽどの理由がない限り、蹴るわけにはいかねぇ」
最短で行くためにも、今は流れに逆らうことなく前に進むべきなのだ。
オルガは艦長席に座ると、艦内放送を繋いで言った。
「積荷の搭載が終わり次第、俺たちは月輪の鷹団の討伐に向かう。地球支部帰りで疲れていると思うが、もうひと踏ん張りだ」
放送から暫く経つと、イサリビはドルト6を出航し、目的地である廃棄コロニーへと向かった。

「また戦いになるかもしれねぇが。やれるか、ミカ？」
オルガは艦長席の隣に立つ、一人の少年に視線を向ける。袖丈の合わないコートを着込み、右手のギプスの中から火星ヤシ（デーツにも似た火星原産の果実）を取り出して淡々と口に運んでいる。
黒髪の少年は周囲の団員とは違い、どこか浮いた存在であった。緊張感もあれば人一倍落ち着いている。しかし異質だ。それは光を失った右目でも、感覚のない右腕によるものでもない。他人にあるはずのものが欠落しており、他人には決してないものが彼の中にはあった。それが何なのか。少なくとも平時の彼から想像はできないだろう。
「――――ん、やるよ。いつものことでしょ」
その問に迷いなく答えた少年の名は三日月オーガス。鉄華団の悪魔と称されるガンダムバルバトスを駆る、エースパイロットだ。
「この道が最短なら、俺のやることはもう決まっているから」
三日月はブレることのない目で、イサリビの航路を見据えていた。

2

「嘘だろ……こんなのヤバすぎるだろ」
「今まで生き残っていて良かった」

「うンめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
「これが生き物の……肉」
「肉だ。これが肉の味なんだ……」
「でみ、で、み、でみならすーぞ？　なんて読むだこれ」
「毒入ってねぇよな？」
「……なんだこの食感は。全然パサパサしてない」
「これは芋、か？　この赤いのと緑の野菜は何だ……」
「アスナ、あーんして」

シラヌイの艦内食堂では少年たちが歓喜の声を上げながらハンバーグランチを貪っていた。プレートを密閉状態にすることで長期保存が可能な弁当で、レンジで加熱して料理が完成する簡易食だ。しかし今まで携帯食料ぐらいしか口にしたことのないヒューマンデブリの彼らにとっては初めての味で、感動のまま昇天しようとする者が後を絶たない混沌とした光景が繰り広げられている。

暗礁宙域の戦闘から三日経った。シラヌイも艦内設備の整備もある程度進み、暗礁宙域も無事抜け出すことができた。団員の心にも余裕が生まれ、こうして皆で食卓を囲むことができるほどにまで安定している。

歓喜する団員たちの中で、自分のハンバーグを食べさせようとする花咲を制止しなが

ら、アスナはプレートの上にあるニンジンを口に運ぶ。アスナ自身、ここ三日はずっと携帯食料を食していたため、ただの蒸したニンジンでも最高級の美味に感じられた。

「ああ……ニンジンいらないよ、と言っていた過去の私を殴りたい。口の中に甘味が広がっていく。なにこれスイーツ?」

　このまま順調に航行が進めば、四日後にはドルトコロニー群に到着できる。もう少しでドルトコロニーまでＬＣＳ通信（エイハブ・ウェーブの影響を受けにくい短距離レーザー通信）ができる範囲に入り、反体制派と取引ができるようになるだろう。

　今のところは順調だ。

　ゆえにニンジンを美味しいと感じるのだろう。ようやく味覚が戻って、生きた心地のする状況となっているのだから。

「アスナ、ニンジンもあげる」

「ハナ……ハンバーグランチ好みじゃなかった?」

「こっちのほうがいい」

　花咲はハンバーグランチをテーブルの隅に置いて、携帯食料を無心で食べ始める。昔から偏食家気質の花咲だったが、まさか一〇年間の戦火をくぐり抜け、それが強化されているとは予想外であった。てっきり泥まみれの果実でも平気で食べてしまうほど、タフになっているのかと思ったが、そうではないようだ。

「食事終わったら、皆に片付けるように言っておいて」
　アスナはハンバーグランチを食べ終えると、花咲にそう言って席を立った。食堂の冷蔵庫からハンバーグランチを二つ取り出してレンジで加熱し、食堂を後にする。ちょうど食堂の前の廊下をまっすぐ行ったところの突き当たりに、その部屋はあった。
「ジャック、中にいる？」
　ドアをノックすると、「いるぜー」と軽い返事が聞こえてきた。返事を聞くとアスナはドアを開けると、中にはジャックとベッドに横たわる一人の少年がいた。
「団長さんだ、こんにちは！」
　少年の小さな体は薄汚れた毛布で肩まで隠れており、頬も削れて痩せこけていた。ジャックと同じ瞳の色と髪の色をしている。無邪気に笑う姿は、彼がまだ一〇代にも満たない年齢にあることをアスナに思い知らせていた。
「こんにちは、コスターくん。ハンバーグランチ持ってきたよ」
　アスナはコスターの寝ているベッドの横にある丸椅子に座り、枕元のテーブルの上にハンバーグランチを重ねて二つ置いた。
「わざわざすまない、団長」
「気にしないで。仕事もひと段落ついて余裕あったし」
　コスターは歳の離れたジャックの弟だ。運送業者の下請けを生業としている家に生

まれ、六歳になるまでごく普通の生活を送っていたジャックとは違い、コスターは物心つく前からヒューマンデブリとして取引されたらしい。

「でもすごいね、兄さんは。こんな美人の団長さんと知り合いだったなんてさ」

「だろー？　俺が美少年だということが証明されたわけだ」

「……兄さんって、すぐに調子に乗ることが多いよね。こんな兄さんだけど、今後ともよろしくお願いします」

「ははは……」

アスナは考え事に夢中で会話の内容を聞き取れておらず、生返事しかできなかった。

ヒューマンデブリはその殆どが文字の読み書きのできない少年たちで、機械の操縦など出来るはずもない。その為、強制的に阿頼耶識の手術を受けさせられるのだ。阿頼耶識があれば教育がなくとも感覚で機械を動かすことができる。

もちろん非合法でちゃんとした設備のない場所で行うため、成功例が失敗例より少しだけ多い程度だとジャックは言っていた。ジャックは幸いにも成功し、モビルスーツパイロットとして第一線で活躍することができている。しかし弟のコスターは違った。

手術は失敗し、コスターは下半身不随になった。ナノマシンも定着することなく、むしろそれが原因で免疫不全に陥っている。風邪一つで生死の境を彷徨うこともあるらしい。

「そういえばこの前、俺ってば凄いことしたんだぜ？」
「なになに？」
「対物ライフルで敵モビルスーツを二機同時に仕留めたんだ。やはり俺は天才だった……」
「その話、前も聞いたー」
「そうだっけな……まぁいいや。ほら、ハンバーグランチだぞ。いつも携帯食料ばかりで飽きていたろ」
　ジャックはハンバーグランチを開封すると、フォークでハンバーグを突き刺してコスターの口元に持っていった。コスターはハンバーグを口に入れると、何度もその味を噛み締めて喉の奥に落としていく。
「うん、美味しい！　食べ物ってこんなに美味しいんだね」
「だろー？　兄さんの分も食べるかぁ？」
「いいの!?　やったー！」
　アスナは二人のやり取りをただ見つめるしかできなかった。自分は下半身不随の少年にハンバーグの味を教えられた。だがそれ以上のことはできない。阿頼耶識の手術の失敗例など星の数ほどあるが、その治療方法は確立されていない。
　それこそ最先端の再生治療を用いれば完治も不可能ではないが、莫大な金額が必要に

なってくる。今のアスナに用意できる金額ではない。一部の金持ちが再生医療を用いて二〇〇歳まで生きようとコツコツ貯めて、ようやく用意できるほどの金額なのだから。

「死ぬまでに食べられて本当によかった……」

コスターの言葉にアスナは目を背けざるを得なかった。彼は既に死を確信しているのだ。目の前に迫っている死。明日か明後日か、明々後日か。そう遠くない未来を見据えて、それでも明るく生きようとしているのだ。

アスナはジャックとコスターが話しているのを見ながら、静かに部屋を後にした。廊下でジャックが出てくるのを静かに待っていた

「月輪の鷹団を大きくすれば、いずればあの子の治療も……」

しかし今すぐではない。一〇年かかったとして、彼がそれだけ生きるのかも分からないのだ。今は前を向いてひたすら走るだけ。それは分かっている。だが、立ち止まって考えずにはいられないこともあるのだ。

「団長か、待っていてくれたの?」

「うん。一人じゃちょっと、ね」

部屋から出てきたジャックに泣き顔は見せまいと、アスナはぐっと目に力を込めて彼をまっすぐ見た。ジャックはアスナの行動に不思議に思いながらも、どういうことなの

か察して静かに語り始めた。
「あいつはもう長くは生きられない。分かっているんだ」
「ジャックさん……」
「でも失いたくないって気持ちは俺にもあるよ。あいつは俺のたった一人の家族なんだから。どれだけ考えても、諦めきれない命ってあるんだな」
　ジャックは他のヒューマンデブリの子供たちとは少し価値観が違った。自分の命を道具だと思い込み、むやみやたらに犠牲になろうとはしない。命に対して確かな実感を彼は抱いていたのだ。その理由が弟、コスターなのだろう。
「俺は今まであいつの命を背負っていきてきた。あいつが手術に失敗して廃棄処分されそうになった時も、必死で団長を説得して助けてもらったんだ。その代わり、俺はコスターの分まで働いた。人の二倍戦い、人の二倍功績を上げた。そうしなきゃ兄弟揃って不要だと切り捨てられる世界だったからな」
　ジャックの瞳は悲しげだった。
「幸い、俺は天才だった。銃の撃ち方もすぐに覚えたし、拳銃一つで何でもやれた。モビルスーツの操縦だって花咲が来る前は一番だった。おかげでたった一人の家族を、今日この瞬間まで支えていけたんだからな」
　彼の狙撃の腕は超一流だ。いくらヒューマンデブリとはいえ腕前が認められれば、相

応の待遇をしなければ、いつか脱走されてフリーの傭兵になられてしまう。そうならないためにも月輪の鷹団はコスターを人質に取っていた。そしてコスターの生活の保障と引き換えに、ジャックはヒューマンデブリとして戦い続けることを選んだのだ。
「だから、団長には本当に感謝している。あの時、あんたを信じて良かった」
「私、頑張ってみる。これから先の仕事が上手くいけば、弟さんの治療費だって何とかなるかもしれない。それこそ実家の財産も足したら、免疫不全だけでも治せるかも。だから、私は諦めたくない。今の私にできることがあるなら、何でもやりたい」
「だけどそれじゃあ、月輪の鷹団は――――」
「最低限運営できるお金は残しておくけど、まずは弟さんの治療費を稼がないとね」
「いいのか」
　海賊行為をしていた頃の月輪の鷹団では考えられないことだった。団員の弟の命を助けるために、莫大な金額の治療費を支援するなど。使い捨て同然の消耗品扱いだったヒューマンデブリの命を、全力で助けようとする人間をジャックは見たことがなかった。
「ええ。コスターくんも、大事な団員の一人だから。それに彼がこうなったのも、月輪の鷹団が違法に子供たちを買い取って阿頼耶識の手術をしたせいだし。その責任は絶対に取らないといけないと思うの」

アスナはどんな時でも諦めずに、命を向き合おうとしていた。
たとえそれがどんな結果になろうとも、仕方がないと目を背けることは絶対にしない。
人の命に対して、精一杯足掻いて何が悪い。

３

『で、依頼は受けることになったんだな』
イサリビ艦内の一室でオルガは机の上に置かれた端末の液晶を介して、一人の男と会話をしていた。音声のみの通信となっており、その声は渋みのかかった大人の男を感じさせるものであった。部屋は薄暗く、液晶の光がオルガの苦い顔を照らしている。
「ああ、兄貴。ここで依頼を蹴るわけにはいかねぇと判断しました」
『そうか。確かに話だけ聞いてちゃ簡単な依頼だ。修羅場をいくつもくぐり抜けてきたお前らなら、難なくこなせるだろうよ』
彼の名前は名瀬タービン。テイワズの輸送部門を管理する直系の下部組織タービンズの代表だ。オルガとは義兄弟の盃を交わした仲でもある。
『しかしＪＰＴトラストか』
「やっぱ俺らのこと良くは思ってないンすよね」

『だろうな。あっちはテイワズでも古参の組織だ。新参者のくせに成り上がってきた俺たちのことを快く思ってはいないだろうな』

名瀬もまたテイワズ加入後、クレーテ回廊を始めとした独自の大規模輸送網を構築し、その功績が認められて直系の組織まで成り上がった身である。

『それにあそこの代表、ジャスレイ・ドノミコルスは悪い噂も絶えねぇ男だ。何か計略を打ってこないとも限られねぇぞ』

「じゃあ俺らはハメられたってことですかね」

『そう考えるのは早計だが、警戒するに越したことはないだろう。テイワズも一枚岩じゃあない。信用しすぎるのも、疑いすぎるのも、悪手だ』

「はい……」

『確かにメンツも大事だが、それよりも大事なもんはいくらでもあるからな。忘れるなよ』

鉄華団はオルガにとって家族なのだ。彼らを危険にさらすわけにはいかない。鉄華団はＪＰＴトラストからの依頼を、たとえテイワズのナンバー2からであったとしても受けないという選択肢もある。オルガもそれが一番の安牌であることは承知していた

かといって依頼を蹴ってしまえば、それを理由にテイワズ内で悪評を広められかねない。こんなことで足踏みをしている場合ではないのだ。最短で成り上がり、一刻も早く

団員たちが戦わなくて済むよう戦闘以外の事業を拡大しなければならない。
　そのためにはどんな状況でも功績を重ねていく必要がある。長引けば、犠牲は増えていくのだから。
　オルガは頭を抱えて、しかし静かに答えた。
「ありがとうございます、兄貴」
『家族を守りてぇって気持ちは理解できるし、そのために前に進み続けなきゃいけねぇってのも分かるさ。要は焦りすぎるなってことだ』
「はい、肝に銘じます。……ところで、兄貴は今どこに？」
『ちょうど月のコロニー群で仕事の話をしている……駆けつけられねぇ距離でもないが、少し取引先とトラブってるところだ。何かあってもハンマーヘッドは寄越せない』
　いざとなれば自分たちだけで切り抜けるしかない。イサリビに搭載されているモビルスーツはバルバトスとグシオンリベイクとグレイズ改弐の三機のみだ。情報が正しければパイロットの練度も含めて、こちらが圧勝している。しかし情報通りでなければ窮地に立たされることも覚悟する必要があった。
『このタイミングで足止め食らうのは俺も少し変だと思っている。こっちでも色々調べておくさ』
「何から何まで世話になります……」

『気にするな。弟を守るのが兄の役目だ。お前らはお前らが思うように、前に進んでいきゃいいのさ』

「ありがとうございます」

オルガは深々と頭を下げて、そう言った。

イサリビはあと半日もすれば廃棄コロニーに到着するだろう。そこで全てが分かる。

これが真っ当な依頼なのかどうかも。

第８話：鉄華団の悪魔（前編）

1

ドルトコロニー群に向かう途中で廃棄コロニーと呼ばれる場所を通過しなければならない。アスナは廃棄コロニーの噂をよく耳にしていた。

曰く、ビーム兵器によって殺された住民たちが幽霊となって今も彷徨っているとか。曰く、幽霊の正体はギャラルホルンに発見されないまま徘徊し続けるモビルアーマーだとか。曰く、そもそも幽霊など存在せずギャラルホルンの特殊工作部隊の秘密基地になっているだとか。

とにかく様々な噂の絶えない、いわくつきの場所であった。現実的な話をするならば、海賊の急場しのぎの隠れ家として用いられることもあり、略奪行為などの被害が年に数回報告されている程度だ。

シラヌイも周辺宙域に警戒しながら、廃棄コロニーの横を航行していく。人間が宇宙空間に建造した円柱状の居住区であるコロニーは、直径二〇万キロメートルの超巨大建造物であり、その全長は七〇万キロメートルを越える。厄祭戦当時はコロニーコアという支柱を中央に作り、それを軸に回転することで重力を発生させていたという。

しかしそれも昔の話。シラヌイの横に浮かぶかつてのコロニーは、外装が剥がれ落ちて荒廃した内部が露出していた。無重力となったコロニーの中で無数の瓦礫が浮遊している光景は、艦橋からでもよく見えた。

「ここを抜ければ、ドルトは目の前よ」

アスナは艦長席に座り、シラヌイの航行を見守っていた。しばらくするとリウが焦り気味の大声で報告をしてきた。

「エイハブリアクターの反応複数あり!!」

「敵襲!?」

運悪くコロニーに潜んでいた海賊と鉢合わせしてしまったのか。アスナは艦長席を立って状況を確認する。

「廃棄コロニー内部にいるようです!!　ＬＣＳ通信が送られてきましたが受けますか!?!?」

「ええ、繋げてちょうだい」

海賊であれば、コロニー内部に潜んでいた場合は通信よりも先にモビルスーツを差し向けてくるはず。わざわざ隠れておきながら通信をしてくるということは、敵意がないのか、それとも通行料を支払わされるのかどちらかだ。

ＬＣＳ通信が繋がると、艦橋のモニターに見覚えのある男の顔が映った。

『アスナか！　無事で良かった。迎えに来たよ、愛しの我がフィアンセ！』
　忘れるはずがない、そのマヌケヅラを。かつてアスナを見捨てて、自分ひとりで脱出した彼女の許嫁、ライオネル・ランスローだった。
「え……」
『お互い激しい戦闘を生き抜いた身。話したいことは山ほどあるが、まずはこちらに来てくれないかい？』
「あ……」
　予想外すぎた。てっきり彼は月輪の鷹団を見限って、どこか別の名家に縁談を持ちかけ、権力を手にすることに必死だと思っていたのだから。心変わりでもしたのだろうか。いや、彼の様子から己の行動を恥じているようなものは一切見当たらない。
　ならば何故か。
「は、はい……」
　アスナは反射的にそう答えてしまった。手が震え始め、思考が閉ざされてしまったのだ。アスナの脳に刷り込まれた記憶が「彼に従わなければいけない」と、行動や思考を捻じ曲げていく。
『それでこそ僕の女だ。さぁ共に戦い、鉄華団を討ち取ろうではないかい』
　これから先、ろくなことにならないと分かっていても、今のアスナたちは従わざるを

得なかった。感情的にも、戦力的にも。サブモニターに表示されていたエイハブリアクターの反応は戦艦だけでも四つあったのだから。

「え……鉄華団って」

ライオネルが言うには、月輪の鷹団の討伐依頼を鉄華団が受けたというのだ。たしかに鉄華団はテイワズ直系の下部組織なので可能性は十分にあった。今のアスナたちが戦うべきでない相手なのは自明の理である。

ならばテイワズに投降し、賠償金を支払って示談に持ち込む。そういう選択肢しかないだろうとアスナは考えていた。

しかしライオネルは違った。鉄華団が月輪の鷹団を討伐するという情報を手に入れた彼は、わざわざ傭兵を雇って船団を結成し、逆に鉄華団を倒そうとしている。ライオネルたちの船団が向かっている情報を鉄華団は知らない。故に奇襲攻撃をかければ簡単に袋叩きにできるだろうという算段らしい。

事態はアスナの知らない場所で、引き返せないところまで進んでいた。

ほどなくしてシラヌイは廃棄コロニー内にいるライオネルの船団と合流した。

2

「会いたかったよ、アスナ！」

シラヌイの艦橋に入ってきたライオネルは一目散にアスナの方まで歩み寄ってくると、両手を大きく広げて高々に叫んだ。しかしアスナはライオネルの胸に飛び込むようなことはなく、ただ震えた手を後ろに隠しながら返事をした。

「はい」

「素っ気ないじゃないか、もっと喜んでくれないと」

ライオネルの後ろには筋肉質な長髪の大男――――シドレー・アルカラッドが控えていた。ライオネルの護衛と称して逃げ出した傭兵の一人だ。アスナも覚えていた。

「……ええ、嬉しいです。よくぞご無事で」

シラヌイは現在、ライオネルが率いている船団とともに、廃棄コロニーの中で停泊している。外ではアスモデウスの改修作業が急ピッチで行われていた。先の戦闘で受けた損傷箇所の修復とともに、武装の大幅追加も行われているらしい。

どうやら既にライオネルは鉄華団との徹底抗戦を想定しているようだ。

「ヒューマンデブリのお前たちも、よくぞ今までアスナを守ってくれた！」

ライオネルはいつにもまして浮き足立っている印象だった。それほど勝算のある戦いなのだろうか。それとも彼の浅学から沸き上がってくる根拠のない自信か。

「この船を君一人が指揮していたのかい？」

「はい」

「さすがは僕が見込んだ女だ！　女が旗を持ち立ち向かうなど、まさに現代のジャンヌ・ダルクさ！　しかしながらやはり女に戦争をさせるには無理がある。そこで僕と正式に結婚して、マリーメル家の財産と月輪の鷹団の指揮権を全て僕に預けて欲しいんだ」

やはりそういうことだったか。ライオネルにとってアスナは父の持っている利権や資産を手にするための手段にしかすぎない。

しかしそうなれば月輪の鷹団の団員たちはどうなる？　彼らの命をライオネルに預けていいのだろうか。

圏外圏で名を知らぬ者はいないであろう常勝無敗の武闘派集団、鉄華団を相手に戦うということがどういうことなのか、彼は本当に理解しているのか。

否、彼は目先の利益しか見ていない。物量で制圧するにしても、犠牲は出る。それこそ敵の練度はこちらよりも遥かに高いはず。たとえ勝てたとしても、多くの犠牲を払って手にするのは鉄華団を倒したという名声のみ。

そうなれば、ただでさえ暗礁宙域の一部を不法占拠していた月輪の鷹団は、テイワズと敵対関係を強めてしまう。それこそ徹底的に潰されるだろう。

「敵はこちらが一隻だと信じきって討伐にしにくる。だが実際こちらは戦艦五隻に、モビルスーツは十五機！　いくら鉄華団でもこの戦力差はどうしょうもないだろう！　どうだ、僕の完璧な作戦は。結局、戦いは数なのさ！」

断らなければ。
彼は月輪の鷹団のヒューマンデブリたちを使い捨ての駒として利用し、強引に成り上がろうとしているだけである。
守ると誓ったはずだ。もう誰も犠牲にしないと決意したはずだ。だから――――。
「――――」
「どうした？　僕の言うことが聞けないというのかい？」
「……もう誰も犠牲にしないで、くだ、さい」
「ん？　聞こえないな」
「もう誰も犠牲になるようなことはしないでください！」
「はぁ？　犠牲になるって、ヒューマンデブリどものことを言っているのかい？」
ライオネルの表情が歪み、アスナの首元を掴むと歯ぎしりをしながら叫んだ。
「僕がいない間に、デブリどもに情でも沸いたというのか！」
アスナは首元を掴まれた後、思いっきり投げ飛ばされた。壁に背中を打ち付けて、鉄の床に崩れ落ちる。彼は力が強いというわけではなかったが、手加減ということを知らないから質が悪い。痛みと恐怖で息が暫く詰まった。
「あ、あっ……あっ……」
それを見たオペレーターのリウは立ち上がり、ライオネルに歩み寄ろうとした。

「あんた、何している!!」
「はぁ……こんなゴミに慕われているのか、君は。シドレー、頼むよ」
「ええ、任せてください」
リウの前に立ったシドレーは、彼を大きな手で取り押さえると床に叩きつけた。
「所有者様に歯向かう道具がどこにいますか?」
「アスナ団長!!」
「品が無いですね。あと煩いですよ。私の鼓膜を破る気ですか」
そう言ってシドレーはリウの頭を殴りつけ、彼の意識を落とした。リウが気絶したのを見ると他の団員たちも立ち上がってなんとかしようとしたが、ライオネルはそんな周囲の様子に目を向けることなく、アスナに言った。
「もう一度、お願いするよ。僕に指揮権を譲ってくれないかい?」
「い……い、や」
「僕に指揮権を譲れって言っているんだよ!!」
「がっ!」
床に崩れたアスナの腹に蹴りを入れたライオネルは、彼女の髪を引っ張って強引に持ち上げると、顔を近づけて言った。
「君は僕のものだろう?　女の君が僕に歯向かうのかい?」

「……あ」

ライオネルのポケットの隙間から拳銃が見えた。力づくでも従わせるつもりだろう。アスナだけではない。ここにいる子供たち全員を殺してでも、彼は自分の思い通りにことを運ばないと気がすまない人間なのだ。

幼い時からそうだ。アスナは男こそがこの世の正義と呼ばれた狭い箱庭で育ってきた。言うことを聞かなければ折檻が待っていたし、男に意見するなどもってのほかだった。

ライオネルも同じ世界で生きてきた。許嫁になったその日から、表面上はアスナに優しい顔をしていた。だが、彼の思い通りに動かなければ、当然のように罵倒され時には殴られることもあった。彼の思い通りの食事を作り、彼の紹介した演劇はつまらなくても笑っていなければいけない。権力者の知り合いの前では良い顔をし、彼を立て、自分は彼と一緒にいて幸せですと嘘をつき続けなければない。

言葉だけでなく、表情や行動で。

ずっと支配されてきた。

今までも、そしてこれからも。

「はい……月輪の鷹団の指揮権を、貴方に預けます」

気持ちでは守りたいと思っていても、体に染み付いた恐怖はアスナの全てを支配して

いた。手が震え、悪鬼にも似た男が目の前にいる。逆らえば殺される。逆らえば、この世のあらゆる苦痛を与えられながら、惨めに命をもぎ取られる。

だからアスナは動けなかった。主張できなかった。声を上げられなかった。

「ああ、それでいいんだ、それで。僕の愛を素直に受け入れておけばいいんだよ」

ライオネルはアスナを突き放すと、艦内放送を行った。

「これより、月輪の鷹団の団員はランスロー家当主であり、アスナ・マリーメルの許嫁、ライオネル・ランスローの指揮下に加わることとなった。さぁ鉄華団を討ち取り、栄光を手にしようではないか！」

3

花咲は格納庫の中で手すりに寄りかかり、鉄の天井を眺めていた。格納庫にアスモデウスの姿は無い。そんな花咲の隣にジャックは立ち、携帯食料を食べている。普段はあまり喋らない二人だが、こういう非常事態になると情報の共有も含めて話をする。あくまで業務連絡的なやり取りだが、今日は違った。

「自分の愛機が近くになくて不安か？」

「それはどうでもいいわ」

「まぁ元々は売り物だったからなー」

アスモデウスはシラヌイの格納庫内では取り付けられない装備があるため、船外で作業が行われているらしい。鉄華団の悪魔と呼ばれるエースパイロットを倒すため、阿頼耶識のリミッターを人体が耐えうる限界まで調整し直しているとも聞く。

しかしそんなこと、花咲にとってはどうでもよかった。

彼女にとって、敵を殺せる――――アスナを守れる兵器なら何でも良いのだから。

「ライオネルとかいう男のことか。何か放送で言ってたな」

「ええ。あいつ、嫌な感じがする」

「同感だ。いい声をしていた。俺より美形かも」

「そこ？」

「ああ、重要だろ？」

花咲は呆れた様子でジャックから視線を逸らし、ポケットから携帯食料を取り出して口に運んでいく。

「アスナの許嫁って言ってたけど、突然やってきて鉄華団を討とうなんて変な話よ」

「許嫁ってどういう意味だ？」

「結婚する予定の相手のこと」

「……なるほどね。ちょっとショック」

「それでショック死することを祈っているわ」

「ひでぇ言いようだな。ま、たしかに変な話ではあるな」
花咲やジャックのようなヒューマンデブリの子供たちは、他人に選ばされた戦場しか知らない。ゆえに戦場が何故そこにあるのかを知らないのだ。どうしてライオネルとかいう人物が突然現れて鉄華団と戦おうとしているのか、どうしてアスナが何故指揮権を移譲したのか、花咲たちが知り得ることではなかった。
「ただ今は指揮官を信じて戦うしかないでしょ」
「……あんたって呑気ね」
「そうするしかないから、そうしているんだよ。」
命を賭ける意味も知らず、今まで二人は戦い続けた。今回もそうだ。そのはずなのだ。
「でもアスナが心配」
「……それは俺もだよ」
「じゃあ何で動かないの？　やっぱり男って、いざという時に情けなくなる。軟弱者」
そう言うと、花咲は携帯食料を全部口に詰め込んで格納庫を出ていこうとした。
「おい、もうすぐ作戦開始だぞ」
「まだ時間はあるでしょ」
「ああ、わかったよ。ブロックには、彼女は少しお通じが悪くて遅れるって言っておく」

「それを言ったら後ろから撃つわよ」
　どうしてもアスナのことが心配で、花咲はいてもたってもいられなくなった。廊下を駆け抜けて、戦闘前で張り詰めた様子の人々をかき分け、艦橋まで向かった。
「アスナ！」
「……ハナ？」
　花咲が艦橋に入ると、戦闘前とあってか各種オペレーターによる作業が急ピッチで行われていた。艦長席の隣にあるのはアスナの後ろ姿。そして本来ならば、リウが座っているはずの前方の席に見知らぬ大人が座っていた。そこだけではない。オペレーターは全員、月輪の鷹団の団員ではなくなっていたのだ。
　それで事態を察した花咲は、艦長席に座するライオネルに詰め寄る。
「あんた一体何者なの？　いきなり現れて指揮権を――――」
「女のくせに臭いな、お前。香水でもつけろよ」
　ライオネルは花咲に軽蔑の眼差しを向けると立ち上がり、彼女を突き飛ばした。そして隣に立つアスナの右腕を強引に掴んで引き寄せると言った。
「放送でも言ったとおり、この艦の指揮権は僕にあるんだ」
「勝手に決めないで！　それはアスナにあるはずよ！」
「お前らデブリは文句を言わずただ従っていればいいんだよ。人間様に歯向かうなって

教わらなかったのかい？」
「私のことはどうでもいい！　アスナをどうするつもり!?」
「どうするも何も」
　花咲の問いかけに、ライオネルは歪んだ笑みを浮かべて答える。引き寄せたアスナの体を前に持っていくと、彼女の後頭部を左手で抱き寄せて戸惑うことなく唇を重ねた。抵抗しようとするアスナの腕を右手で掴んで、爪が皮膚に食い込むほどの力で押さえた。
「やめ……」
「はぁっ……アスナ、君は僕のもの……じゃないか」
　ライオネルがそう言うと、アスナは抵抗をやめ、体の奥深くまで彼が入ってくるのを受け入れた。いや受け入れなければならなくなったのだ。抵抗しようとしていた右手はいつしか震えて、何もできずにいた。
　一方的な欲求をアスナに押し付けたライオネルは、彼女から唇を離すと花咲の方を見て彼は得意げに言った。まるで自分がこんな美しい女の唇を奪える男なのだと見せ付けるように。
「僕とアスナは愛し合っている」
　誰がどう見ても、アスナは傷つき恐怖していた。自分がいない間にアスナに何があっ

たのかは分からない。ただ、花咲は内に沸き立つ衝動を抑えきれなくなり叫んだ。
「お前ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」
目の前の奴を殺す。殺さねばならぬ。アスナを傷つける者は全て。
「やめて。見ないで……ハナ」
しかしそう言ったのはアスナだった。一番傷つき恐怖している、彼女だった。
「信じて……私を」
「アスナ……」
「そういうことだよ。君たちデブリは指揮権を持つ僕の言うことを聞いていればいいんだ。さぁ彼女を守りたいのだろ？　なら戦えよ。鉄華団の奴らを殺して彼女を守れ。どのみち敵は僕らを殺しに来るさ！　じゃあ殺すしかないだろ。皆殺しだ！　こんなところで言い合っている場合ではない。奴らはアスナを殺しに来るぞ！　殺しに来るぞ！」
どうすればいいのか分からない。アスナは苦しんでいる。守らなければいけないのに。助けなければいけないのに。だが、アスナはそれを拒んだ。
何を自分は守ればいいのだろうか。
彼女の意思か、それとも。
「アスナ、私はどうすればいいの？」

「……」

「ねぇ、答えて。答えてくれたら私なんでもするから！　なんでもするからさ！」

目の前にいる奴を殺せと言われれば、今すぐ掴みかかって首根っこを噛みちぎってやる。彼に従い鉄華団と戦えと言われれば、悪魔だろうがなんだろうが全員殺して帰ってきてやる。アスナが助けてとさえ言ってくれれば――――。

「ごめん、なさい」

返事は答えではなかった。

「守るんだよ！　僕と、それとアスナを守れ！」

「……」

「戦えば全て解決するだろ！　敵を全員殺せ！」

そうだ。戦いだ。戦争だ。殺し合いだ。

一〇年前、ある傭兵の元で戦争を知ってからずっと、それを実践し続けてたではないか。領土を巡った争いも、宗教間での争いも、全て戦争一つ起きれば解決できることだった。敵がいなくなれば彼らは大切なものを守ることができた。

花咲はそれしか知らない。

知らないからこそ、花咲はそれしか選択できなかった。

他にあるはずの選択肢を考えることなく、思考を停止させて従った。

結局、花咲は自分で戦場を選ぶことなどできなかったのだ。
間もなく、鉄華団の強襲装甲艦イサリビが廃棄コロニーに接近し作戦が開始された。シラヌイを除く４隻の戦艦が廃棄コロニーから飛び出し、次々とモビルスーツが宇宙に解き放たれていく。

４

オルガの悪い予感は的中してしまった。
一隻かと思われていた月輪の鷹団だったが、廃棄コロニーから飛び出してきた戦艦は四隻だった。しかも旗艦とされるシラヌイはそこにはおらず、廃棄コロニー内に隠れていたのだ。次々と戦艦から出撃してくるモビルスーツの数は一〇機を超えていた。
『クソっ……この数の援軍。奴ら、本気で俺らを潰しにかかっているようだ』
回線越しにオルガの息の詰まるような声が聞こえるが、三日月はそんな彼を安心させるわけでも、慰めるわけでもなくただ一言。
「んじゃ、援軍もまとめて潰してくる」
『相変わらずだな。だが、ミカは廃棄コロニーの中から敵の旗艦を狙ってくれ。ここで下手に守りに入るとジリ貧になる。だからこそ敵の大将を一気に叩く。ここは何とか俺らで持ちこたえてみせる』

「オルガの考えた作戦ならいいと思う」
三日月の瞳に迷いはなかった。
イサリビの格納庫でバルバトスに乗った三日月はシートに座ると、阿頼耶識で機体と繋がり起動させる。装甲こそ取り替えているものの、バルバトスのフレームはガタがきているようで、負荷はいつもより大きかった。しかし三日月にとっては寝違えた程度だ。操縦に大きな支障があるわけではない。
鉄華団の悪魔と称されるそのモビルスーツは白をメインカラーとしたガンダムフレーム機であり、その双眸に潜む殺意はアスモデウスよりもさらに研ぎ澄まされていた。装甲の所々にある傷は多くの戦場を駆け抜けてきた証だ。
頭部アンテナは二年前よりも長くなっており、両肩のアーマーは百錬のものを流用してある。バックパックは全体的に大型化した新型のものに置き換わっていた。
『わりィな、ミカ。かなり厳しい戦いになりそうだ』
「いいよ、別に」
三日月はヘルメットのバイザーを下ろすと、バルバトスと接続したことで動くようになった右手で操縦桿を握る。
「これは俺が選んだ戦場だから」
あの日、あの時、三日月は自分の命の使い方を決めた。

オルガが教えてくれるのなら、誰でも殺す。何でも壊す。いつか辿り着く場所を信じて走り続ける。前に前に、前に。

そうだ、ここは三日月自身が望んで立っている戦場なのだ。

『ああ、頼んだぞ、ミカ』

「任せて」

回線は切れ、バルバトスは格納庫の展開した床の向こうへ吸い込まれていく。カタパルトに固定さて、宇宙へと飛び出すその瞬間を待つ。

背中のバックパックには二本のアームが伸びており、そこに２００ｍｍ砲が装備されていた。これは前方に展開することで射撃することができるもので、両腕に装備している機関砲とともに火力を増強している。またバックパックの左右にあるハードポイントにはメイスと太刀が装備されていた。

やがてカタパルトが展開し、出撃準備が整う。

「んじゃ。三日月オーガス、ガンダムバルバトス。出るよ」

いくつもの戦場を駆け抜けてきた最強の機体と迷いなき意思が宇宙へと放たれる。

敵がいくついようとも関係ない。

殺せる敵なら、殺すだけだ。

いつか辿り着くまで。

第８話：鉄華団の悪魔（後編）

5

シラヌイの艦橋では鉄華団の旗艦イサリビから送られてきたＬＣＳ通信を受信していた。メインモニターに大きく映っているのは、鉄華団団長オツガ・イツカの険しい表情だった。

『降伏はしない、ということだな』

「それはこっちのセリフだとも」

そう答えたのはシラヌイを含める全艦隊の指揮権を持つ男、ライオネル・ランスローだ。彼は意気揚々と返事をし、艦長席に座って足を組む。

「この数で勝てると思っているのかい？」

『ああ、そうだ。見たところその場限りの寄せ集めの傭兵たちで士気も低いはずだからな』

「士気？　なんだそれは？　モチベーションが高ければ勝てるなんて本気で思っているのかい？　いやぁ野蛮人の思考は違うなぁ。脳筋思考っていうの。アレ大嫌いなんだよねぇ。少し大きな仕事したからって調子乗っているわけ？」

ライオネルは余裕の表情で、メインモニター越しに相手を馬鹿にするような口調で語っていた。

そんな中、アスナは自ら申し出て、艦橋のオペレーターとして入っていた。指揮権を移譲した今でも、月輪の鷹団の皆のために戦うべきだと考えたのだ。未だに唇に残る気持ち悪い感触に吐き気を覚える。そして心に突き刺さる罪悪感を噛み締め、オペレーター業務に励んでいた。

（私があの男に屈しなければ……私がもっと強かったら……）

しかし現実は非情だ。たとえアスナが反抗したとしてもライオネルは力で彼女を押さえ込み、強引に指揮権を奪っていただろう。月輪の鷹団の戦力で彼に反抗しても多くの犠牲を出してしまうだけだ。鉄華団にやられるよりも前に、内輪揉めで皆殺しにされるかもしれない。

ゆえにアスナはあの時、どちらにせよライオネルに従わざるを得なかったのだ。

こうなった以上、鉄華団を倒して道を切り開くしかない。何としてでも月輪の鷹団の皆が生き残れる道を探さなければ。他に道はない。

『アンタ、何も分かってねぇようだな』

「へぇ？　戦いは数、それ以外に大切なことでもあんの？」

オルガとかいう男の言うことは正しいと、アスナは思った。その場限りで雇った傭兵

には逃げ場所があるのだ。逃げ場がある以上、ここで命をかけて戦うわけにもいかない。しかも相手は常勝無敗の武闘派集団。少しでも形勢が傾けば逃げ腰になり、そこからどんどん崩れていく。

対する鉄華団に逃げ場はない。逃げ場を失った者は命懸けで戦う。そして逃げ場を失った状況に彼らは慣れているのだ。いくら数で圧倒していたとしても、練度と士気は決して覆ることはない。彼らは追い込まれれば追い込まれるほど強くなっていくだろう。

「今なら降伏も受け入れてやるけど？　僕の寛容な精神でさ。お前らガキども皆、うちで世話してやってもいいぞ？　ヒューマンデブリとしてだけどなぁ」

『ンなら決まりだ。アンタらをぶっ潰す。後で泣き言ほざいても聞かねぇからな』

「もういいぞ、通信切って。反応がつまらない」

ライオネルは一方的に通信を切ると、座席横に置いたハーブティーの入ったカップを手に取り一口飲んだ。

「全艦隊前へ。野蛮人どもを粛清だ！」

戦いが始まる。

アスナは祈ることしかできない。ただ月輪の鷹団の皆が無事に帰ってくるように、と。

6

シラヌイは廃墟のビル群の影に隠れつつ、搭載しているモビルスーツを戦場へと吐き出していく。ジャックのユーゴーと、ゴードンのゲイレールはコロニー外に出ている艦隊と合流し、鉄華団の旗艦イサリビと交戦中のようだ。花咲とシドレーは廃棄コロニー内を直進し、後方からイサリビに奇襲攻撃をかけることとなっている。

宇宙用のパイロットスーツに着替えた花咲は、シラヌイの外で装備の交換が行われていたアスモデウスのコックピットに飛び移った。アスモデウスは背の高い廃墟ビルに囲まれた高速道路の上で、整備班の最終チェックを受けていた。シラヌイ内で換装できなかった装備、それはこの巨大なバックパックにある。

モビルスーツには些か大きすぎる二基のブースター、アスモデウスの両腕を覆うように伸びている鋭い大型アーム。クタン参型と呼ばれるそれは本来、モビルスーツの長距離輸送に使用される装備である。しかし左右の大型アームと、各所に火器を装備可能なアタッチメントが存在することから、モビルスーツの強化武装として使用されることも多い。

「……私はどうすれば良かったの」

花咲の脳裏に浮かぶのはアスナの苦しんでいる顔だった。あの男がアスナを苦しめ

ているのは明らかだ。自分はどうするべきだったのか。殺すべきか、従うべきか。分からない。あの男を殺せば全て済む問題だったのか。そもそも、アスナにとってあの男は何なのだ。

花咲はアスナのことを何も知らなかった。一〇年間、神のように毎日祈ることしかしてなかった。アスナがその時何をして、何に泣き、何に苦しんでいたのか。知らない。

「今は、やるしかない。迫り来る敵を殺すだけ」

とめどなく溢れ出る濁った思考を振り払い、花咲はコックピットシートに座る。阿頼耶識の接続が開始され、いつにもまして大きい接続負荷に歯を食いしばって耐えた。

「はぁっ……あっ……」

いつもと感覚が違った。今までは思考から身体感覚を経て機体に動きがフィードバックされていたが、今は思考と機体が直結している感覚があった。まるで自分がアスモデウスになっているような。リミッター限界まで調整してあるのだろう。初めての感覚だった。

アスモデウスの両肩はバズーカ砲が取り付けられた装甲に変更されている。元々はギャラルホルンの量産型モビルスーツ、グレイズの拡張装備だったらしい。そしてクタン参型の上面には二丁の滑空砲、両手に持つのは９０ｍｍサブマシンガン、腰アーマーにはグレイズなどでよく使用されるハンドアックスを装備していた。

通信が入った。サブモニターに映るのは長髪の男、シドレー・アルカラッドだ。たしか、ライオネルとかいう男の元で雇われている傭兵だったか。花咲はあまり覚えていない。

『廃棄コロニー内に敵影が一つあります。どうやら向こうは旗艦に奇襲をかけてこようとしているようですね』

「迎撃するだけよ」

『私の予想ですと、奴は鉄華団の悪魔……ガンダムバルバトスでしょう』

「バルバル？　何でもいいわ、倒せるんでしょ」

『ええ、こちらはガンダムフレーム機が〝二つ〟もあるのですから。では、シドレー・アルカラッド。ガンダムサブナック、出陣致しましょう！』

シドレーがそう言うと、シラヌイのカタパルトから一機のモビルスーツが射出された。白のメインカラーに金色のラインがいくつも引かれている、戦場には似合わない装飾のされている機体だった。

ガンダムサブナック。現存する２６機のガンダムフレームのうちの一機だ。シドレーの愛機であり、彼の『白金の貴公子』という異名の元になっている。一角獣を彷彿とさせるドリル状の角が伸びた頭部に、全身を甲冑のような角のとれた装甲で覆っていた。特徴的なのは両腕に装備した十字状のシールドだ。目立った武装はシールド以外

にない。

『貴女はデブリですが、三本付きのガンダムフレーム乗りです。腕は信じましょう』

「どうぞ、ご勝手に」

『言葉には気をつけてくださいね。あと目上の人間には敬語を使ってください』

異名が付くぐらいだから傭兵の中ではそれなりに名の通っている人物なのだろうが、花咲にとってはどうでもよかった。せめて邪魔者にならないことを祈るばかりだ。

「……アスナ、私が守るから」

敵を倒せばいい。アスナがそうしてと言えば、そうする。今、花咲のやることはアスナを殺そうとしている敵を殲滅すること。それだけ。それだけなのだ。

アスモデウス背中に装備されているクタン参型のブースターが噴射され、高速道路をカタパルト代わりにし、瓦礫が漂う廃棄コロニーの空へと飛び立った。そしてサブナックの後衛につき、前進を始める。

『貴女は私の後方支援をしていればいいです。如何に敵が強大でも所詮は子供。私と、ガンダムサブナックの盾の前では無力！　誰も私の盾を貫くことはできないのです。この世の全ては攻めよりも、守りのほうが強いのが常だと思いませんか！　防御、防護、守備、城壁、遮断！　なんといい響きなのでしょうか！　そうです、盾こそが最強の兵器であり、ゆえに近接武器としても最強であり――――』

シドレーの意味不明な早口が煩いので、花咲は回線を切った。集中力が途切れる。

「敵は……見えた」

レーダーに反応があった。間もなく目視でもスラスターの光が見えた。敵は一機、白いモビルスーツだ。見たところアスモデウスと同じような配色で、王冠のような頭部センサーをしていた。傭兵たちの間で畏怖すべき存在と呼ばれる最強のモビルスーツ、ガンダムバルバトスだった。

『勝手に通信を切らないでください。では、始めましょう。貴女は後方支援で』

「了解」

どうやらシドレーは鉄華団の悪魔を討伐したという名声が欲しいのだろう。手柄を横取りされたくないゆえに、花咲に後方支援を命じた。花咲は名声になど興味はない。ここで手柄の取り合いをするよりは彼に従い、効率よく敵を倒すことを優先させた。

アスモデウスは無重力に浮かぶ巨大なコンクリートの瓦礫を足場にして、脚部のスパイクを展開し突き刺して機体を固定させる。両肩のバズーカ砲を展開。両手の９０ｍｍサブマシンガンを構え、クタン参型の二丁の滑空砲の照準を合わせる。

『さぁ来なさい、悪魔！　どんな攻撃でも防いでみせましょう！』

サブナックは十字状の盾を前方に構えて突撃。バルバトスはメイスを右手に持って、サブナックの盾に思いっきり叩き込んだ。衝撃が四散するも、サブナックはビクともせ

ず盾で弾いてみせる。
『こいつ、邪魔だ』
『邪魔するのが盾の仕事なんですよ!』
バルバトスのパイロット、三日月は舌打ちを一つするも動じず、吹き飛ばされたバルバトスの体勢をスラスターで立て直そうとする。
「今だ!」
全火器の射程に入ったことを示すアラートとともに、アスモデウスの全身からバズーカ砲と９０ｍｍサブマシンガン、滑空砲の弾丸が一斉射された。
『そこか』
「え!?」
一瞬、花咲はバルバトスのパイロットと目があった気がした。その感覚は間違っておらず、三日月は既にアスモデウスの位置を特定して砲撃が来ることを予見していたのだ。バルバトスは近くのデブリを掴んで投げることで砲撃を防ぐと、再びサブナックに向かっていった。
『まずはこいつからやるか』
『ははッ!　何度来ても無駄ァ!』
サブナックの盾はモビルスーツのフレーム部分にも使用される超高度レアアロイで

出来ている。現行の兵器では一撃で貫くことは不可能だ。
バルバトスは先ほどと同じようにメイスを大きく振りかぶり、サブナックの右手に持った盾に叩きつけた。叩きつけたと同時に弾かれる瞬間を狙って、バルバトスはメイスから手を離した。弾き飛ばされたのはメイスだけで、機体はそのままサブナックの眼前にある。
そしてもう片方の盾を踏み台にしてサブナックの頭上まで飛ぶと、肩の２００ｍｍ砲を発射した。銃撃を受けたサブナックの機体は大きくよろけて、背中を晒してしまう。
『盾を踏み台に!?』
『終わりだ』
この乱戦状態では迂闊に射撃攻撃をできず、花咲は瓦礫からスパイクを外してサブナックに急行した。だが既に遅い。
丸腰の背中を捉えたバルバトスは、そこに両腕の機関砲を炸裂させる。よろけたサブナックの懐に潜り込むと太刀に持ち替え、振り返ったところを狙って上から突き刺す。太刀の切先は装甲と装甲の隙間に入り込み、コックピットをパイロットのシドレーごと押し潰していった。
どれほど堅牢な盾を持っても、その内側に潜り込まれてしまえば無力だ。
『がぁッ!?』

『まずは一つ』

バルバトスはメイスを回収すると、接近してくるアスモデウスに殺意の双眸を向ける。

ガンダムフレームを二機相手にしておきながら、無傷で一機を瞬時に撃破したその姿はモビルスーツというよりも、怪物のように見えた。咄嗟の状況判断と周囲を注意深く観察する目、そして普通の阿頼耶識使いよりもさらに生物的で軽やかな挙動。

間違いない、奴が鉄華団のエースだ。花咲は確信した。

『さっさと終わらせて、旗艦を落とさないとな』

「はぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」

アスモデウスはクタン参型のアームで薙ぎ払いを繰り出す。バルバトスはそれをメイスで受け止めると、軽々と左に弾いて、よろけたアスモデウスに太刀を突き刺す。太刀はアスモデウス本体ではなく、クタン参型の右ブースターを破壊するだけで終わった。

そしてよろけたアスモデウスに蹴りを入れて、廃棄コロニーの地面に叩きつけた。ブースターの片方を失い姿勢制御が上手くいかず、花咲は立て直すので精一杯だった。

「ぐっ！」

速いだけじゃない。流れるような挙動で攻撃を無効化している。先ほどのアスモデ

ウスの攻撃。巨大なアームが迫っているなかで命が惜しいと微塵も思わず、むしろチャンスだとバルバトスは立ち向かってきた。

精神的にも技術的にも、花咲の遠く及ばない場所にいるパイロットだということは明白だった。しかし花咲はそれを認めず、引こうとはしない。

負けを認めてしまえば、アスナを守れないからだ。

「上かぁぁぁぁぁぁぁッ！」

アスモデウスは廃墟ビルの壁を掴んで機体を起こすと、二丁の滑空砲を上に向けて、追撃してくるバルバトスに発射。だがバルバトスは砲撃が行われた頃にはクタン参型に取り付いており、両手の機関砲で駆動部を破壊していた。火を吹いて爆発するクタン参型をアスモデウスはパージし、振り返ってバズーカ砲と９０ｍｍサブマシンガンを斉射しながら後退する。

両サイドに高層ビル建ち並んでいる地形を活かし、敵が左右に回避できない状況を作った上で重火器による一斉射撃を行ったのだ。

「墜ちろ！　墜ちろぉッ！　墜ちろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!!」

『いらないな、これ』

バルバトスは背中の２００ｍｍ砲をパージして、姿勢を低くし前進を始めた。パージされた２００ｍｍ砲がアスモデウスの砲撃によって爆発炎上、黒煙が周囲に広がる。バ

ルバトスの機影は黒煙の中に消えていった。これでは照準を合わせることができない。
『ッ！』
「下から!?」
黒煙の中から太刀が飛び出し、右肩のバズーカ砲を破壊。続いて黒煙をぬってアスモデウスの眼前に現れたバルバトスはメイスを横に振り、鉄の塊を胸部に思いっきり叩き込んできた。アスモデウスは抵抗すらできず吹っ飛んで、廃墟ビルに機体を叩き付けられてしまう。その衝撃で廃墟ビルのガラスが一斉に割れ、破片を撒き散らしながらアスモデウスに降り注ぐ。
メイスで叩き潰された胸部装甲の一部が剥がれ落ち、機体の異常を知らせるアラートがコックピットに鳴り響く。まだ動ける。しかし動けたところでどうやって勝てばいいのか、花咲には全く分からなかった。
「これが」
今までに味わったことのない恐怖が花咲に迫っていた。手の震えが止まらない。
まるでナイフを持てば刃を折られ、銃を撃てば弾丸を掴まれてしまうように、自分の放った殺意がまるで届かないのだ。
花咲の抱く全ての感情が、バルバトスのパイロットに飲み込まれていた。
黒煙の中、バルバトスはアスモデウスの前に現れた。兵器というものを超越した、一

種の生命体にも思える。理性をもった猛獣、と表現するべきか。
「鉄華団の悪魔……」
しかし悪魔でも何でも殺さねば、花咲の背中の向こうにいるアスナは守れない。
やるしかない。
アスモデウスは両肩の装甲をパージして、二丁の９０ｍｍサブマシンガンを構え、花咲は覚悟を決めた。

7

「一番隊ユーゴー、ガルム・ロディ大破、二番隊ガルム・ロディ中破」
シラヌイの艦橋では逐一、オペレーターによる戦況報告が流れていた。廃棄コロニーの外の戦場は混戦状態であった。敵モビルスーツは二機とはいえ阿頼耶識使いであることに加えて、自軍よりも遥かに練度が高い。いくら数で圧倒しようとも乱戦に持ち越されてしまえば、数の多さは裏目に出てしまうこともある。
「クソっ……デブリどもはどうなっている!?　うちもモビルスーツ隊の半数は阿頼耶識持ちなんだろう!?」
数で圧倒しているにも関わらず、決定打を与えられず戦力を徐々に削られていっていることに、ライオネルは苛立ちを隠せず艦長席を足で蹴って言った。

アスナの予想通り、形勢が傾いた途端に傭兵たちは逃げ腰になっている。中距離以遠の射撃だけではナノラミネートアーマーを貫くことはできないというのに。

事はライオネルの思い通りにはいかない。

ならばライオネルが花咲やジャックを特攻させてでも勝ちを拾いに行くといった場合、アスナはどうすればいいのか。その時自分は、彼に異を唱えることができるのか。今まで男という存在に屈し続けていた自分が。

「四番隊、マン・ロディ大破」

今もそうだ。

月輪の鷹団所属ではないものの、ライオネルの雇った傭兵団の中にはヒューマンデブリの子供たちがいる。彼らは今も命をすり減らしながら、戦い続けている。自分の選択は「そうするしかなかった」という言い訳をして、目の前の命を見殺しにしているだけなのではないだろうか。

アスナは苦悩する。

「三番隊、マン・ロディ大破。しかし巻き添えで、イサリビの主砲を無効化に成功」

彼らに帰る場所はない。戦場で勝つことが唯一無二の生きる手段だった。

このまま行けば勝てるだろう。如何に相手の練度が高くとも、モビルスーツ二機では補給のローテーションもままならない。弾薬と推進剤を消費させていけば動きは鈍く

なる。

命を犠牲に勝ちは拾える。

だが、その先は。そして、犠牲になった命は？

「シドレー機との通信途絶！」

「おい、嘘だろ!?　あの白金の貴公子が……!?　嘘だ！　クソ！　味方をコロニーに入れろ！　何としても悪魔を殺せよ！」

「今すぐは無理ですよ！」

「じゃあ、どうやったらアレを落とせるのか、傭兵なら分かるんじゃないのか！　アレを落とさなきゃ、こっちに来るぞ！　悪魔を殺せ！　殺せよ！」

シドレーといえば花咲と同行していたガンダムフレーム乗りのことではないか。報告によれば鉄華団の悪魔と呼ばれるエースパイロットと交戦中らしい。

「ハナ……っ！」

それはつまり、花咲と鉄華団の悪魔が真正面からぶつかっているということだ。

アスナの額に嫌な汗が流れる。

――信じて、私を。

あの時アスナは花咲にそう言ったはずだ。彼女は今もアスナのことを信じて、命懸けで戦い続けている。あれはアスナの全てを認め、戦いのない場所に連れて行ってくれる

と信じ続けている瞳だった。
それを自分は裏切るのか。
裏切ってしまうのか。
死という最悪の形で。

第９話：命を叫ぶ声（前編）

1

モビルスーツ戦は基本的に三機でまとまって動くことがセオリーになっている。ヒューマンデブリの子供たちで編成された三番隊と四番隊はイサリビに取り付き、攻撃を行っていた。ジャックとゴードンは五番隊として遊撃の役割を与えられていた。

ジャックはコックピットシートに深く座り、自機のユーゴーの持つ対物ライフルを構えながら、廃棄コロニーの外壁に機体を固定させる。コロニーは円柱状の建造物だ。丸みに隠れてしまえば、絶好の狙撃ポイントとなる。

「さぁーってと、敵さんは……あれか」

スコープの向こうでは味方機と乱戦状態にある敵影が一つあった。それは四本の腕を持つ奇怪なモビルスーツだった。明るめのベージュの装甲に巨大なバックパックとシールドが特徴的な機体で、そのバックパックからはモビルスーツの腕が伸びており、ロングレンジライフルを持って射撃を行っていた。右手のハルバートで接近してくる敵を薙ぎ払い、シールドで砲撃を防ぐという、攻守隙のない戦いをしている。

「なんつー戦い方だよ」

ガンダムグシオンリベイク。月輪の鷹団のアスモデウスと同じガンダムフレーム機だ。鉄華団の主力モビルスーツであり、エドモントンの戦いではギャラルホルン相手に一騎当千の活躍をしたと言われている。

グシオンリベイクは既に三機のモビルスーツを戦闘不能に追いやっていた。これ以上、放っておくわけにはいかない。

「強いねぇ……タイマンだったら勝てる気がしない、ね！」

ジャックの駆るユーゴーは対物ライフルをグシオンリベイクに向けて発射。弾丸は機体を僅かに逸れたが、右サブアームに炸裂した。ロングレンジライフルが爆発し、その隙にゴードンのゲイレールがハンドアックスを振り上げてグシオンリベイクに迫っていく。

『俺たちの帰る場所を奪うな！』

ゴードンの叫びとともに振り下ろされたハンドアックスは、グシオンリベイクのシールドに防がれる。同時に、グシオンリベイクのハルバートがゲイレールの右肩に叩き込まれ、肩アーマーが粉砕された。

「ゴードン、離脱だ！　俺が追って撃つ！」

『了解！　頼むよ、ジャック』

ジャックはその瞬間を逃さなかった。反撃で敵が丸腰になっている今なら、直撃を狙

う自信があった。如何にナノラミネートアーマーでも、対物ライフルの直撃を受ければただでは済まない。

「悪いが、俺はまだ死ねないんでね……」

弟のコスターがちゃんとした医療を受け、歩けるようになるのはこれからなのだ。死を待つしかなかった彼にようやく見えた希望の灯火を、こんなところで消すわけにはいかない。

「落ちてくれよ！」

ユーゴーの対物ライフルが火を噴いた。弾丸はグシオンリベイクに対して直撃ルートで猛進していく。腰の露出しているフレーム部分を狙ったはずだ。当たればフレームごと粉砕して戦闘不能にすることができるだろう。

が、それは間に入ったモビルスーツによって阻まれてしまう。

「なんだ、あいつは!?」

それは見たことのない機体だった。ロディフレームでもヘキサフレームでも、テイワズフレームの機体でもない。ワインレッドの装甲色をしており、四角い頭部に一つ目のバイザーをしていた。機体のほぼ半身を覆うライオットシールドで対物ライフルを防いだそれは、ジャックのユーゴーに向けてライフルを向けてくる。

狙撃位置を知られた狙撃手に勝ち目はない。ジャックは機体を起こして、後退した。

2

イオ・フレーム。テイワズが本格的な量産を視野に開発した新型フレームだ。
『おっまたせー！』
「え!?」
グシオンリベイクのパイロット昭弘・アルトランドは聞き覚えのある少女の声に、肩をビクッと震わせて驚いた。全身筋肉質の太眉の男だが反応は年相応という感じで、それをモニター越しで見ていた少女は吹き出す。
『いちいち反応が面白いなー、昭弘は』
「いや、えっと……何でラフタが……!?」
ユーゴーの対物ライフルを防ぎ目の前にいるモビルスーツのパイロットは、ここにはいないはずのタービンズ所属ラフタ・フランクランドだった。モニターに映る金髪の髪を二つに結んで分け、愛らしい翠の瞳を昭弘に向けて微笑んでいるのが彼女だ。
「それにこのモビルスーツは」
『この子は獅電！　ダーリンと月での仕事も兼ねて最終テストを行っていたんだけど、昭弘たちのピンチを察して助太刀しにきたってわけ！』
「……助かる」

ラフタが間に入らなければ、対物ライフルの弾丸はグシオンリベイクの腰フレームに炸裂していたかもしれない。感謝してもしきれない気持ちを胸に抱き、昭弘は再び操縦桿を握り締める。

後方ではラフタと同じく月面から鉄華団の救援にやってきたテイワズのモビルスーツたちが、長距離輸送ブースタークタン参型から解き放たれて、応戦していた。

名瀬はオルガに「ハンマーヘッドは寄越せない」と言った。だが、モビルスーツによる増援は送れる。今回の依頼の不審点に気がついた彼は、月のコロニー群から増援を出してくれたのだ。

『んじゃあ、パパッと片付けにいくよ！』

「おう！」

グシオンリベイクはハルバートを構えて、再び迫ってくるゲイレールを迎撃する。ラフタの獅電はライフルからパルチザンに持ち替えて、後退していく対物ライフル持ちのユーゴーに向かった。

ユーゴーが対物ライフルを構えたのを見ると、廃棄コロニーの外壁を蹴り剥がして視界を遮る。そして剥がれた外壁の影から飛び出して、パルチザンを振り下ろした。

『そこぉ！』

『うっそ、マジかよ！』

ジャックの乗るユーゴーに近接武器はない。しかし幸いなことに、撃墜されたマン・ロディのハンマーチョッパーが近くにあった。

ユーゴーはスラスターを全開にして獅電のパルチザンをかわすと、縦に機体を回転させながら後退して、ハンマーチョッパーを右手で拾い上げて応戦する。獅電のパルチザンとユーゴーのハンマーチョッパーがぶつかり合い、鉄が擦り切れる音が響く。

『俺なんかナンパしても美味しくないっての!』

『な、ナンパって何よ!』

『おっと逆ナンだったか』

ユーゴーは至近距離で対物ライフルを発射。獅電に向かってではなく、廃棄コロニーの外壁にだ。ちょうど足場となっている外壁に弾丸が炸裂し、獅電は体勢を崩してしまう。その間にユーゴーは乱戦を離脱し、舞い上がる瓦礫の中にいる獅電にスコープの照準を合わせた。

『可愛い子チャンの声だ。是非ともお近づきになりたいけど……』

この距離であれば外れることはないだろう。

『今は近づいてくるなよ!』

しかしまたも弾丸は間に入ってきたシールドに阻まれてしまった。今度はグシオンリベイクが間に入り、ラフタの獅電を守ったのだ。

「大丈夫か!?」
『ナンパなんかしてないんだからね！』
「ど、どういうことだ?」
　話の流れについていけない昭弘は首をかしげるが、今考えても仕方のないことだ。
「こいつは俺がやる。イサリビのほうを頼む」
『うん、任せた！』
　昭弘に背中を預けたラフタは獅電とともにイサリビの防衛に向かった。グシオンリベイクと対峙したユーゴーは対物ライフルをリロードしつつ、体勢を立て直す。
『あんたら夫婦かっての……。ゴードンは!?　おい返事をしろ！』
　グシオンリベイクが相手をしていたゲイレールは両腕を破壊され、宙を漂っていた。通信にも応答がなかった。おそらく死んではいないだろうが、放っておくわけにはいかない。ジャックは唇を噛み締めながら、目の前の敵に立ち向かった。
「こい！」
『ったく……早く終わらせてやらねぇと！』
　さっきまでの逃げ腰とは一転し、ジャックのユーゴーはどこか吹っ切れたかのように、チョッパーハンマーを振り上げて突撃してきた。グシオンリベイクのハルバートとユーゴーのチョッパーハンマーが激しくぶつかり合う。

先ほどの動きといい、このユーゴーの動きは他の機体とは違った。昭弘は敵も阿頼耶識使い、それも相当な手練であることを感じ取っていた。だが引いて良い理由にはならない。

『俺は帰るんだ。弟のためにも!』

「ッ!」

接触回線でジャックの言葉が昭弘の耳に入った。

昭弘の脳裏に、戦場で死別した弟の最期の光景が駆け抜ける。救うことができずに消えていった彼の言葉、そして幼い日の思い出。やりきれないことばかりだった。だからこそ今、また大切な家族を失うわけにはいかない。鉄華団という名の、昭弘の家族を。

「もう二度と失うものか!」

『こんなところで死んでたまるかよ!』

昭弘のグシオンリベイクは左のサブアームに持ったロングレンジライフルを、ジャックのユーゴーは右手に持った対物ライフルを構えた。ほぼ同時に弾丸は発射され、互いのサブアームと右腕を破壊し合った。

ひしゃげたユーゴーの右腕が吹き飛んでいくなか、グシオンリベイクはシールドをユーゴーに叩きつけると、ハルバートを振り上げて追い打ちをかける。

「うおおおおおおおお!!」

『ようやく見えた希望の光を』

この体勢ではかわすことも受け止めることもできない。ならば、とユーゴーは両腰のワイヤーアンカーを射出した。ワイヤーアンカーはグシオンリベイクの腰に巻きつくと、そのままワイヤーを収納する勢いでぶつかっていった。

『消してたまるか!!』

「がッ！　なんのぉッ！」

両者ともに吹き飛ぶものの、先に体勢を整えたのはユーゴーのほうだった。ハンマーチョッパーを振りかぶり、グシオンリベイクに迫る。

シールドで防ぐ時間も、スラスター全開で離脱する余裕も昭弘にはなかった。ならば引かず防がず、受け止めるのみ。グシオンリベイクは廃棄コロニーの外壁に両足を打ち込んで踏ん張ると、ハンマーチョッパーを右肩で受け止めた。右肩の装甲に深く突き刺さったハンマーチョッパーは、ユーゴーの貧弱な腕ではすぐに引き抜けなかった。

「ふンー！」

『なッ!?』

少し狙いが逸れていればコックピットを押し潰していたかもしれない距離だ。直撃ルートだがコックピットは外れるので、機体で受け止めてカウンターを狙う――――理屈では理解していても、それを行動に移すには相当な度胸が必要だ。

グシオンリベイクはハンマーチョッパーが引き抜けないでいるユーゴーを押し倒して、ハルバートの鋭い先端部をコックピットの頭部に突き立てた。
「終わりだ」
『あんたもな』
ユーゴーは頭部の小型ミサイルを展開させ、その照準をグシオンリベイクのコックピットに合わせる。この距離でミサイルをくらえばタダでは済まないだろう。
「やめておけ」
『へぇ……』
昭弘はユーゴーのパイロットを殺す気はなかった。阿頼耶識使いということはおそらくヒューマンデブリの少年兵だ。同じヒューマンデブリ出身の人間として無闇に命を奪う気にはならなかった。それに――――。
「弟のためにも、命は大切にしろ」
『……殺し文句だねぇ。わーったよ、投降する』
自分が守れなかった存在が、彼にはまだある。昭弘は彼のことを何も知らない。しかしただ一つ、彼が今まで必死に弟を守ろうと戦い続けていたということは、彼の言葉や行動ではっきりと分かった。
それだけで助ける理由には十分すぎた。

３

　無数の瓦礫が浮遊する廃棄コロニー内では二つの閃光がぶつかり合っていた。
「はぁッ……はぁッ！」
　荒くなる息を飲み込んだ花咲は、迫り来る悪魔――バルバトスに視線を向ける。両手に９０ｍｍサブマシンガンを構えたアスモデウスは、後方の瓦礫を蹴り飛ばしてバックステップで回避。メイスが瓦礫を砕き、粉塵が舞い上がる中に９０ｍｍサブマシンガンの弾丸を無数に打ち込んでいく。
　しかし既にバルバトスはそこにはおらず、アスモデウスの背後に回り込んでいた。
「速い!?　なんなのよ、こいつ！」
『こいつ、ちょこまか逃げるな……』
　バルバトスのメイスはアスモデウスのバックパックを粉砕し、前方に吹き飛ばす。アスモデウスは瓦礫の上を何度も転げながら、宙に投げ出された。両腰のスラスターでなんとか姿勢制御するも、間髪入れずに追撃のメイスが振り下ろされる。
「守らなきゃ！」
　咄嗟に右手の９０ｍｍサブマシンガンを前に出してメイスを受け止める。メイスは９０ｍｍサブマシンガンを押しつぶして爆発させた。その爆風で右手マニピュレー

ターが壊れたが、目くらましにはなった。
腰のスラスターを前方にやって噴射し後退。左手の９０ｍｍサブマシンガンで応戦するも、バルバトスは目くらましをくらったにも関わらず、すぐに立て直してメイスによる突きで、左手の９０ｍｍサブマシンガンも破壊した。幸い、破壊される前に手を話していた為、左手のマニピュレーターは無事だった。
「ぐっ……」
動きが速すぎて射撃攻撃でフレームの隙間を狙っていく余裕すらもなかった。普段行っている戦法が通じない相手に、花咲は窮地に立たされていた。
アスモデウスは瓦礫を蹴り飛ばして跳躍し、何とかバルバトスから一時離脱をしようとした。が、それを逃すわけもなく、バルバトスはアスモデウスに追従していった。
既に手元に火器はない。あるのはハンドアックス一つ。それはつまり、バルバトスと白兵戦で戦えということに他ならない。自分よりも反応が速く、練度も桁違いで、なおかつ頭のネジが一〇本ぐらい吹っ飛んだのではないかというほど大胆な戦いをするパイロットとモビルスーツを相手に、だ。
だがこうするしかない。目の前の奴を殺すには、やるしかないのだ。
「私は――――」
アスモデウスはハンドアックスを左手で引き抜いて、バルバトスのメイスを受け止め

た。鉄と鉄が互いに殺意を研ぎ澄ませぶつかり合う。
「アスナを守るんだぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁ!!!」
『うるさいな』
接触回線でバルバトスのパイロットの声が聞こえた。花咲と同世代ぐらいの少年の声で、抑揚のない声調に戦闘中とは思えないほど落ち着いている。
花咲は、自分の叫びを「うるさいな」の一言で片付けられたことに腹が立ち、感情のままに目の前のバルバトスに頭突きを打ち込んだ。
「お前には守るものもないくせにぃぃぃぃぃぃぃ!!!」
悪魔が何だ。エースパイロットが何だ。こいつには戦う意志そのものが無いのだ。誰かを守ろうだとかそういうのではなく、ただただ目の前の敵を殺すだけの戦争マシーンだ。そんな人間に、自分を、いや、誰よりも大切なアスナを殺されてたまるか。
花咲の思考は苛立ちを抑えきれずにいた。
『はぁ……』
だが感情のままに攻撃をしたのが裏目に出た。バルバトスは頭突きの隙を逃すことなく、アスモデウスの頭部を押し返して、よろけた機体にメイスを叩き込んだ。アスモデウスは右腕を前に出してガードしようとするが衝撃は殺しきれず、道路上に落ちていく。

メイスの直撃を受けた右腕は逆方向に折れ曲がり、一切の操作を受け付けないまでに破壊されてしまった。
『俺にもあるよ』
「なにを……ッ！」
両腰のスラスターを噴射させて落下の衝撃を最小限に抑えつつ、向かってくるバルバトスのメイスをハンドアックスで受け止める。衝撃で足場のコンクリートが砕け、破片が周囲に浮かび上がった。
『俺の信じるオルガや鉄華団の皆のために、今ここにいる』
「信じる……？」
『で、今はアンタが邪魔だ』
先ほどとは一転して、まるで鍛え抜かれた鉄のような意志を感じさせる声に、花咲は驚愕した。彼もまた花咲と同じように、大切な人を守るために戦っているのだ。いや、違う。
守るためではない。
ともに戦っているのだ。
『んじゃ、そろそろ終わりに――――』
バルバトスはもう一方の手で太刀を構えて、アスモデウスに向かって振り下ろしてき

た。

花咲はどうだ。

アスナを信じて戦っていたのか。否。ただ「自分の大切な神様」を守るために戦っているだけだ。自分のためだけの戦いなのだ。自分にとって大切だから守るという、身勝手な理由でアスナに依存していた。

――――信じて。

あの時、アスナが言った言葉を花咲は思い出す。どうして自分はあの時「ええ、信じるわ」と答えなかったのか。アスナがあんな男に屈してしまうほど弱い人間だと、心のどこかで思っていたのか。

そしてそんなアスナを守るために、こんな敵に自分一人で立ち向かって守れると本気で考えていたのだ。思い上がっていた。

花咲は一人で戦えるほど強くはない。

アスナは誰かに守られているだけの人間ではない。

「私も……」

頭の中のごちゃごちゃとした考えが一気に吹き飛んだ。視界がクリアになり、バルバトスに対する恐怖が掻き消え、次にどう動くべきか今ならはっきりと考えられる。

「信じている」

アスモデウスはハンドアックスを横にずらしてメイスを受け流すと、右足を上げて太刀を持っているバルバトスの手を蹴り上げた。太刀は宙を舞い、廃墟ビルの壁に突き刺さった。

「アスナのことをー」

そのままアスモデウスは右足でバルバトスの頭部を思いっきり蹴り飛ばした。バルバトスの頭部アンテナの一部が砕け散った。

『ッ!?』

その反動でアスモデウスは後退し、ハンドアックスを構え直す。バルバトスも頭部を蹴られた状態から起き上がって、メイスの先端をアスモデウスに向けた。

「もう迷わない」

暗礁宙域で奇策を以て皆を救ったのもアスナだった。幼い頃、まだ花咲がヒューマンデブリになる前だってそうだ。アスナは誰よりも勤勉で努力家で勇敢で、泣き虫だった自分に手を差し伸べてくれた。堂々とした立ち姿で。そして何より。

大人たちが誰一人として助けに行こうとしなかったなか、アスナは燃え盛る炎の中に飛び込んで自分を助けてくれたではないか。

そんなアスナが今、この苦境に屈しないわけがない。

ゆえに花咲はアスナの言葉を信じた。

もう迷うことはない。
「一緒に戦うよ、アスナ」
アスナと歩んでいく〝これから先〟のため、花咲はその道を切り開く。
邪魔者は全て、殺す。
『こいつ……普通の阿頼耶識とは違うな』
バルバトスのパイロット、三日月オーガスも何となく花咲の異変に気がついていた。阿頼耶識使いでもあまり見かけない、ダイナミックな動きをしている。今まで見てきた誰とも違う。が、その動きには覚えがあった。
自分自身だ。
花咲も三日月も同時に、察した。
この反応速度、間違いない。自分と同じように何度も阿頼耶識の手術を受け、機体とより深い場所で一体化しているパイロットだ、と。
「でも」
『まぁ』
バルバトスは背中と腰のスラスターを展開して、メイスを構えながらアスモデウスに突撃した。アスモデウスはハンドアックスを構えて応戦する。
「『殺るしかない！』」

二人の声が重なり合い、幾度となくメイスとハンドアックスの応酬が繰り広げられた。鉄は砕け、血が迸り、殺意が閃光となってぶつかり合う。
「いい加減に落ちろ！」
『あんたがね』
お互い、引くわけにはいかない。
アスナの、オルガの、道を切り開くために。
「そこ！」
『ッ！』
渾身の力で叩き込まれたメイスはハンドアックスを粉砕した。だが、その破片を抜けてアスモデウスは右手で手刀を作ってバルバトスの懐に潜り込もうとする。そうはさせまいとバルバトスは一旦メイスを引かせて、アスモデウスの右胸部に向かって突きを放った。
「それが、どうしたッ!!」
『終わりだ』
このままバルバトスの反撃を振り切って、手刀をコックピットに突き刺してやる。花咲はそう考えていた。しかし凶器は思わぬところから現れた。
「な!?」

メイスの先端からパイルバンカーが飛び出して、アスモデウスの右胸部に打ち込まれたのだ。右腕は肩からフレームごと抉れて吹っ飛び、コックピットでは火花が飛び散ってメインモニターにノイズが奔る。機体の各所が押し潰されていくのが分かった。

激しい衝撃とともに花咲の体はコックピットシートに打ち付けられる。アスモデウスもシステムがダウンしメインモニターの明かりが消えた。コックピットには壊れた電子機器から立ち昇る白い煙が広がっていく。

「あ、す……な」

花咲は自分の意識が消えていくのが分かった。

今まで体験したことのない感覚だった。

まるで暗闇の底に吸い込まれていくような――――いうなれば、死の感覚に似ていた。

いや、死そのものかもしれない。手足の感覚が消え、視界がぼやけていく。何も見えず感じず聞こえず、真っ暗な世界の中で最後に意識が静かにフェードアウトしていった。

……。

第9話：命を叫ぶ声（後編）

4

戦況は悪化の一途を辿っていた。

「敵、増援です！」

「どこの所属だよ！　艦隊はどうなっているんだ！」

「お、おそらくテイワズの……い、一番艦、航行不能！　三番艦も推進機関を損傷！」

ライオネルは艦長席に腰を落として爪を噛みながら、次々と消えていく味方の信号に苛立ちを隠しきれず、ティーカップを床に叩きつけた。ティーカップが割れて、中の紅茶が飛び散る。

「クソっ……撤退だ、撤退！」

「し、しかし交戦中の味方艦隊はすぐには離脱できません」

「そんなのどうだっていいだろう！　僕たちだけで逃げるんだよ！」

その様子をアスナは聞いていた。エースパイロットであるシドレー機の大破、テイワズの増援、最早物量で圧倒する作戦は破綻し、自軍は崩壊寸前まで陥っている。そんな中でライオネルは自軍を置いて逃げ出そうとしているのだ。

たしかにシラヌイはまだ敵からの攻撃を受けていない。廃棄コロニーの裏側を通って航行すれば逃げ切ることはできるだろう。しかし、だ。

残された花咲は、ジャックは、ゴードンは、ヒューマンデブリの子供たちは、ライオネルに雇われた傭兵たちはどうなるのだ。命令もないまま旗艦だけ撤退したなかで、最後まで戦い続けて死んでいくのではないか。

（あの人は皆を見殺しにする気だ……）

ライオネルは調子の良い時こそ前のめりだが、雲行きが悪くなるとすぐに逃げ出す人間だ。暗礁宙域の時もそうだった。

降伏すればタダでは済まないだろう。傭兵たちの雇い主であり、この作戦を指揮した人間なのだ。テイワズに捕まってしまえば何をされるか分からない。資産の没収だけではなく、最悪殺されてしまう可能性もある。

だからこそ彼は保身に走った。

自分の不始末を子供たちに押し付けて。

（止めなきゃ……）

アスナは立ち上がろうとする。しかしその瞬間、心臓の鼓動が異様に早くなり、息が詰まるような苦しさが胸に襲いかかった。ライオネルはポケットに拳銃を仕込んでいた。この艦橋で彼に逆らえる者はいない。逆らえば殺される。

それに彼の暴力と蔑む瞳と圧力は、トラウマとしてアスナの心を掴んで離さなかった。幼い頃から受けてきた折檻、罵倒、そして男の命令に従うことが絶対である狭い世界の感覚。ライオネルからも許嫁という立場を利用して、酷いことを沢山されてきた。

ずっとそうだ。

自分は従い続けてきた。

理不尽でもそうしなければいけない、圧倒的な力に。

逆らえば力をもって制裁を受け、従うまで痛めつけられるのだ。

それが力だ。

「それでも……」

自分一人ならいい。どんなものを失ったとしても、それは自分がマリーメル家の女だからという理由で納得できた。

だが今は違う。

アスナは多くの命を背負っているのだ。理不尽に屈して良い理由など、どこにもない。

「信じてって」

花咲がアスナに見せた瞳。己の命を犠牲にしてでもアスナを守る。今まではそう思っていた。花咲が自分を守ってくれるのだと、心のどこかで安心していた。今回だっ

てそうだ。鉄華団を相手にしても花咲が何とかしてくれるのではないかと、そう思ってライオネルに従っていた。それがベストだと自分に言い訳をして。

自分自身の恐怖から逃げる口実に、花咲を使っていたのか。

「ハナに」

だがそれは間違いだった。花咲の瞳はアスナに期待していたのだ。花咲がアスナに、この状況を打破できるのは貴女だけだと信じている。そう訴えかけていた、とアスナはようやく気がついた。

花咲は自分のことを信じている。

自分は馬鹿だ。大馬鹿者だ。悲劇のヒロインを演じていた醜い人間だ。

親友だと思っていないのはどっちのほうか。親友なら互いに信じ合い、背中を預けるものだろう。決してその瞳を裏切るわけにはいかない。そんな硬い絆で結ばれているはずだった。恐怖、トラウマ、理不尽、圧倒的な暴力、その全てがどれほどでも、親友を裏切っていい理由などない。ただ、前を向け。

前を向いて睨みつけろ、不条理を。

花咲の瞳を裏切るな。

「ハナに信じてって言ったから！」

アスナは全てを振り切って立ち上がり、ライオネルの前に立った。こんな男に屈して

いた過去の愚かな自分を噛み締め、それでも今こうするべきだとアスナはライオネルを睨みつけた。

彼のポケットには拳銃。周りの傭兵たちも、今の状況とライオネルの撤退命令に疑問を抱いている様子だったがアスナの味方にはならないだろう。アスナが立ち上がっただけで状況が変わるわけではない。しかし、やってみるだけの価値はある。アスナは〝それ〟に全てを賭けた。

「どうした、席に座っていろよ。今僕は忙しいんだ！」

「今すぐ鉄華団に降伏してください」

「はぁ？　誰に向かってそんな口を聞いているのか、なぁ！」

ライオネルは怒りに身を任せて、アスナの腹部を思いっきり殴った。しかしアスナは今までのようには倒れず、両足で踏ん張って耐え切り、もう一度言った。

「降伏してください」

「だから何度も言わせるなよ！」

彼の拳は顔面に何度も突き刺さった。手加減を知らない暴力は容赦なくアスナに襲いかかる。口の中に血の味が広がり、頬は腫れあがり、止めようとした手に拳がぶつかって小指が変な方向に折れ曲がった。

「あっ……が……だから、」

「な、なんなんだよ！」

いつもであれば、顔を一回殴ってやれば従順になるはずだったアスナが、従う素振りも見せず立ち続けていることを不気味に思ったライオネルは一歩退き言った。そんな彼にアスナは一歩前に出て叫んだ。

「だから、鉄華団に降伏しろッて言ッてんのよ!!!」

アスナは生まれて初めて怒りをそのまま相手にぶつけた。花咲や皆の命を手駒にし、今まさに保身のために犠牲にしようとしている愚かな男に対して、心に湧き上がる衝動をそのまま喉の奥から叫んだのだ。

「ひっ……う、うるさいんだよ！」

そのままアスナはライオネルのポケットに向かって手を伸ばした。拳銃を奪えば、力では劣る自分でもこの状況を打開できるはず。

しかしアスナの手よりも先に、ライオネルの右足が彼女の腹に打ち込まれた。

「あッ……！」

アスナは艦長席から転げ落ちると、メインモニターの下にある壁に背中を打ち付けた。喉の奥まで昇ってきた血を床に吐き出しながらも、アスナはそれでも立ち上がってライオネルに詰め寄ろうとした。

拳銃を奪わなければ。何としてでも彼を止めなければ。

だが何度も殴られて体が思うように動かず、詰め寄れば思いっきり顔面を殴りつけられて吹き飛ばされるを続けていた。前歯の数本が折れて、血とともに床に落ちていく。目元は腫れあがり、唇は擦り切れ、額からは血が流れて顔の半分が真っ赤になっていた。

それが何だ。これぐらいの痛み、ヒューマンデブリの子供たちが背負ってきたものと比べれば大したことない。

食いしばる歯が残っている限り、渾身の力を込めて食いしばれ。

そして目の前の愚かな男に教えてやれ。

女にも意地があるということを。

「これ以上戦わせても、犠牲者が増えるだけよ」

「黙れぇ！　僕の命とヒューマンデブリのクズどもの命、どっちが世界に有益な存在なのか知ってのことか！」

腹を蹴られた。

「僕の頭脳と！」

顔面を殴られた。

「資産と革新的な考え方と！」

ついには拳銃を出して発砲してきた。

「それが世界の為になるんだよ！　デブリどもなんざねぇ！　読み書きもできないゴミ

クズどもを命を天秤にかけること自体おかしいんだよ！　おかしいんだぁあ!!」
　銃弾はアスナの頬を切り裂いていった。あと少し狙いが外れていたら即死だった。頬から血が流れ出すが、アスナは拭わずそのまま堂々と立っていた。
「はぁっ……はぁっ……次はぁ、外さないぃ！」
　アスナはライオネルに詰め寄ろうとした。右手は逆方向に曲がっているし、平衡感覚も消えていき、ふらつく。しかし倒れようとはしなかった。倒れるにしても前のめりに、それこそライオネルを巻き添えにして倒れてやろうと心に誓っていた。
「そこまでして自分の命が大切ですか」
「ああそうさ大切だよ。富も権力も今ある全てが大切さ。だからこうしている。ここにいる全員がそうだろう!?　誰だって自分の命が一番だ！　ましてや言葉も話せず、戸籍も存在しない奴らを助けるためにその全てを捨てろだなんて馬鹿馬鹿しい！」
「私は……違う」
「は？」
　アスナはまっすぐライオネルを睨みつけると、渾身の力で叫んだ。
「私はあの子達の命を背負う、月輪の鷹団団長アスナ・マリーメルだ!!!　もうこれ以上、あの子達を戦わせたりしない！　私は団員の皆を守ると誓った！」
　頭が割れるように痛い。自分の血と折れた前歯が周囲に飛び散っていた。右腕の骨

は折れてしまっているだろう。骨が折れたことなんか生まれて初めてだ。泣き叫びながら地面に倒れてのたうち回りたいぐらいに、とんでもなく痛い。いやむしろ、この痛みのおかげで意識を保っていられるのかもしれない。

精一杯の意地を張って、アスナは立ち続けた。

大切なものを守るために敵を倒せ。敵、敵は目の前にいるぞ。首に噛みついて頚動脈を引きちぎってやれ。もしくは拳銃を奪って撃て。何でもいいから抗ってみせろ。

「や、やめろ！　こっちに来るなぁ！」

ライオネルはアスナの気迫に押されつつも、拳銃を彼女にめがけて構えた。いくら手が震えていようとも、この距離では確実に当たる。アスナが前に出て止めようとするが、発砲のほうが早いだろう。

（ああ、そうか……）

その時、アスナは思った。自分は死んでもいい。死んでもいいから、何とかして彼を止めて花咲たちを助けねばならない。だから撃たれてもすぐには死なず、彼を押さえ込もう。どれだけ流血しても、それだけはやりきろう。

花咲が前にアスナに語った言葉と同じだ。

自分の命を犠牲にしてでも誰かを守ろうという、心の底から湧き出す感情だった。

ようやく花咲と同じ場所に立てた気がした。

しかしその瞬間、銃声が艦橋に鳴り響いた。
（こういうことだったんだね、ハナ）

5

――ねえ。
「……ん？」
――大丈夫？
「アス、ナ？」
――ほら、涙を拭いて。

花咲が目覚めた場所は鮮やかな緑色の芝生が広がる庭だった。周囲には色鮮やかな花々が咲き乱れており、庭の前にはレンガ造りの荘厳な屋敷が建っていた。花咲には見覚えがあった。たしか、これは、自分が生まれ育った場所だ。

ここでのことはあまり覚えていなかった。

いや、ヒューマンデブリになってからの記憶が鮮烈すぎて、いつの間にか忘れ去ってしまったのかもしれない。

目の前には赤いドレスの幼い少女がいた。アスナだ。彼女は芝生に倒れ込んでいる花咲に手を差し伸べてきた。そして花咲は思い出す。アスナと出会ったあの日を。

「どうして貴女は泣いているの？」

どうしてだったか。とても辛いことがあったはずなのに思い出せない。きっと戦場のほうがよっぽど地獄だったからなのだろう。今の花咲からしてみれば、どうってことないことだったのかもしれない。

「ん、気持ちすっごい分かるよ！　私も似たようなことあったから……。でも大丈夫！　私が貴女のお父様に事情を説明してあげる！」

何で貴女は知らず見知らずの私に手を差し伸べてくれるの？

「そんなの決まっているじゃない！　目の前で泣いている人がいて、見て見ぬふりなんてできないもの。大丈夫、私が貴女を助けてあげる。だから安心して！」

でも。

「だから大丈夫だって！　バレても殺されはしないと思うし。それに貴女が助かるならそれでいいよ！　あ、そうだ。じゃあ今度、お花の冠の作り方教えてよ！」

きっかけは些細なことだった。

しかし花咲はこんな人間を見たことがなかった。馬鹿か、と最初は思った。誰一人救いの手を差し伸べてくれない冷たい世界の中で、どうしてこんなお人好しでいられるのか。自分を犠牲にしてまで誰かを助けようとしているのか。

分からない。分からないけど、信じられた。

アスナの瞳は本物だと。
信じ続けていいんだと、迷いのない瞳を目にした瞬間に花咲は確信した。
だから花咲は手をアス――――――もういいだろう。
美しい思い出には充分浸った。
目を覚ませ。
花咲レゴリス。
花咲レゴリス！
「ッ！」
庭があったはずの色鮮やかな光景はかき消され、白い煙が立ち昇る薄暗いコックピットの中に花咲は突き落とされた。コックピット前面は尽く破壊されており、外の光景が見えている。廃棄コロニーの瓦礫や細かな破片が浮き上がっており、その中にいたバルバトスはアスモデウスからメイスを引き抜いていた。
幸い、パイロットスーツに損傷はないものの、メインモニターは潰れており、右腕はフレームごと破損している。機体を制御するシステムが損傷しているのか、最早動くことすら困難な状況になっていた。
「まだ……」
バルバトスはメイスを回収するとアスモデウスに背を向けて、離脱しようとしてい

た。このままだと奴はシラヌイに向かい、アスナを殺すだろう。
「終われない」
花咲はバルバトスに向かって手を伸ばす。
アスナは今、きっと歯を食いしばって月輪の鷹団を守るために戦っている。たとえどんな恐怖と対峙しても、アスナ・マリーメルという人間なら絶対にそうするはずだ。花咲は確信していた。
そうだ、アスナは全身全霊をかけて立ち向かっている。
ならば自分は、花咲はどうだ。
「ねぇ返事をしなさいよ」
まだ出せるはずだ。
自分の全てを賭けて、目の前の悪魔と戦えるはずだ。
まだやれる。やれなくても、やれるのだ。やらなければいけない。やれ。
出せ、全てを。
「あんたもここで終われないんでしょ。聞こえているなら———」
花咲は伸ばした手を握り締めて拳を作る。強く、強く握って、花咲は叫んだ。
「答えろ！　アスモデウス!!!」
その瞬間、花咲の言葉にアスモデウスが答えた。

普通のモビルスーツならシステムを損傷してしまえば再起動などするはずがない。だがアスモデウスは違った。花咲の肉体と精神に呼応するように、再び動き出す。しかもただ単に再起動したわけではなかった。より深く、花咲とアスモデウスが繋がっていく。

花咲自身もそれを感じていた。左手が痙攣を起こし、全身に流れる血液が沸騰しそうなほど熱される。花咲の背中と阿頼耶識システムを接続しているチューブが激しく揺れ、今までにない高密度の情報が脳に流し込まれていった。

リミッターが外れたアスモデウスの双眸が赤く煌く。アスモデウスはその場を立ち去ろうとするバルバトスの左腕を掴んで、再び立ち上がる。

「どこへ……行くつもりだ」

『まだやるの』

「あんたを殺すまでは、やる」

『んじゃ、とっとと――――』

バルバトスはアスモデウスの手を振り払うと、右手に持ったメイスを横に薙いだ。しかしアスモデウスの姿はそこにはなかった。アスモデウスは咄嗟に姿勢を低くしてメイスを回避すると、スラスターを噴射しつつ左手を地面に打ち込む。

打ち込んだ左手を軸に低姿勢のまま回転しながら、バルバトスの背後に回り込んだ。

その際、途中で左手を地面から離して廃墟ビルに向かって伸ばし、そこに突き刺さっていたバルバトスの太刀を回収する。

背後に回り込んだアスモデウスは右足で踏ん張って立ち上がりつつ、太刀を構えた。そしてちょうど振り返ろうとしていたバルバトスに、鋭い一閃が駆け抜ける。

『あ』

アスモデウスの太刀はバルバトスの左腕をフレームごと斬り裂いた。

基本的にモビルスーツの近接武器はハンマーやアックス、メイスなどといった鈍器だ。それは何故か。鉄は斬るよりも、叩き潰すほうが遥かに楽だからだ。ならば、刀で鉄は斬れないのか。

否。刃物の扱いに対する心得があるならば分かるだろう。引いて斬ればいいのだ。

もちろんモビルスーツにそのような繊細な動きをさせるのは至難の業だろう。しかし阿頼耶識システムならであれば、そしてそのリミッターが外れたガンダムフレームならどうだろうか。

「これ、ちょうどいいわ」

左眼から血を流しながらも、花咲は静かに笑ってみせた。刃物の使い方ならはっきりと分かった。ナイフを持って人間を切り裂くことなど日常茶飯事だったからだ。どうすれば肉を素早く正確に切ることができるか、花咲は知っている。

斬るものが、肉から鉄に変わっただけだ。
『この動き。やばい奴だな』
「終わらせるのよ」
たとえこれで命が尽きようとも構わない。それでアスナの道が開けるのなら本望だった。自分が死ねばアスナはきっと泣くだろう。しかし立ち止まることはしないはず。きっと、アスナはそれでも前に進む。
自分よりも遥かに強い人間であると信じているから。
誰が為に華は散るか。
決まっている。
「アスナの為に！」
アスモデウスの双眸は再び輝き、そこから赤い燐光が迸った。

第10話：鮮血の末に

1

三日月オーガスは確信した。敵もまた〝一線〟を超えた存在だ、と。

かつて彼は一度だけ同じような存在と対峙したことがある。エドモントンでの戦闘において、自らを窮地に陥れた巨大モビルスーツのパイロットがそうだ。

一線を超えた者――信念、理念、決意、意志、意地、あらゆる感情を突き通して、己の身を冷たい機械の生贄にすることも厭わない者のことだ。

自分がそうであるように。

相手もそうなのだ。

「お前もそうか。まぁ、やるしかないけど」

バルバトスは切断された左腕をかいくぐって姿勢を低くすると、アスモデウスに対して膝蹴りを打ち込んだ。アスモデウスは踏ん張ることはせず、むしろバックジャンプをすることで受け流しつつ後退し、廃墟ビルの屋上に飛び移った。

「チッ！」

廃墟ビルの屋上に飛び移ったアスモデウスはノーモーションで跳躍すると、バルバト

スの後方に素早く回り込んでキックを放った。アスモデウスの鋭いキックはバルバトスのバックパックに突き刺さり、爆発炎上させる。背中のスラスターは完全にイカれた。

　衝撃がコックピットにまで襲い掛かり、三日月の体が揺さぶられる。そんな中でも操縦桿をしっかりと握り締め、バルバトスの両腕の機関砲を構えながら振り返った。しかしその先にアスモデウスの姿はなかった。

『そこよー・』

　アスモデウスはバルバトスの真下に潜り込んでいると、振り返った瞬間に太刀をコックピットに向けて突き立ててきた。寸前で後退していたバルバトスは直撃こそ免れたものの、胸部の装甲が太刀に切り裂かれ、コックピットの前面が抉られた。

「あッぶねぇ――――」

　コックピットが外部に露出し、そこからアスモデウスの鋭い眼光が覗く。機械という存在を超越した完全なる人機一体の悪魔を目の前にしながらも、三日月は臆することなく、むしろ苛立ちをぶつけるように叫んだ。

「なァー・」

　バルバトスは潜り込んできたアスモデウスの頭部に頭突きを放った。両者のブレードアンテナが折れ曲がりつつも、バルバトスはアスモデウスを押し返して吹き飛ばす。

そして吹っ飛んでいくアスモデウスに向けて両腕の機関砲を斉射した。
アスモデウスは地面を蹴って体制を立て直すよりも前に回避行動に入った。機関砲の銃弾が廃墟ビルを、浮き上がる瓦礫を、あらゆるものを破壊していく中で、アスモデウスは獣の如き動きで的確に回避していく。
エドモントンで戦った相手に似た動きをしているようだが、細かなところが違った。どちらかといえば自分に近い。そう――あの時の三日月オーガスに。
どちらにせよ形勢が逆転し、こちらが劣勢なのは明らかだった。
このままでは負ける。
「おい、バルバトス」
機関砲の弾が切れると同時に、迫ってきたアスモデウスをメイスでやり過ごしつつバルバトスは後退して体制を立て直す。
そんな中で、三日月は自らの愛機に語りかける。
奴を殺さねば全ては終わらない。
放っておけば、奴は皆殺しを始めるだろう。
そうでなくとも、三日月の信じる道を邪魔する存在であることは明白だった。ならばやることは決まっている。今までも、そしてこれからも変わらない。
「あいつが邪魔だ」

命でも何でも捧げてやる。だから力を与えろ。目の前の敵を殺せるだけの力を。

「いいから……よこせ」

三日月の右目から血が流れ始める。全身の血液が沸騰していく感覚が広がっていく。それと同時にバルバトスの感覚が自分に伝わってきた。激痛、苦痛、感覚が消えていく恐怖、その全てがどうでもいいほどに高揚した意識をアスモデウスに向ける。

また体の一部を持っていかれるかもしれない。

死ぬかも知れない。

だがそれがどうした。

敵が一線を超えているのなら、自分も一線を超えねば勝てない。

常軌を逸した者に勝てるのは、さらに常軌を逸した狂人だけである。

両者の双眸が赤く煌く瞬間、アスモデウスの太刀とバルバトスのメイスがぶつかり合い、衝撃波が周囲に四散した。

2

何度も太刀とメイスがぶつかりあった。鉄と鉄が衝突し、互いを削り合う。体中から流れる血を振り払いつつ、命を叩き潰していく。

「くたばれぇぇッ！」

花咲は血を吐き捨てながら叫んだ。

アスモデウスの右膝アーマーが砕け散る。バルバトスの左肩の装甲が切り裂かれる。両者ともに目にも止まらぬ応酬を繰り広げていた。鮮血にも似た赤い燐光を迸らせる二つの双眸が交差しては、火花を散らせる。

一歩でも引けば、殺されるだろう。元より両者ともに引く気はないのだが。

「アスナの道は」

アスモデウスの太刀がバルバトスの腰に突き刺さった。右腰のスラスターが爆散し、破片が飛び散る。

『オルガの道は』

バルバトスのメイスがアスモデウスの頭部に炸裂した。装甲が剥がれ落ち、内部フレームの頭部の左半分が潰れる。

花咲と三日月は同時に直感した。次の一合で勝敗は決する、と。

――――信じている。

アスナを信じ、花咲は今ここに立っている。もう迷うことはない。命を捧げることが必要ならそうしよう。きっとアスナも命を賭けて戦っているのだから。

これから先、続く道をこんなところで途切れさせるわけにはいかない。

きっと相手もそうだろう。

だがそんなことは関係ない。
この世界は生きるか死ぬかだ。相手に同情する気はない。兵器を手にした時から、人は殺す覚悟と殺される覚悟を同時にしなければならないのだから。
「私が！」
『俺が！』
アスモデウスは太刀を大きく引いて、鋭い突きを放った。同時にバルバトスのメイスを大きく振り下ろしてきた。太刀が先にコックピットを突くか、メイスが先にアスモデウスのコックピットを粉砕するか。
一瞬だった。ほんの一瞬だけ、花咲のほうが遅かった。
バルバトスのメイスはアスモデウスの左腕を叩き折ると、メイスの先端にあるパイルバンカーをコックピットに突きつけた。
『消えろ……ッ！』
まだだ。
ここで機体を自爆させれば、バルバトスを巻き込める。コックピットを損傷した機体に対して至近距離で自爆すれば、確実に相手を殺せるだろう。問題は自爆操作に入るのが先か、自分がパイルバンカーでミンチになるのが先かだった。
しかし、花咲がそれを行動に移そうした時。

『戦いをやめて、ハナ！』
『終わりだ、ミカ！』
　アスナの声と、敵側の大将の声が重なって聞こえた。瞬間、バルバトスとアスモデウスはほぼ同時に機能を停止した。互いに機体が万全ではない状況でリミッターを解除させてしまったがために、機体が負荷に耐え切れなくなったのだ。
『戦いは終わったのよ、ハナ……私たちはライオネルから指揮権を奪還し、鉄華団に降伏することを選んだわ』
「アス……ナ」
『ジャックもゴードンも、みんな無事よ。終わったの……。そっちの状況を教えてくれる!?』
「はは……」
　花咲は急に体の力が抜け、コックピットシートにもたれかかって静かに笑った。何も迷わずアスナを信じ続けて良かった、と心の底から彼女は思った。アスナならきっとやってくれる。そう信じて突き進んで正しかったのだと、安堵の表情を浮かべながら掠れた声で笑い始めた。
「大丈夫、生きているよ、アスナ」
『良かった……本当に、良かった……』

「アスモデウスが壊れて自力じゃ帰れないけど……」
　回線越しに聞こえる嗚咽に、ここからではアスナの涙を拭ってやれないなと少し悔しい思いを抱きながらも、花咲は前を向いた。
　花咲の目の前にはパイロットスーツを着た一人の少年が立っていた。花咲よりも低い背丈だったが、右目から血を流していても飄々としている。右腕は感覚がないようで、力を失い垂れ下がっていた。年齢は花咲と同じか少し下だろう。
「あんたは……」
「生きてる？」
「敵の心配をするのね」
「パイロットは生かしておけって、さっきオルガに言われたから」
「そう。捕虜ってやつね。まぁ生きている……わよ」
　阿頼耶識との接続を解除した瞬間、自分の左腕に思うように力が入らないことに花咲は気がついた。感覚が全くないというわけではないが、前みたいに物を掴んだり持ち上げたりすることは難しいかもしれない。
　しかしまぁ、元々火傷の影響で左手の指は二本だけだし痛覚も死んでおり、今までも無頓着に扱ってきたため、不自由はしないだろう。と、花咲は自分の中でそう結論づけた。左腕の感覚一つでアスナを助けられたのなら、それでもいい。

「左腕の感覚が無いけど。あんたは？」
「今回は大丈夫だったみたい。一瞬だったし」
ああ、なるほど。彼は今回の戦い以外でも、一線を超えた経験があるのか。
花咲は自らが圧倒されていたことにようやく納得できた。修羅場を乗り越えてきた数が違うのだ。おそらく彼は今回のような戦いを何度も経験している。
「結局、どっちが勝ちなのかしら」
「さぁ。でも――――」
少年――――三日月オーガスは右手に持った拳銃を花咲に向けて言った。
「今、あんたを殺せるのは俺かな」
彼はきっとヒューマンデブリではなく、一人の戦士として戦場にいるのだろう。ヒューマンデブリならば、拳銃などモビルスーツに持ち込めないはずだから。
「……んじゃ、あんたの勝ちね」
「もうそれでいいよ」
元より自爆しようとしても、間に合わなかった。モビルスーツ戦でも一歩及ばず、花咲は負けていた。しかし何故だろうか。悔しさや恐怖は感じなかった。これほどまで自分の敗北に納得できた瞬間はないだろう。
いや、これは勝利なのかもしれない。

結果的に花咲は鉄華団の悪魔を引きつけ、アスナが月輪の鷹団の指揮権を奪って降伏するまでの時間を稼いだのだから。勝負に負け、戦いに勝ったというところか。
「ねぇ、あんたのモビルスーツ動く？」
「は？」
「アスモデウス、動かなくなって。連れてってくれる？」
「あーそれ」
三日月は花咲から拳銃を外すと、バルバトスのほうを振り返って、
「バルバトスも何か動かなくなった」
「……はぁ」
救援部隊が到着するまで、花咲は鉄華団の悪魔と称されるバルバトスのパイロットと共に過ごすことになってしまった。深く溜息をつきながらも、花咲は彼に問いかける。
「あんた、名前は」
「三日月オーガス」
「ふーん、私は花咲レゴリス」
「あっそう」
会話が続かない。両者ともに会話を続ける気が全くないのだ。結局、それ以降は両者ともに沈黙を保ったまま、救援部隊を待つことになってしまう。

3

「なんでだ、何で僕がぁぁぁぁぁぁぁ……！」
「ちったぁ黙れ！」
　両手両足を縄で縛られ、袋の中に入れられていくライオネルから視線を外し、右腕にギプスをつけ頭に包帯を巻いているアスナは艦長席に座った。
　ライオネルの顔はボコボコに腫れあがり、右足は銃で撃たれて血が滲んでいた。彼は袋詰めにされると、シラヌイに入ってきた鉄華団の団員たちに回収されていく。あれほどのことをしでかした愚かな男だが、今すぐ殺すわけにもいかない。生かしておいて責任を取らせるのが賢い選択だろう。
　あの時、アスナはライオネルに撃ち殺されそうになっていた。しかし駆けつけたリウたち月輪の鷹団の子供たちによって間一髪助けられて、事なきを得たのだ。
（……思えば、賭けだったわ）
　アスナは立ち上がる寸前に艦内放送のボタンを押して、艦橋でのやり取りがシラヌイの艦内全体に流れるように仕組んでいた。そうすれば状況を察した月輪の鷹団の団員が駆けつけてくるかもしれない。
　もちろん拳銃を奪って、アスナ一人で何とかするのがベストな状況だが、それが失敗

した時の為にもう一つの賭けをしていた。もちろん、リウたちが捕縛されていたり、命令に背くことはできないと動かない可能性もあったかもしれない。

だがアスナは信じた。

月輪の鷹団の子供たちならば、こうするはずだ、と。

「リウ、ありがとう」

アスナは隣に立っているリウにお礼を言った。彼が武器庫から銃を奪取して駆けつけてくれなければ、今頃アスナは死体袋に詰められていたころだろう。

「いえ!!　アスナ団長こそ!!!」

「うんん……私は何もやれていないよ。もっと早く動けるはずだったのに、私が不甲斐ないばかりに……」

戦争がどんなものかなんて知らなかった。そんな言い訳が通じるはずもない。ライオネルに屈していたのは事実だ。それで多くの犠牲が出たかもしれないのもまた事実で、アスナは自らの未熟さを噛み締めていた。

「私は何も知らなかったんだ……だから知らなきゃいけない」

「大将、ちょっと時間いいか？」

後ろから青年の声が聞こえた。この声は鉄華団の団長、オルガ・イツカのものだ。アスナは降伏をする際、ＬＳＣ通信で一度だけ彼の顔を見たことがある。白狼のような髪

型をした背の高い男だった。交わした会話もそこまでなく、自分に対してどのような印象を抱いているのか分からず少し不安だった。

（やっぱり、女の私が指揮官なんて変かな……）

そうこう考えても仕方がないので、アスナは返事をしつつ立ち上がろうとした。だが、怪我のこともあって思ったように立てず、艦長席のでっぱりにつまづいて転倒してしまう。

「ぶえっ！」

床に思いっきり顔面をぶつけて転倒したアスナは変な声を上げてしまった。

「……大丈夫か」

「だい、じょう、ぶ。です！」

ゆらりと立ち上がりアスナはオルガの前に立った。女だからって舐められちゃいけない。堂々としなくては。

「……お、おう」

「大丈夫です！」

「わーった、わーった」

ゴホンとオルガは咳払いをすると、電子パッドに書かれた内容と照らし合わせながら、アスナに問いかけた。

「あんたが現在の月輪の鷹団団長、アスナ・マリーメルか？」
「はい！」
「そう気張らねぇでくれよ……何も今すぐ、落とし前に指を詰めろとかいう話じゃねぇんだから。指詰めんなら、あの男だろ」
「お、落とし前……指、詰、る……あはは……」
　袋詰めにされていったライオネルの方向を親指でさして、オルガは呆れながら言った。しかしアスナの耳には「落とし前」とか「指詰めろ」とか、物騒な言い回しが何度も重なり合って聞こえたようで、裏社会の怖さを実感して震えていた。
「まぁ大体のこと聞いてる。あんたも災難だったな」
「い、いえ……」
　予想していたよりも、オルガという人物は物腰柔らかな印象をアスナは抱いた。先ほどまで殺し合っていた相手だというのに。もっと強引にどこかに連れて行かれたり、厳しい口調で叱責されたりするのかと思っていた。
「だが組織としての責任は取ってもらうぞ」
「もちろんです。私の父や、許嫁が皆さんにご迷惑をおかけしたようでして……」
「まぁモビルスーツをいくつか売却すれば、賠償金の類はクリアできるだろうよ。あとはあんたの処遇だが」

「はい」
　アスナは既に覚悟は決めていた。圏外圏最大の勢力を敵に回して戦っていたのだ。命を奪われても仕方がない立場にいることは明白だろう。
「降伏時はあんたが団長だったから、それなりに責任は取らなきゃならねぇようだが。そこらへん、俺と名瀬の兄貴で何とか上に掛け合ってみるってことになった」
「え……!?」
「他の団員のこともあるだろ。団員たちを路頭に迷わせねぇように、こっちも最大限努力はさせてもらうぜ。ああ、あとこれは今回の被害報告だ」
　オルガはアスナに電子タブレットを手渡した。そこにはエクセルで今回の戦闘における推定被害総額や死傷者のリストが載っていた。
　鉄華団側の人的被害はゼロだ。アスナが率いていた月輪の鷹団のメンバーにも犠牲者はいない。ライオネルが率いていた艦隊の中では死者が出ているが、それに関する責任はライオネル本人の名義になっていた。死者の殆どがヒューマンデブリの子供たちだったが、ちゃんと一人としてカウントされているのが分かる。
「あ、あの……どうして私たちにここまで……」
「どうしてってなぁ。あんたの面をみりゃ、分かるからな。覚悟もってここまで来たってことが」

オルガはアスナの肩を叩くと、まっすぐな瞳で言った。
「よく頑張ったな」
「え、あ、はい……」
彼はアスナとは全く別の場所で生まれ育ってきた相手である。乗り越えてきた修羅場の数、それどころか考え方も全く違うだろう。彼だけではない。鉄華団や月輪の鷹団の子供たちと自分には決定的な差がある。
常識も違えば、生きるという言葉の意味も違う。
そんな相手から「頑張ったな」と言われても、正直なところアスナには実感が沸かなかった。まるで部外者の自分が果たして、彼らの中でちゃんと立っていられているのか。それとも彼のその言葉は「屋敷のお嬢様にしては」なのか。
果たして自分は、月輪の鷹団の団長としてふさわしい人間なのか。

第11話：アスナの決意

1

地球。人類発祥の地であり、蒼い海と緑の大地が広がる星。澄み切った水色の空の下、洋上に浮かぶ巨大建造物があった。帆のような発電施設を各所に備えたそれは、戦争の抑止力として経済圏の監視、牽制を行う治安維持組織ギャラルホルンの本部だ。

そんなギャラルホルン本部のテラスにて、色鮮やかな草木が植えられた花壇の前でしゃがみ込む一人の少女がいた。左右に黒いリボンをつけた桃色の髪を肩まで伸ばしており、前髪の隙間から覗く金色の瞳で鳥たちの飛翔する空を眺めている。どこかの侍女なのか、ロングスカートのメイド服を着ていた。

まだ一〇代前半の可憐な少女のような幼い顔立ちをしていた。美しい蝋人形に命が宿ったかのように、細部まで醜さの一つもない純粋無垢さを全身で表現している。

「……あ、終わった」

桃色の髪の少女は身を翻すと、そこにいた褐色の肌の青年――ギャラルホルンを管理するセブンスターズと呼ばれる家門の一つクジャン家当主、イオク・クジャンの存在を無視しながら、空に向かって独り言を投げた。

「やっぱり白いのが勝ったなぁ。白いの？　どっちも白かったぞ。あははー！」
「おい！」
　イオクの言葉に流石の少女も無視できないな、と無垢な瞳で彼のほうを向くと、
「お兄さん誰だっけ？」
「私はクジャン家当主イオク・クジャンだ！　見たところどこかの侍女だろう？」
「……うーん、うん！　そうだよ、きゃははーっ！」
　少女は少し考えた後、悪い笑みを浮かべながらそう言った。しかしイオクはその笑みに気づかないまま、続ける。
「貴様、ここで何をしている!?」
「あそこでねー。廃棄コロニーらへん？　すっごいモビルスーツ同士が戦っていて、とっても楽しかったんだよ？　面白いなー！」
「ど、どういうことだ……」
　空に向かって指をさした少女を理解できず、しかしサボっているということは分かったイオクは両手を組んで語り始めた。
「ここで油を売っていてはダメだろう！　侍女たるもの、主人の世話を全力で行うことこそが与えられた使命であるはず！」
「ラー油、ごま油、オリーブオイル、各種取り揃えておりますー」

「そういう意味ではない！　貴様、本当に侍女か!?」
「うん。えーっとねぇ、僕はマクギリス様の侍女なんだー！　えへへー」
「そ、そうか……だが、もう少し貴様は目上の者に対する言葉遣いを覚えたほうがいいぞ。礼儀が人と人を繋ぐのだ。正しい立ち振る舞いこそ、全ての基本であろう！」
イオクの説教する様子を面白がって少女は見ていたが、後ろから来る人影に気づくとそちらに注目した。
老練、その言葉が彼ほど似合う男はギャラルホルンにはいないだろう。研ぎ澄まされた鋭い眼と全てを包み込んでしまうのではと思うほど大きな体。堂々とした立ち姿をしている彼は、月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドの総司令官ラスタル・エリオンだ。
彼は少女に説教をしているイオクの肩を掴むと、グッと自分の方に引き寄せて言った。
「イオク、あまり〝彼〟に関わるな」
「は、はい！　彼!?　え、ええ、わ、分かりました、ラスタル様！」
ラスタルの発言にイオクは混乱しつつも、彼はラスタルの背中に隠れるように身を引く。
「へぇ……僕のこと知っているんだね。あ、そこの馬鹿っぽい人―。僕は男だし、マクギリスの侍女でもないよー」

「ばっ……！」
　反論しようとしたイオクだが、またもラスタルに止められてしまい、言葉を飲み込んで退いた。ラスタルは明らかに子供に対して向けるものではない、鋭い瞳で問いかける。
「ベルフォーク家の一人息子がここに何の用だ」
「コスプレ撮影会だよ、きゃはっ！」
「真面目に答えろ。仮にもここはセブンスターズの関係者以外は許可が無いと立ち入ることのできない場所だ」
「出来心だったの。あまりにも空が透き通っていて、その向こうの宇宙で起こっている戦争が面白くて、どうしょうもなかったんだ。きゃははっ！」
「言わなければ警備兵を呼ぶ」
「ちぇーっ。んじゃあ、正直に言ったら見逃してくれる？」
「ああ」
　ラスタルの返事に安堵した様子の彼は、麗しき唇からその言葉を発した。
「アンドロマリウス」
「残念だな。あれはもうここにはない」
「……そっかぁ。じゃあどこにあるか教えてよ！」

「呪われた御旗を使って何をする気だ」
「さぁ？　オジサンが教えてくれたら、僕も教えてあげよっかなー」
「ならば結構。だがこれだけは覚えておけ」
　ラスタルはイオクを連れてその場を後にする寸前、こう言い放って去っていった。
「世界は君の遊び場ではないぞ、カディア・ベルフォーク」
　この世界の秩序を守る男の瞳の前に、カディアは反論することなく静かに、睨み返した。まるで反抗期の子供のように。自分を否定する存在全てを敵と認識しているような、そんな目をラスタルに向けていた。
　ラスタルとイオクが立ち去った後、カディアは花壇の花を思いっきり踏みつけて、赤い花を引き抜いて海に投げ捨てた。何度も、何度も、何度も、自分の中の苛立ちが収まるまで。
「だから大人は嫌いなんだよ！　僕を、俺を縛るなぁぁ！」
　先ほどの可憐な少女の声から一変し、あらゆるものを噛み砕くような鋭い牙を持つ猛獣のような声調でカディアは叫んだ。
「……ねぇ、あんたは違うよね」
　そして後ろに佇む『男』にカディアは問いかけた。『男』は一言「ああ」と答えると、カディアの肩を叩いて言った。

「警備兵がこちらに向かっている。面倒なことになる前に、立ち去ったほうがいい」
「はいはい。やっぱり大人って汚いよね。きゃはっ」

2

警備兵をテラスに向かわせたラスタルはベンチに腰掛けると、隣にイオクを座らせ、目の前のガラスの向こうに広がる果てしない水平線を眺めながら語り始めた。
「お前には話していなかったな。ベルフォーク家のことを」
「名前すら聞いたことがありません」
カディアとかいう少年は何もかもがイオクにとって異質な存在だった。髪の毛を桃色に染めていることも、男のくせにメイドの格好をすることも、月外縁軌道統合艦隊アリアンロッド総司令官のラスタル・エリオンにあのような言葉遣いをするのも、全てが理解不能であった。個性的、という一言では済ませられるはずもない。
「ベルフォーク家。厄祭戦ではイシュー家に並ぶ活躍をしたとされる名家だ。だが、セブンスターズになることはなかった」
「戦死……ですか？」
「いや、味方を裏切ったからだ。理由は不明だが、相当な死者が出たという。ゆえにセブンスターズの地位を手にするチャンスを失い、しかし功績は認められ権力だけは維持し

たまま現在に至る。功績が大きすぎたせいで、簡単に処刑してしまうわけにはいかなくなったとは何とも皮肉な話よ」

表向きは、ベルフォーク家は貴族の名家の一つとしか公表されておらず、セブンスターズやギャラルホルンに関係しているとは言われていない。しかしながらラスタルたちセブンスターズ内ではベルフォーク家の存在は知られており、その話題を出してはならないという暗黙の了解が広まっている。おそらく知らないのはイオクぐらいだろう。

「そんなベルフォーク家の一人息子がカディア・ベルフォークだ。彼もまたギャラルホルンの兵士だが、問題行動は多いと聞く……」

ラスタルは水平線を睨みつけながら、静かに呟いた。

「祖先の墓から穢れた剣を掘り起こして、彼は一体何をするつもりだというのだ」

世界の秩序は守らなければならない。カディア・ベルフォークがギャラルホルンに溜まった膿であるとするならば、何としてもそれを取り除く必要がある。それこそどんな手段を使ってでも、この世界で好き勝手に暴れさせてはいけない存在なのだ。

3

多くの犠牲のもと、大きな戦いが終わった。

アスナは鉄華団の母艦イサリビ内の医務室にいた。彼女の前には緑色の透明な液体で満たされた医療ポッドがある。傷の再生などを促進する装置で、シラヌイの艦内にはこのような設備が無かった為、イサリビで借りさせてもらっているかたちだ。

「ハナ、調子はどう？」

医療ポッドの中に浮かんでいる花咲はアスナの問いかけに小さく反応すると、呼吸器越しに静かに答えた。

「うん。このお風呂みたいなの気持ちがいいね」

「そう……良かった」

バルバトスと激戦を繰り広げた花咲は身体に深刻なダメージを負っていた。肋骨が何本か折れており、臓器の一部も損傷していたらしい。常人であれば痛みで気絶してしまうかもしれない状態で戦っていたのだ。

さらに戦闘の最中、理由は不明だが何らかのリミッターが外れ、花咲の左腕の感覚を殆ど奪ってしまった。詳しいことは分からないが、阿頼耶識が限界まで調整されていたことと、激しい戦闘でアスモデウス側のシステムの一部が損傷したことが原因であるとされている。

「ごめんなさい。私がもっと早く何かできていたら、こんなことにはならなかったのに」

「うんん、アスナはまた私を救ってくれたの」

アスナを安心させようと花咲は優しく微笑みかけた。
鉄華団も過去に同じような事故があったらしく、バルバトスのパイロットもそれで右眼と右腕の感覚を失っているのだという。そのパイロットも花咲と同じ三本のヒゲ持ちで、ガンダムフレームに乗っている。
「私はアスナを信じていた。そしてアスナは私が信じたとおり、皆を救ってくれた」
「でも……」
「それで充分だよ。アスナは精一杯やった。だから、ジャックもコードンも、月輪の鷹団の皆も誰一人犠牲になることなく戦いを終わらせることができたと思う」
花咲の瞳に悲壮感は無かった。どこか吹っ切れたようにアスナをまっすぐ見つめていた。少なくとも神を信仰する者の瞳ではない。心の底から無条件に信じることのできき、だからこそ安心して背中を預けられる、いうなれば戦友に向ける眼差しだった。彼女も戦いの中で何かに気づくことができたのだろうか。
「本当にありがとう、アスナ」
「うん……」
迷いのない花咲の眼差しが、アスナに突き刺さった。彼女のもう迷いはない。しかし自分は迷ってばかりだ。その迷いでまた誰かを犠牲にしてしまうかもしれない。
アスナは医務室を後にすると、鉄華団団長のオルガが腕を組んで手すりの上に座って

いた。ジャケットスーツで腕組みをして佇んでいる姿には迫力があり、とてもじゃないが同じ目線で会話できるような相手ではなかった。
「おう、あんたか。親友の調子はどうだ？」
「は、はい。やっぱり左腕の感覚が殆どないようです」
「そうか」
　オルガはポケットから携帯食料のスティックとチョコレート味の飲料を取り出すと、アスナに投げ渡した。
「戦いが終わってからずっと飲まず食わずで動き回っていただろ」
「え、あ、そうですけど……」
　既に廃棄コロニーでの戦闘が終わって二〇時間が経過していた。モビルスーツの残骸や捕虜の回収などが終わり、シラヌイを含む武装解除された三隻の戦艦がイサリビに牽引される形で、テイワズの本拠地である歳星へ向かっている。
　その間、敗戦処理やモビルスーツの回収、書類の確認などに追われてアスナはろくに睡眠を取っていなかった。目の下にはクマができており、しかし意識ははっきりとしている。やらねばならぬことが多すぎて寝ている暇もない、と脳がアスナの体に鞭打っているのだろうか。
「寝れねぇなら、せめて食っておけよな」

「あ、ありがとうございます……甘っ」
　チョコレート飲料はとてつもなく甘く、喉の奥につっかえてしまいそうなほどドロドロしていた。それがまたやみつきになる味で、アスナはすぐに飲み干してしまう。
「美味しいです」
「ミカのお気に入りだからな」
「ミカって、バルバトスのパイロットの方ですか……あの人も確か」
「ああ、あいつも二年前の戦いで右眼と右腕の感覚を持って行かれたからな」
　アスナは思わず、飲料のボトルを握り潰してしまい、掠れた声で言った。
「ハナがこうなったのは私のせいです。私がもっと早くライオネルから指揮権を奪って、戦いをやめさせれば。そうしたら、鉄華団の皆さんにも迷惑をかけなくて済んだのに」
「……たしかにそうだな」
　自分は身勝手な人間だ、とアスナは思った。自分のせいだと思い続けることで、逆にそれから目を逸らそうとしているのではないか。誰かを犠牲にしてしまったという重圧から逃げたいのではないか。
　ならばどうすればいい。どうすれば誰かの犠牲から逃げないでいられるのだろうか。
「あんたの選択で沢山の犠牲が出た。それは事実だ」

「……はい」

「だがな。あんたの選択で救えた命があった。武闘派の組織の上に立つ者ってのは、そういうことの繰り返しだ。犠牲にして犠牲にして、犠牲にしていく。常に自分が正しい方向に進んでいるのかって悩んでは、それを振り切って進まなきゃならねぇ」

これから先、アスナが進む道によっては月輪の鷹団の皆を犠牲にして進まなければならないこともあるはずだ。きっと彼女の何倍も多くの命を背負って、オルガという男は生きているのだろう。アスナにはそんなオルガの計り知れない重圧を背負いきれるのか不安で仕方が無かった。

衣食住が保証された世界に生きていた自分が、この世界で切った張ったを繰り返す組織の団長としてやっていけるのか。

「どうしたらいいか私には分かりません……誰かが死んで、傷ついて、自分のせいだと分かっているのに罪滅ぼしもできずに。ただ背負い続けて前に進むなんて……私には」

アスナは涙を抑えながら、震える体でそう言った。

自分を守って死んでいった少年兵たちや、犠牲となっていったブリアンや、左腕の感覚を失った花咲。皆、自分がもっとちゃんとしていれば救えたかもしれないのに。反省して次に活かせなど、思うことはできても納得できない。命は消えたらそれまでだ。アスナがいくら反省しても、罪滅ぼしをしようとしても、どうしようもない。

「あんた、一つ勘違いをしているぞ」
「え？」
「皆の犠牲が自分一人のせいだと言うのは、ただの思い上がりだ。たしかにあんたが強けりゃ救えた命もあるかもしれねぇ。だがな。それで立ち止まって悩み苦しむ悲劇のヒロインになるぐらいなら、前に進め」
オルガは片目をつぶって、静かに、だがはっきりと言った。
「何があっても進み続けろ。歩みを止めるな。それこそ血を吐きながらでも進みやがれ。守るべき家族がいるなら、な」
家族……アスナにとってそれが何なのか、まだはっきりと理解できていなかった。
母親はアスナが物心つく前に家から去ってしまった。父の言うことを聞かず反発したため、隠居させられたらしい。結局、今まで一度も言葉を交わすことのできぬまま、どこかへ消えてしまったのだ。そんな冷たい世界が家族というのなら守る価値などない。
だがもし、シラヌイでヒューマンデブリの子供たちと過ごした温かみのある日々がそうであるなら。アスナは守ろうと思った。月輪の鷹団の皆を、親友である花咲を、家族として。
「俺もな一度歩みを止めてしまったことがあった。相棒が自分のせいで死んだといって、塞ぎ込んじまった。でもな、まだやらなきゃならねぇことがあって、守らなきゃな

らねぇ家族がいた。だから俺は前に進んだ」
　オルガの横顔はどこか悲しげに、アスナには映った。きっと彼もまたどうしょうもなく苦しいのだろう。それでも前に進まねばならぬ理由があるから、今ここにいる。
「あんたは次、何をすればいいと思う？」
「私は……」
「常に考え続けるんだ。誰かの犠牲を乗り越えて、自分は何をするべきか……ってな」
　花咲はアスナを信じてついてきてくれている。彼女だけではない、月輪の鷹団の皆がアスナを信じている。最早、所有権があるとかないとかの話ではなかった。きっとあの時、暗礁宙域で誰一人犠牲にすることなく勝利を手にした時から、そうなのだ。
「……悪りいな。切った張ったの世界の野郎が、あんたみてぇな人間に色々語ってしまって。人が殺し合う戦争なんざ知らないほうがいい。テイワズの上層部に掛け合って、あんたをカタギに戻してやるって選択肢もある。コロニーの実家のほうにもいずれ――――」
「私は前に進みます」
　次にどうすればいいか、既にアスナには見えていたのだ。見えているのにどうしょうもない泣き言ばかり口にして、前に進もうとしなかった。本当に許せなかったのは、立ち止まっている自分だった。

「月輪の鷹団の皆を、私が！」
「そう言うと思ったぜ、団長さんよ」
　オルガはアスナの肩を叩くと、彼なりに笑みを作って言った。
「このまま行けば、月輪の鷹団はテイワズの傘下に入るか、吸収というかたちになるだろうな。どちらにせよ、組織は維持されるはずだ。解体ってなると、団員の今後のことやらがあるし、そこまで面倒を見れるほど優しい世界じゃねぇ」
「はい。だからこそ、私が団長としてやっていきます」
「ああ、俺もあんたを見込んでここまでやっているからな。あんたは強い奴の目をしている。どんだけ殴られても立ち上がって前を向ける……そんな奴の目だ」
　心の底からアスナは彼という人間に憧れを抱いた。自分もこんな人間になれるだろうか。たとえ生まれた場所が違っても、育った環境が違っても、性別が違っても、いつか自分もこんな背中の大きな団長になれるだろうか。
　考えている暇はない。なりに行くのだ。なろう。
「誰かのために傷だらけになれる奴は、強い。さて、そうと決まったら俺は兄貴に話を通してくる。あんたは少し寝ておけ。今にも倒れそうだぞ」
「え、あ、そう見えますかね……」
「ああ、見える。団員に気を遣わせるなよ」

「は、はい！」

オルガはアスナにそう言い残すと、その場を後にした。

第12話：親友（前編）

1

数週間後、アスナたち月輪の鷹団はテイワズの本拠地である歳星にいた。大型惑星間巡航船の名前は伊達でなく、全長七キロメートルという巨大空間の中に回転重力区を持ち、内部には市街地が広がっている。

圏外圏でその名を知らぬ者はいない、木星圏を拠点に活動する複合企業テイワズ。自衛の為に独自のモビルスーツを開発し所有しており、地球圏にも多大な影響力を持つことから、ギャラルホルンでも迂闊に手出しできない組織であった。これほどの組織を月輪の鷹団は敵に回していたというのだから、恐ろしい話だ。

「……まさか直接会うことになるとは」

アスナはそんな歳星の居住区、その中でも一際大きな屋敷の前にいた。屋敷の前には広大な庭が広がっており、荘厳な造りの屋敷はアスナが住んでいたところと同じぐらいかそれ以上に大きかった。周囲に人の気配はないのは、早朝だからか。それとも気配を消して黒服のエージェントみたいなのが潜んでいるのか。どんな無法者でも気を引き締めざるを得ない緊張感がそこにはあった。

月輪の鷹団の今後の処遇についての話し合いのため、アスナはテイワズの代表マクマード・バリストンの住む屋敷に招待されていた。

黒のジャケットスーツに白のカッターシャツを着込んだアスナは、深い赤色のネクタイを締め一歩踏み出した。裏社会は男たちの世界だ。女だからと舐められないように、長かった髪はバッサリと切っておいた。下もスカートではなく、パンツスーツを履いている。

見ようによっては中性的な青年にも見える外見になったアスナは、両開きの扉に手をかける。

（いや、いきなり扉を開けるわけにはいかない。まずは三回ノックだ。違う、まずはインターホンを、インターホンはどこだ!?）

しかしアスナは緊張のあまり、屋敷に入る前から狼狽えてどうすればいいかわからなくなってしまった。そうしていると、自動で扉が開いて中にいた黒いスーツの男性数名に中を案内された。赤い絨毯の上を歩くことが久々で緊張しながらも、まるで美術館のように骨董品が並んだ屋敷の中をアスナは歩く。

圏外圏で絶大な権力を持つ男、マクマード・バリストンとはいかなる人物だろうか。話では聞いたことがあるが、実際にどんな人間かは知らない。オルガ曰く、器のでっけぇ人らしいが、実質マフィア同然な企業の代表と聞けばどうしても気後れしてしま

う。

（指詰めろとかあるのかな、やっぱり……）

スッゾオラー、ザケンナコラー、テメェオトシマエツケロヤゴラァ、などとアスナの脳裏にありとあらゆる罵声と怒号が響き渡る。覚悟を決めなければ、と両手を握り締め、マクマードのいる部屋へと入っていく。

「よぉ、指定した時間よりも三〇分も早かったじゃねぇか」

圏外圏一恐ろしいとされる男は、部屋の奥の椅子に深く座っていた。立ち上がるとアスナの方を向いて、静かに言葉を発する。ヒゲの伸びた初老の男性だったが、堂々とした立ち姿は老いをまるで感じさせないものだった。アスナたちコロニーに住む人間にはあまり馴染みのない和服を着たその男こそが、マクマード・バリストンその人だった。

「あまり早く来すぎると、かえって相手に気ィ遣わせるから心得ておきな」

「は、はいぃ！」

オルガよりもさらに、別次元の迫力をもったマクマードにアスナは心臓を掴まれたかのような感覚に陥ってしまう。

「まぁ座れ」

「はい！」

マクマードが座ると、テーブルを挟んで向かい側のところにアスナも座った。

「返事のでけぇ奴だな。気に入った」
「はい！」
「まぁ、そんな緊張しねぇでも指詰めろとか言わねぇから普通でいな」
「は、はい……」
　アスナの様子がおかしかったのか、少し笑みを浮かべたマクマードは続けた。
「マリーメル家の一人娘だったか。元気なお嬢さんだ」
「父上のことをご存知で？」
「ああ、昔は商売相手だったからな」
「……今回の件は、ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」
　深々と頭を下げたアスナの頭をマクマードは掴んで、上げると静かに言った。
「おめぇさんに謝られても、どうしょうもねぇことだ。そうへこへこ頭下げるもんじゃねぇぞ」
「しかし……」
「今回の件は、フィゲル・マリーメルとライオネル・ランスローが起こした案件だ。報告書にはそう書かれていたしな」
　あくまでもアスナは戦闘中に指揮権を奪って投降しただけ、と報告書にはなっていた。事実そうなのだが、団長という意味では責任があると思いアスナは謝罪したのだ。

それにフィゲルは実の父親。親の起こした厄介事の尻拭いは、子である自分がするのが当然であるとアスナは考えていた。

「アスナ・マリーメルの頭は、月輪の鷹団の頭でもあるんだからな。軽くしちゃいけねぇもんだ、それは」

マクマードの言うことはもっともだった。組織の代表である自分が軽々しく頭を下げるということは、相手が何も言う前に自分の組織が全面的に悪かったと言うようなものである。そうなれば、相手のほうにも過失があった場合であっても、責任の全てを押し付けられてしまいかねない。

結果としてしわ寄せが来るのは、月輪の鷹団の皆だ。

「もっと胸張っていきな。おめぇさんは肝の据わった女だって、オルガからも聞いているぞ」

「肝の据わった……」

「それとかな」

彼はアスナの口元を見て、言った。アスナの前歯はライオネルに殴られて抜けた時のままになっていた。失礼になってはいけないと、慌ててアスナは口元を両手で隠そうとするが、そんな彼女にマクマードは語った。

「意地張ってできた傷ぐらい、誇りな」

そうだ。これは皆を守るために傷だらけになっても立ち上がり、命を賭けて立ち向かった証でもある。マクマードという男はそれを理解し、その上でアスナの行動を認めていたのだ。今まで接してきたどの人間よりも大人だと、アスナは感じた。

切った張ったの世界で生き残るには、それ相応の生き様がある。

「はい！」

対するアスナはまだ知らないことだらけだ。バイオリンの弾き方は知っていても、この世界での生き方はまるで知らない。自分もまだ子供だ。きっとマクマードから見て自分は、拳で握ったフォークでハンバーグを食する幼子だろう。

「で、だ。話はここからだ。月輪の鷹団としての責任は全部とってある。そうだな？」

「ええ……全て」

賠償金は暗礁宙域で鹵獲した敵モビルスーツとライオネルが所有していたモビルスーツと戦艦を売却することで完済できた。特にガンダムフレームは市場で高騰していることもあり、高値で取引することができた。それもこれもタービンズの名瀬という人物が、月のコロニー群での競り市を手配してくれたおかげだ。

ライオネルが雇っていた傭兵たちも責任の所在はライオネル本人にあるとし、不問になって解放される予定だ。生き残ったヒューマンデブリの子供たちは月輪の鷹団のほうで一時的に預かっている。

「これからどうするつもりだ？」
「月輪の鷹団を傭兵団としてまとめあげて、彼らの居場所を作っていきます」
「にしても、後ろ盾がねぇとな」
　そのとおりだ。何の後ろ盾もない無名の傭兵団となれば、受けられる仕事は限られてくる。それこそ安い護衛依頼か、危ない依頼ぐらいだ。
「そこでな。俺はおめぇさんらを見込んで、契約を結ぼうと考えている」
「契約、ですか」
「テイワズと契約を結んだ傭兵団となりゃ、食いっぱぐれはしねぇだろ」
　後ろ盾があればそれだけ信頼度が上がり、傭兵団としての名も売れる。たしかにテイワズからの依頼を最優先にしなければいけないという制約はあるものの、逆に言えば輸送の護衛をはじめとして仕事は山ほどあるということだ。おそらくテイワズ関係の依頼だけで十分、やっていけるだろう。
「二年前のエドモントンでの一件は知っているだろ。あれからギャラルホルンの権威は失墜し、各国は独自に軍備を増強させるようになった。それは圏外圏でも同じことよ。今、テイワズは軍備拡張を推し進めている真っ最中だ。ともなりゃ、月輪の鷹団のような存在は敵に回せば厄介だが、味方にすりゃ心強いってもんだろう。それにちょうど今、やって欲しいこともあるからな」

「本当に、いいのですか」
「ああ、テイワズとしても利になる話だ。傭兵団として契約を結ぶってんなら、うちの連中も文句は言えねぇ。おまぇさんらとテイワズは立場の違いで敵対しちまっていたようなもんだからな」
　そうなれば月輪の鷹団の今後は保障されたということになる。この先どうなるかは分からないが、少なくとも今までのような逃げ回る生活からはおさらばできる。それこそ組織間の面倒なやり取りや、駆け引きは起こってくるだろうが、命を常に狙われている状況よりはよっぽどマシだ。
「これで団員の奴らにも美味い飯食わせてやれるだろ」
　マクマードはそう言うと、アスナの肩に手を置いて深い笑みを浮かべた。

2

「皆、元気にやってるねぇ……」
　ジャックは格納庫の手すりにもたれかかって、眼下に立ち並んでいるモビルスーツたちを眺めながら呟いた。テイワズでは独自のモビルスーツ開発を行っており、その本拠地である歳星には巨大な工廠が存在する。彼は今そこにいた。
　現在、ゴードンのゲイレールと鉄華団のショッキングピンク色のグレイズが向かい

合って、戦闘シュミュレーションの真っ最中だ。これで二〇戦目だが、ゴードンは一度も勝利を手にしていない。それどころか、相手に傷を負わせることもままならない。

それもそうだ。ジャックと違い、ゴードンがモビルスーツに乗り始めたのは暗礁宙域での一件からである。実戦となると、鉄華団との戦闘が初めてだった。阿頼耶識で操縦に関する知識は補えているものの、それでもモビルスーツ戦の経験は浅い。負けて当然だ。

「もう一回お願いします！」

「げぇ!?　まだやるのかよ……」

向こうから気合に満ちたゴードンの声と、疲弊しきった青年の声が聞こえてきた。この前の戦いでは敵に手も足も出せずにやられてしまったのだから、余計に気合が入っているのだろう。

「ついこの間まで敵同士だったっていうのに、ツラ見せ合って話せば何ともないもんだ」

モビルスーツという兵器を使って殺し合いをしていると、相手の顔が見えなくなる。顔が見えないということは、相手が人間であるということを感じにくいということだ。怖いぐらいすんなりと、相手を『敵』だと認識できる。

逆に言えば、顔を見せ合って殺し合いをしていないぶん、敵味方の関係が変わった状況にも順応しやすいのかもしれない。

「敵対していたとはいえ、立場は俺らと似たようなものだったからな」
「……だな」
　ジャックは隣にいる、筋肉質なガタイの良い上半身裸の青年に返事をした。肩にかけたタオルで全身の汗を拭っている。
「そこの汗臭い兄ちゃん」
「昭弘アルトランドだ」
「ん、ああ、悪い。そういやお互い名乗りあってなかったな。俺はジャック・ヒューゲル。でだ。何で昭弘は汗だくなわけ？」
「筋トレに決まっているだろう」
「何でよ」
「筋肉がないといざって時に不便だろう。モビルスーツ戦は体力勝負でもあるんだ。それこそ持久戦になれば、どれだけ疲弊していても敵は待っちゃくれねぇ。体でぶつかっていかなきゃな」
「違うね。余計な筋肉があると繊細な動作がしづらくなる。いくら照準を感覚で補正できるからって、最後の一手間は手動だ。手先の器用さが大事で、指先がごっつくなっちゃ本末転倒だぜ」
「それでも筋肉のほうが大事だろう」

「いや、器用さだ」
細身で必要最低限の筋肉しかないジャックと、全身が筋肉の塊のような昭弘は互いに一歩も引くことなく激論を繰り広げる。しかし狙撃手と近距離から中距離をメインに戦う前衛とでは話が噛み合わず、議論は平行線をたどっていた。
「あんたとは性格合わなさそうだ」
「お前も、もう少し筋肉をつければ違う世界が見えてくるというのにな」
「はいよ……とりあえず逃走時の為に、足の筋肉はとけておきますよっと」
「飲め」
「さんきゅ」
ジャックは昭弘からプロティン入りの特製ドリンクを受け取って、ストローを突き刺して飲み始める。プロティンというもの自体初めてで、これが何を意味するのか彼にはさっぱり分からなかった。ただ一つ、昭弘という人間が持っているのだから筋肉が関係しているのではないだろうかという推測だけはできた。
「美味いね。これ飲むと筋肉つくの？　足にしてよ。腕とかは嫌だから」
「筋トレした後に飲むと効果があるぞ」
「意味ねぇじゃん……」
男二人、プロティン入りドリンクを飲みながら格納庫を眺める。

「あんたさ。何で俺のこと助けたの？」
「お前は死ぬべき人間じゃない。そう思ったからだ」
「弟のことか」
「ああ。俺も似たようなものだからな」
「分からねぇ」
　たしかに自分と同じような立場の人間が敵で、そんな存在に対して戦っている最中に何かを思うことは分かる。敵に同情する気持ちも理解できた。
「戦争で敵のことを思いやる人間なんて初めて見たぜ。あんただけじゃない。鉄華団の人たち皆、俺らが敵だったことを何とも思ってないように接してくる。それどころか、俺らを助けてくれるんだから不思議なんだよ」
　ジャックの弟であるコスターに関してもそうだった。コスターは今まで医療設備もろくにない艦内で過ごしてきた。衛生状態も決して良いとはいえない。そんな彼を鉄華団は歳星に到着してすぐ、ちゃんとした病院のベッドの移してくれたのだ。賠償金の件もまだ完全にカタがついたとは言えない状況でだ。
「お人好し、だと思うか」
「まぁ正直に言えばそうなるね。ましてや圏外圏で名を知らぬ者はいないと呼ばれる、武闘派組織だろ。ますます意味分からねぇ」

「手の届く範囲でならどうとでもなる。なら助けるのが道理ってもんだろ」
「そういうものかね……まったく———」
ジャックは昭弘から視線を逸らして言った。
「こういう時、素直に「ありがとう」って言えない自分が嫌いだね」
自称天才でも理解できないことは山ほどある。知識的なものは本を読めば大体は解決するが、こういうことは今までの価値観をひっくり返して考えなければいけない分、かなり面倒だなとジャックは思った。
「んでさ、あの獅電のパイロットのねーちゃんとはどういう関係よ」
「ラフタのことか？」
「へぇー、ラフタちゃんって言うんだ……。遠目に見たけどめちゃ可愛い子じゃん」
「お前……」
「なにその憐れむような目は!? 君のガールフレンドとかじゃないんだったら、俺が狙っちゃおうかなってさ！ ほら、俺って天才だし美少年じゃん。やっぱり惚れられちゃうかな、と思うのよね。我が世の春がきたりって———」
「あのな」
昭弘はジャックの肩に手を置くと、ゴホンと咳払いをして語った。
「あいつには既に相手がいるんだぞ」

「へ？」
「残念だったな」
よくよく考えれば、ラフタという少女もジャックにとっては敵だった存在だ。そんな人間を可愛いと思える自分がいることに気づいてしまう。よくよく考えるとやはり不思議な話だ。そう思いながら彼は静かにプロティン入りドリンクを飲み干し、「どうしていつも……」と嘆きの声を喉の奥から漏らした。

3

歳星の居住区に立つ豪勢な屋敷は、テイワズの商業部門を担当するＪＰＴトラストの代表であるジャスレイ・ドノミコルスの所有物だ。部屋には彼と数名の部下がおり、向かい側の椅子にはカズマが座っていた。いつものようにアロハシャツを着込んだ軽装でありながら、黒スーツの部下たちと比べても緊張感のある眼差しでジャスレイの前にいた。
「いちおうは月輪の鷹団に関する面倒事は片付けられた。が、あまり旨味のねぇ結果に終わっちまったなぁ」
「月輪の鷹団は正式にテイワズと契約を結んだ傭兵団としてやっていくらしいです」
「こいつがまた気に食わねぇ」

ジャスレイはウィスキーを一口飲むとテーブルに置き、ビターチョコレートを口に入れて噛み砕きながら言った。
「一度はうちに楯突いた組織だ……落とし前はつけたんだろうが、契約まで結ぶとなりゃ話は別だろう。なぁ、カズマ?」
「それに加えて、テイワズと契約を結んだ傭兵団となれば、マクマードが自由に動かせる戦力にもなっちまいます」
「ああ、それもあったな。今後の為にも消しておきてぇところだが……」
ナイフを手に取ったジャスレイは、銀色に鋭く光る刃先を眺める。彼はいざとなれば権力で人を殺せる人間であった。今までそうやって上り詰めてきたし、これからもそうしていくつもりだろう。それが彼にとっての裏社会で生きる術であるのなら。
「むしろ利用しちまいましょう」
「どういうことだ?」
「如何に傭兵団とはいえテイワズと契約したとなりゃ、お目付け役がいて当然でしょう。その役を俺が引き受けます」
「なるほどなぁ。本当、おめぇはタチの悪い男だぜ」
カズマが月輪の鷹団の監視役となれば、必然的に彼の所属するＪＰＴトラストに反発することはできなくなる。契約相手がよこした監視役の所属する組織なのだ。依頼に

関しても優先的に受けなければならなくなるだろう。
　ここでカズマを監視役にしなければ、マクマード側から監視役が選ばれる可能性が高い。そうなればジャスレイの言うとおり、月輪の鷹団は完全にマクマードの私兵と化す。テイワズ代表の地位を狙うジャスレイにとっては面白くない展開だ。
「そうと決まれば明日の会議で、俺が名乗り出ますぜ」
「頼めるか」
「叔父貴のためなら俺は何でもやる男です。任せてください」
　何の地位もなく、奪った食物で生きながらえることしかできなかったカズマに目を付け、世話役にしてくれたのは目の前の男だ。最初は冷たい飯ばかりだった。しかしそこからカズマは成り上がり、叔父貴と呼べる地位まで手に入れた。おそらくジャスレイという男がいなければ、自分は冷たい土の上で野垂れ死んでいたことだろう。
「お前の悪知恵には昔から世話になっているからなぁ。欲しいものがあるなら言ってみろ」
「欲しいもの、ですか」
「ああ、何でもいいぞ。女ならいくらでも用意してやる」
　カズマの脳裏に浮かぶのは、一機のモビルスーツ。暗礁宙域に美しく舞う妖精にも見えたが、同時に鉄華団の悪魔と対等にやりあう鬼神でもあるそれは――――アスモデウ

ス。
「ガンダムフレーム……サブナック、とかいいましたっけ。月輪の鷹団が賠償金のために売却したってやつ。アレですかね」
「そんなものでいいのか?」
「はい。ワガママを言ったつもりなんですけどね」
カズマはタブレットに映ったサブナックの鹵獲時の写真をジャスレイに見せて、静かに微笑んだ。
「しっかし、理由はなんだ? 性能面でいうならギャラルホルン製の量産型でも十分に事足りるはずだろう」
「強いて言うならば、惚れた女に会うので立派な服を着て行きたい……ってところですかね」
ガンダムフレーム機には底知れない可能性がある。それを引き出してみたいとカズマは思った。そう、彼が恋したガンダムフレーム乗りのように。

第１２話：親友（中編）

4

ここはどこだったか。

花咲レゴリスは遠い記憶の中にいた。

硝煙が立ち昇る地球の空は灰色に包まれており、砂塵が足元を覆っていく。銃を持った子供たちが怒声とともに駆け出していた。やがて怒声は銃声に変わり、敵味方双方の断末魔が木霊する。バラックや薄汚れた家屋が建ち並ぶ市街地は、戦場と化していた。

南アフリカの大地、ここは地獄だ。

しかし四年もいれば慣れてきて、感覚が麻痺していく。

『殺せ。敵は目の前の奴らだ。殺せ。人は銃で殺せる。殺せ。殺さねばお前が殺されるぞ。殺せ。これは神のための戦争だ。殺せ。祖国を取り戻すのだ』

無線で流れてくる指揮官の声は様々な理由で、花咲たちを戦わせてくる。そもそもこれは宗教戦争だったか、国境紛争だったか、それとも革命戦争か。花咲はそれをはっきりと覚えていない。いや、そもそも指揮官から知らされていなかった。

花咲もモビルスーツという鋼鉄の装甲を身に纏い、駆け出していく子供たちを蹂躙す

る戦車に向かって銃撃を開始した。花咲はまだ〝阿頼耶識のある〟ヒューマンデブリだった為、地上戦用にチューンナップされたスピナ・ロディを支給されている。生身で突撃していく阿頼耶識なしのヒューマンデブリ――――いや、デブリにすら満たない鉄砲玉のような少年兵よりは幾分かマシだった。

花咲のように「元々は人間だった」ヒューマンデブリは少ない。その殆どが生まれて間もなくヒューマンデブリになった者たちで、阿頼耶識の手術をさせる費用すらも勿体無いと使い捨てにされるような存在だった。中には人間でいたのは、母親の子宮の中だけという者もいた。

生まれてから人間ではなく、鉄砲玉として生きさせられる彼らの命は、豚一頭よりも軽い。正真正銘のゴミクズだ。花咲もまた例外ではない。ただ人間であった期間が長いか短いか。阿頼耶識使いとして使い道があるかないか。それだけの違いだ。

どちらにせよ消耗品であることに代わりはない。

『殺せ。蹂躙しろ。我々を侮辱する売国奴どもを。政敵どもを。悪魔どもを。殺せ。殺せ。殺される前に撃て。上手く撃って殺せ。躊躇せず殺せ。戸惑うことなく殺せ。せっかくだから楽しんで殺せ。笑え。笑いながら殺せ。戦争は楽しいものだ。戦争だ。殺せ』

指揮官の言葉は狂気に満ちていたが、同時に戦場で異常な程に高揚した花咲たちの意

識をさらに鋭くさせる、まるで麻薬のような中毒性のあるものであった。彼の言葉を鵜呑みにするだけで気持ちが楽になった。戦争が楽しいと本気で思える。

この戦場に正気の者は誰一人いない。

気づけば辺り一面に子供たちの死体が広がっており、死臭が漂っている。この暑さなら死体が腐って蛆が沸くのも早い。感染症を引き起こす危険があるため、早いうちに退去しなければならない。最も、退去する味方が生きていればの話だが。

今回は珍しく圧勝だったようで、付近の逃げ遅れた住民を子供たちが引きずり出していた。花咲と同い年ぐらいの少年兵は住民の黒人女性を物陰に引きずり込んで行為に及ぶ。それよりも少し幼い子供たちは敵側の生き残った少年兵一人を複数人で囲んで罵声を浴びせながら甚振っていた。

悪趣味だが、この狂った世界では日常茶飯事だ。生き残った敗者に安楽死する権利はない。ひたすら苦しみながら死ぬだけだった。

そもそも生まれて間もなく鉄砲玉として大人たちに使われてきた彼らに、誰が倫理観を教えるだろうか。

むしろ歪んだ快楽を覚えさせたほうが好都合だ。

人として扱わぬなら、人として育てる必要もない。大人たちは彼らに道徳教育よりも、狂気を植え付けさせた。

「……好きじゃない」

だが花咲個人としてはどうしても馴染めない空気でもあった。まかりなりにも、四年前までは真っ当な教育を受けてきた身だ。人を殺してはいけないという定義を覆すのにも、一年はかかった。おそらく一生、馴染めないだろう。

花咲もモビルスーツから出ると現地住民たちを引きずり出して一箇所に集めた。父親と思われる男性と一人の少年がいた。黒人であることから現地住民であることが分かる。大人の男はすぐに殺せ。反撃されると厄介だ。大人の女は自分たちで楽しむか、上官の大人たちへの献上品として丁重に扱ってやれ。少女は貴重だ。捕縛して、あとで売春宿に売り飛ばせ。少年は――

「銃はこうやって撃つ。さぁ父親を撃て」

花咲は少年にアサルトライフルを渡した。そして銃口を彼の父親へと向けさせる。少年は涙ながらに嫌だと訴えるが、花咲は強く言い返した。

「殺せ」

短い言葉でそう言った。すると周りの少年兵たちも同調し、「何故撃たない！」「臆病者め！」「殺せ！殺せ！」と声を上げる。やがてそれは一つの声となって父親に銃口を向けさせた少年に殺到していく。

「いいから殺せ。すぐ殺せ。考えるな、殺せ。殺しなさい」

花咲は淡々と少年に言い続けた。やがて耐え切れなくなった少年は引き金を引く。

戦場では常に少年兵は不足する。ヒューマンデブリだろうと、それ以下の鉄砲玉だろうと、消耗品だ。ゆえに現地調達する必要があった。肉親を殺したということが分かれば村や家に帰ることもできない。あとは必要最低限の訓練をさせた後、鉄砲玉としてまた消費するだけだ。

指揮官のお気に入りでもあった花咲は、毎回この役を押し付けられていた。子供に銃を持たせて肉親を撃つように強要させる、鬼畜の所業を。しかし断れば自分が死ぬ。だからこそ花咲は躊躇することなくやった。何度も。

全てが終わると、指揮官の男は花咲たちの目の前に現れた。二メートルを越える長身で、迷彩服を着た筋骨隆々とした男だった。彼ほど戦場に似つかわしい人間はいないだろう……ただ一つ、異様な仮面をつけているということ以外は。東の国のほうでは能面と呼ばれているそれは、古典の歌舞などで用いられるものらしい。

そんな細目の女性の顔をした能面を被った男の名は、キリシマ・ハーヴィス。花咲に阿頼耶識の手術をさせた傭兵であり、ここの指揮官でもある。

「よくやった、花咲。お前の働きで今回も勝利を手にすることができた」

「はい」

阿頼耶識の手術を三度も受けた花咲のことを、キリシマは高く買っておりいつも傍に

置いていた。傭兵として戦地を転々とする彼に、花咲はついて行った。そして行く先々で人を殺し、殺されかけ、生きながらえてきた。

「皆もご苦労だった。さぁ次の戦争だ。殺すための準備をしようではないか」

キリシマはいつも戦争のことしか話さなかった。彼はまるで戦争をすることが趣味のように立ち振る舞い、なんの躊躇もなく子供たちを死地に送る。この世界に悪魔がいるとすれば、間違いなく彼のことを指すだろうと花咲は確信していた。

しかし彼の傍にいなければ、ヒューマンデブリの自分は飯もろくに食べることができない。そうでなくとも逃げようとすれば撃ち殺される。キリシマにとって花咲はよくできたヒューマンデブリであるだけで、かけがえのない存在ではなかったのだから。

戦場を生き抜いた後の夜は震えるような恐怖が全身を包んで、とてもじゃないが安らかな眠りにたどり着けるような時間ではなかった。いくら戦争に慣れても心の奥底では拒否反応を未だに示しており、吐き気が止まらない。乾いた大地に布を一枚敷いただけのベッドに横たわり、花咲は胸を抑えた。

自分はモビルスーツのパイロットというだけで優遇されている。阿頼耶識のない子供たちはもっと悲惨だ。夜襲の警戒のために交代で見張り番をしており、睡眠もろくにとれていないのだから。

「……いつになったら」

この地獄は終わるのだろうか。

苦しい。楽になりたい。でも死にたくない。生きたい。生きて――――花咲はポケットに詰め込んでいたものを取り出した。この人生の中で唯一、親友と呼べる少女に送るはずだった誕生日カードだ。

辛くなったときはいつも、これを胸に抱いて眠っている。

自分を命懸けで助けてくれた人、いや神にも等しい存在。こんな地獄の中にいても生きようと思える理由でもあった。花咲は彼女に再び会うために今を生き延びている。もう一度会って、この誕生日カードを渡して、命を救ってくれた恩を返したい。

「私の神様……アスナ、アスナ……アスナ――――」

アスナのために生きていける人生であるように、花咲は流れる涙を拭うことなく瞳を閉じてひたすら神の名前を唱え続けた。すると気持ちが楽になっていく。恐怖や罪悪感や疎外感や、何もかもが消えていく。暖かな気持ちになっていった。

ずっと花咲を包み込むように、幼き日の思い出が広がっていく。

「アスナ、会いたい……アスナ、アスナ……」

そして――――

「アスナ」

目が覚めると、花咲は無重力の中にいた。目の前には大破してもなおその鋭い双眸を突き立ててくるアスモデウスと、眠りについていた花咲を優しく包んでいるアスナがいる。スーツを着たアスナは花咲の体を抱きしめ、格納庫に佇むアスモデウスの前で静かに浮かんでいた。

「ハナ、起きた?」

「……私、眠っていたのね」

どうやら花咲はアスモデウスと向かい合って考え事をしているうちに眠ってしまっていたようだ。その間に、長く怖い夢を見てしまっていたのか。

「ごめん、アスナ。ずっとこうしていて大変じゃなかった?」

「うんん。私も仕事が終わって疲れちゃってさ。こうして、ハナをぎゅーってして癒されていたところだから!」

アスナは花咲を強く抱きしめると、無邪気に笑ってみせた。

「ハナならここにいるかな、って思って寄っちゃった」

「……うん。ちょっとこの子を眺めて考え事してた」

ここはテイワズの重工業部門を担当するエウロ・エレクトロニクスの所有する工廠だ。廃棄コロニーでの戦闘で大破したアスモデウスはここで改修を行われる予定だっ

た。月輪の鷹団がテイワズと契約を結んだことにより、条件付きでテイワズの工廠にてモビルスーツの改修を格安で行ってもらえるようになっている。

「どんな感じになるのかなって、気になっちゃって」

「アスモデウスはハナの愛機だもんね」

「いつの間にか、偶然が重なってそうなったわけだけど。気に入ってはいるかな」

その条件というのが、テイワズの試作品のテスト機としてアスモデウスを使用するということだ。テイワズは独自のモビルスーツフレームの開発にも手を出しているなど、軍備拡大の真っ最中である。そんな中で開発した武装やモビルスーツのパーツの試作運用を行う必要が出てきた為、その役目を月輪の鷹団のエースパイロットである花咲と愛機アスモデウスに任せることになったというわけだ。

テイワズのトップであるマクマードは、敗北こそしたのもの鉄華団のバルバトスと対等に渡り合った花咲の実力を高く評価しているようで、実戦データを集めるのに最適であると判断した。ゆえに実戦テストも兼ねて最新鋭の装備が月輪の鷹団に格安で提供されることになっている。

月輪の鷹団はその装備を実戦で使い、そのデータをテイワズに渡すこと。それが契約の内容だ。賠償金やモビルスーツの修理で資金難の月輪の鷹団にとって、これ以上ない条件であった。

「この子のおかげでアスナを助けることができた」
「じゃあお礼を言わなきゃね」
「モビルスーツよ？」
「何にでも意思は宿るものだって私は思うな……アニミズムみたいな？」
「よく分からないけど、アスナが言うなら間違いないわね」
花咲はアスモデウスの傷ついた頭部に手をあて、瞳を閉じて呟いた。
「……ありがとう」
返事はなかった。ただそこには冷たい装甲があるだけで、生気は何一つ感じさせない。だがその冷たい装甲の奥に、微かな魂の気配を花咲は少しだけ感じ取っていた。それが喜んでいるのか泣いているのか、花咲には分からなかった。
「アスモデウスが実験機になってくれるおかげで、なんとか資金難も乗り越えられそうだけど……試作品って大丈夫かな」
暗礁宙域で戦ったテイワズの試作モビルスーツもそうだ。試作品ということは最新鋭である一方、予期せぬ不具合が発生する可能性も孕んでいる。それはつまり花咲を危険に晒すかもしれないことであった。
「大丈夫。私と、この子ならできる気がする。それに私にはアスナがいるもの」
「ハナ……」

「やるよ、私」

花咲はアスナをまっすぐ見つめた。アスナを信じていれば大丈夫だ。安心して前に進むことができる。今までもそうだったように、きっとこれからもそうなのだ。

「そういえば、さっきから何を握っているの？」

アスナは花咲が右手に握り締めているものを指差して言った。花咲は眠っている間、ずっとそれを胸に抱いていた。あの時の誕生日カードのように。

「これ、貰ったの」

右手を開けると、そこには一本の口紅があった。艶のある黒いケースに入っているもので、真っ赤な大人びた色のものであった。

「え、どこで!?」

「〝きれいなねーちゃんのいる店〟で」

「えええええっえええええええ!?　え、それって、あの、その」

「そーぷ、ってところ」

アスナはまさかの急展開に開いたままの口が閉じずにいた。たしかに歳星の歓楽街ではそういう店が数多く存在すると聞いたことがはある。しかもかなりの高レベルらしく男なら一度は行ってみたい楽園だというじゃないか。

しかしそのような場所に花咲が行くとは思えないし、そもそも同性でもサービスを受

けられるものなのか。いやいやそもそも――とアスナは、かき乱された思考を必死に整理しようと頭を抱える

「鉄華団のシノって人が訓練終わりに、ジャックやゴードンに一緒に行かないかと誘っていたの。でもジャックは「童貞は純愛の中で捨てたいんだ」と、ゴードンは「僕の恋人はモビルスーツですから」と断って、途方にくれていたのね。それで――」

「私が一緒に行きます、と」

「うん。奢ってくれるらしかったから……。女の子でも興味があるの、って言ったら連れて行ってくれた」

「凄い……ハナって大胆なのね」

「でもまさか、そういうことをする場所だなんて……」

「知らなかったの!?」

「うん」

花咲は今まで戦場しか知らない少女だった。それ以外の知識は忘れたか、元々持っていないかのどちらかだ。勿論、風俗に関する知識などあるはずがない。

「綺麗な女の人ってどんなのだろう、って気になったの。きっとアスナみたいな人ばかりいるのかなーって思ってた」

「いやまぁ、私よりはレベル高いと思うよ」

「でも違った。綺麗だけど、アスナほどじゃなかった。おっぱいはアスナより大きかったけど」
「……」
　アスナは自分の胸に両手を当てて、しばらく考え込んだ後、落ち込んだ。
「綺麗な女の人と一緒の部屋になったはいいけど何もすることがなくて、せっかくだから話をしたの。今までのこととか、色々……そしたら、これを」
「口紅を？」
「うん。化粧したら可愛くなるよ、って教えてくれた。化粧って何か知らなかったから色々教えて貰ったわ。それで思ったの」
　花咲は知らないことだらけだ。だからこそ知りたいと思った。自分もアスナのように色々なことを知ることで前に進んでいける気がしたから。それは憧れでもあり、アスナと少しでも同じ場所に立っていたいという願いからきたのかもしれない。
「可愛く、なりたいな……って」
「ハナ……」
「おかしい、わよね。戦場で人を殺すことしか知らない私がそんなこと」
「素敵だと思うよ」
「本当？」

「うん！　今でも十分ハナは可愛いけど、お化粧したらもっと可愛くなるかも！」
「そう、かな……」
どこか嬉しくなって、花咲は口紅をそっと胸元に抱き寄せて、赤くなった頬を隠すようにうずくまった。今まで抱いたことのない感情に戸惑いつつも、これでいいんだと素直に花咲は思うことができた。いや、きっと忘れていたのだ。
硝煙と死臭の記憶が八歳までの花咲を無かったことにし、戦争マシーンに仕立て上げていただけなのだ。幼い日、花咲とアスナが一緒にいた時も、もしかすれば同じような会話をしていたかもしれない。
「変わったね、ハナ」
「うん……何だか不思議な気分。思い出したような、変わったような、新鮮なような、懐かしいような」
「ハナにとって私は神様？」
「神様だった。でも今は親友」
心の底からアスナを信じていられる。信じて背中を預けられる存在でもあり、誰よりも大切な存在でもあった。だからこそ今は素直にそう言えた。
「アスナ、色女になったね」
「え？」

花咲は、欠けた前歯がそのままになっているアスナの口元を指差して笑ってみせた。